

クラシックの 聴き方入門

名曲のスタイル分析 全80曲

舟橋三十子 著



yamaha music media corporation

クラシックの 聴き方入門

名曲のスタイル分析 全80曲

舟橋三十子 著

はじめに

コンサートに出かけたり、CD や DVD でクラシック音楽を聞く時、作曲家や演奏家の経歴だけでなく、曲の仕組み、成り立ち、構成などを知っていると、どんなに楽しいでしょう。作品のスタイルは作曲家によって違いますが、ちょうど私たちが映画やドラマを見る時に、ストーリーだけでなく時代背景や演出方法、舞台装置、照明など作品の裏側を知ることによって、より深い理解ができるのと同じことです。

名曲のスタイルを分析し、その曲の背景を知り、クラシック音楽をもっと楽しく聴きましょう。

CONTENTS

序 章

動機(モティーフ)	006
01 交響曲第5番「運命」より 第1楽章(ベートーヴェン)	008
02 交響曲第40番より 第1楽章(モーツアルト)	010
03 『展覧会の絵』より「プロムナード」(ムソルグスキー)	012
04 円舞曲《美しく青きドナウ》(J. シュトラウスⅡ世)	014

第1章

2部形式・複合2部形式	016
01 ソナタ ホ長調 K.380 (D. スカルラッティ)	018
02 『アンナ・マグダレーナ・バッハのための音楽帖』より 「メヌエット」ト長調 BWV Anh.114 (J. S. バッハ)	020
03 野ばら(シーベルト)	022
04 『24の前奏曲集』作品28より 第7番 イ長調(ショパン)	024

第2章

3部形式・複合3部形式	026
01 『子供の情景』作品15より「トロイメライ」(シューマン)	028
02 小犬のワルツ(ショパン)	030
03 アンネン・ポルカ (J. シュトラウスⅡ世)	032
04 ハンガリー舞曲 第5番(ブラームス)	034
05 ピアノ組曲《ドリー》作品56より 第3曲「ドリーの庭」(フォーレ)	036
06 愛の挨拶(エルガー)	038
07 『2つのアラベスク』より 第1番 ホ長調(ドビュッシー)	040

第3章

変奏曲形式	042
01 ゴルトベルク変奏曲 (J. S. バッハ)	044
02 無伴奏ヴァイオリン・パルティータ第2番より 「シャコンヌ」(J. S. バッハ)	046
03 「キラキラ星」の主題による12の変奏曲(モーツアルト)	048
04 ディアベッリの主題による33の変奏曲(ベートーヴェン)	050

第4章

ロンド形式 058

- 01 《パルティータ》第2番より
 第5曲「ロンド」BWV826 (J. S. バッハ) 060
- 02 かっこう (ダカン) 062
- 03 フルートとハープのための協奏曲より 第3楽章 (モーツアルト) 064
- 04 エリーゼのために (ベートーヴェン) 066
- 05 舞踏への勧誘 作品65 (ウェーバー) 068
- 06 《幻想小曲集》作品12より 第2曲「飛翔」(シューマン) 070
- 07 スペイン交響曲より 第5楽章 (ラロ) 072
- 08 序奏とロンド・カプリチオーソ (サン=サーンス) 074
- 09 ティル・オイレンシュピーゲルの愉快ないたずら (R. シュトラウス) 076
- 10 ヴァイオリン協奏曲二短調 作品47より 第3楽章 (シベリウス) 078

第5章

ソナタ形式 080

- 01 交響曲第94番「驚愕」より 第1楽章 (ハイドン) 082
- 02 弦楽四重奏曲第77番「皇帝」より 第1楽章 (ハイドン) 084
- 03 交響曲第7番より 第1楽章 (ベートーヴェン) 086
- 04 ヴァイオリン協奏曲より 第1楽章 (メンデルスゾーン) 088
- 05 ピアノ協奏曲イ短調より 第1楽章 (シューマン) 090
- 06 交響曲第6番「悲愴」より第1楽章 (チャイコフスキー) 092
- 07 交響曲第9番「新世界より」より 第1楽章 (ドヴォルザーク) 094
- 08 交響曲第1番「巨人」より 第1楽章 (マーラー) 096
- 09 ソナチネより 第1楽章 (ラヴェル) 098

第6章

ロンド・ソナタ形式	100
01 ピアノ協奏曲第20番より 第3楽章(モーツアルト)	102
02 交響曲第35番「ハフナー」より 第4楽章(モーツアルト)	104
03 ピアノ・ソナタ第8番「悲愴」作品13より 第3楽章(ベートーヴェン)	106
04 ヴァイオリン・ソナタ第3番二短調 作品108より 第4楽章(ブラームス)	108
05 ピアノ協奏曲イ短調より 第3楽章(グリーグ)	110

第7章

カノンとフーガ	112
01 カノン(パッヘルベル)	114
02 小フーガ ト短調(J. S. バッハ)	116
03 トッカータとフーガ 二短調(J. S. バッハ)	118
04 ピアノ五重奏曲変ホ長調より 第4楽章(シューマン)	120
05 ヘンデルの主題による変奏曲とフーガ(ブラームス)	122

第8章

オペラ	124
01 歌劇『フィガロの結婚』より レチタティーヴォ(モーツアルト)	126
02 歌劇『魔弾の射手』ジングシュピール(ウェーバー)	128
03 歌劇『椿姫』より 「ああ、そはかのひとか」「花から花へ」(ヴェルディ)	130
04 歌劇『蝶々夫人』より アリア「ある晴れた日に」(ブッチーニ)	132

第9章

宗教曲	134
01 マタイ受難曲(J. S. バッハ)	136
02 カンタータ第147番より「主よ、人の望みの喜びよ」(J. S. バッハ)	138
03 オラトリオ「メサイア」(ヘンデル)	140
04 レクイエム(ヴェルディ)	142

第10章

いろいろな曲種	144
01 管弦楽組曲第3番ニ長調 (J. S. バッハ)	146
02 24の奇想曲 (パガニーニ)	148
03 歌劇『ウィリアム・テル』序曲 (ロッシーニ)	150
04 交響詩《レ・プレリュード》(リスト)	152
05 ハンガリー狂詩曲 (リスト)	154
06 動物の謝肉祭—標題音楽 (サン=サーンス)	156
07 弦楽セレナーデ ハ長調 (チャイコフスキイ)	158
08 交響組曲《シェエラザード》(リムスキイ=コルサコフ)	160
09 行進曲「威風堂々」第1番 (エルガー)	162
10 交響的物語《ピーターと狼》(プロコフィエフ)	164
11 ラプソディ・イン・ブルー (ガーシュウィン)	166

第11章

クラシック音楽のジャンル	168
01 ヴァイオリン協奏曲集《和声と創意の試み》より 「四季」(ヴィヴァルディ)	170
02 ブランデンブルク協奏曲 第5番 (J. S. バッハ)	172
03 モテット「踊れ、喜べ、汝幸いなる魂よ」(モーツアルト)	174
04 連作歌曲集《冬の旅》(シューベルト)	176
05 幻想交響曲 (ベルリオーズ)	178
06 バレエ音楽《白鳥の湖》(チャイコフスキイ)	180
07 付隨音楽《ペール・ギュント》(グリーグ)	182
08 オペレッタ『メリー・ウィドウ』(レハール)	184
09 組曲《惑星》(ホルスト)	186
10 ボレロ (ラヴェル)	188

あとがき	190
索引	192

動機（モティーフ）

基本は2小節の短いメロディから始まります。

動機（モティーフ）とは、音楽を構成する一番小さな単位のことです。人間でいえば細胞に相当するものといつてもいいでしょう。クラシック音楽はもちろんのこと、ポップスや演歌にいたるまで、あらゆる音楽は、このような動機がいくつか集まってできています。

音楽以外での「動機」という言葉は、一般的に「人が意志を決めたり、行動を起こしたりする直接の原因」という意味で使われます。例えば、「犯行に及んだ動機」「この大学を受験した動機」のように使われますね。音楽の世界での「動機」とは「音楽を構成する最小単位」という意味である、と最初に書きましたが、作曲家たちは、作曲しようと思った原因＝「作曲の動機」を音楽の動機（モティーフ）に託しているとも考えられます。

動機は、音の長さ、リズム、旋律、和声上の特徴をもつと考えられています。それらが持つ特徴から、それぞれはリズム動機、旋律動機、和声動機等と分類されます。また、2つ以上の特徴を合わせもった動機もあります。

動機の長さは特に決められていませんが、基本的には2小節から成り立っています。というのは、2小節以下では音楽として認められないからです。しかし、時には1音から動機と考えられる場合もないわけではありません。この動機が、さまざまな変化をともなって反復され、楽曲を展開へと導いていきます。この動機をさらに2つに分けて、そのひとつひとつを「部分動機」と呼ぶこともあります。

この動機の発展によってできた小さな段落を「小楽節」と呼びます。一般的には動機が2つ集まつたもので、基本的に4小節でできています。この小楽節が楽曲を構成する要素のひとつで、主題（テーマ）と呼ばれています。

この小楽節が拡大され、ひとまとまりの旋律になると、これは「大楽節」と呼ばれます。基本的には、小楽節の倍の8小節で構成されています。つまり、動機（2小節）→小楽節（4小節）→大楽節（8小節）というように倍々

になっているのです。

図で表すと次のようにになります。

大楽節								
小楽節								
動機								
部分動機								
小節数	1	2	3	4	5	6	7	8

ただし、実際の曲の主題は、4小節未満のものから數十小節のものまで、その曲の規模によってさまざまです。

小説や演劇などに作者の訴えたい「テーマ」があるのと同じように、作曲家たちも、自分が一番訴えたいことを主題に書いています。この主題は、それを聴いた聴衆に、一度聴いたら忘れられないようなインパクトを残さなければなりません。それだけに、作曲家はこの主題を作曲するのに、大変な精力を注ぎます。曲の規模によっては、複数の主題がある作品もあります。その場合には、それぞれの主題は第1主題、第2主題…と呼ばれ、主題ほどインパクトがない場合や、それほど重要でないけれども、それなりの存在感があるような場合は、「副主題」と呼ばれたりします。

音楽は、この小さなパートである動機(モティーフ)や、主題(テーマ)から広がって、樂式(形式)、調性、スタイルなどを駆使して、生み出される時間芸術です。樂譜はありますが演奏され聴くことで、演奏者と聞き手が空間を共有し、時空間の中でイメージ・物語を想像して楽しめます。

少し無理はありますが、楽曲を書物になぞらえると下記のようになります。

BOOK	MUSIC
物語の舞台設定	交響曲、協奏曲、交響詩、オペラ等
プロット(構造)	樂式・形式 (ソナタ形式、三部形式、ロンド形式等)
登場人物	動機(モティーフ) 主題(第一主題、第二主題)等
ジャンル (私小説、推理小説、エッセイ集、ビジネス書、SF小説等)	調性・拍子・スケール(音階)等

このノックの音こそが動機です

まず、楽譜【譜例1】を見てください。

この休符1つと4つの音は、有名な交響曲第5番、俗に「運命」と呼ばれている曲の第1楽章の冒頭です。

この出だしは非常に印象的で、一度聴いたら忘れないので、よく曲名当てクイズで使われたりします。この曲名は、ベートーヴェンが「運命がこのように戸を叩く」と言ったとの逸話からきていますが、作曲者自身が名付けた題名でないということは、よく知られていますね。このノックの音こそが動機なのです。

ハ短調で書かれた冒頭の動機は、1楽章全体を通して曲を支配しています。この動機は、全部の弦楽器とクラリネット2本で演奏されます。他の管楽器は加わっていません。この当時、クラリネットという楽器はまだ新しかったため非常に珍しく、フルートなどと異なり、まだそれほど普及していない管楽器でした。

この動機は、ヴァイオリン、ヴィオラ、チェロ、コントラバスが2オクターヴの音の幅で同じ音を演奏しています。曲の始まりは、4分の2拍子の最初の拍の裏から始まっています。強拍である1拍目の頭が8分休符になっています。アウフタクト(弱起)、すなわち小節の1拍目以外の拍から始まる旋律で書かれているのです。この部分の演奏が指揮者によって異なるのは、フェルマータが2小節目に書かれているため、この長さの解釈が人によって異なるからです。しかもこの動機は2回繰り返されており、1回目は2分音符にフェルマータですが、2回目の動機は1回目と異なり、2小節に延ばされた2分音符、すなわち4拍分の音にフェルマータが付けられています。この2回のフェルマータの長さが、指揮者の解釈によって異なり、それが個性となつて表れてきます。

冒頭の主題は、第1楽章のいたるところに形をえてちりばめられ、執拗に繰り返されて、曲は進行していきます【譜例2】。

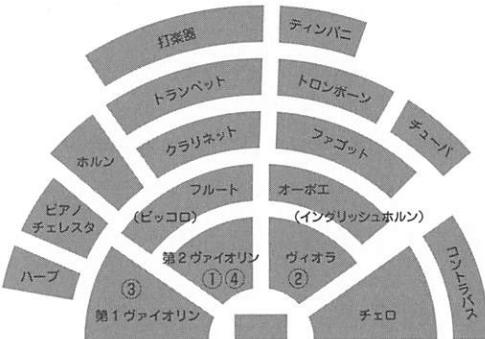
譜例1 冒頭に出てくるノックの動機

Allegro con brio $\text{♩} = 108$

●リズムパターン
1 2 3 4
(ン) タ タ ター

譜例2 第1楽章 各楽器に受けがれる「ノックの動機」

●オーケストラが演奏する順番



ルートヴィヒ・ヴァン・ベートーヴェン
(Ludwig van Beethoven 1770–1827)



クラシック音楽の代表的な作曲家の一人で、ドイツのボンで生まれました。彼の音楽の偉大さは、主観性を明確に打ち出し、作曲家の独創的な様式を確立し、音楽の表現力を拡大したこと、そこに個人と時代のメッセージを込めて、普遍的な理念と理想を音楽に表現した最初の作曲家だったことです。

ため息は3回まで

モーツアルトはオーストリアのザルツブルクに生まれた作曲家で、ハイドンやベートーヴェンとともに、西洋音楽史のうえでは古典派を代表する作曲家のひとりです。

この交響曲の第1主題は非常に印象的です。音楽の専門家のみならず、モーツアルトの交響曲といえばすぐにこのメロディが自然と口ずさんで出てくるほど有名な曲の出だしです。また、モーツアルトは生涯に41曲の交響曲を書きましたが、そのなかで短調の交響曲はこの第40番と、映画「アマデウス」で有名になった第25番しかありません。2曲ともト短調で書かれています。

第1ヴァイオリンと第2ヴァイオリンが、1オクターヴの間隔で有名な下行する旋律を3回繰り返した後、そこから数えて6度上の音に跳躍します【譜例1-1・2・3・★印】。

跳躍したこの主題は、今度はその高い音から順次下行していきます【譜例2】。その後、この上行・下行する2つの動機と全く同じリズムで、今度は1音下の音から始まるメロディが繰り返されます。この旋律も同じように3回繰り返され、最後は前回と同様に跳躍して、その高い音から順番に下行していきます【譜例3】。

『交響曲第40番』では、印象的なこの主題がヴァイオリンによってまさに「ため息」をつくように、そっと、ひそやかに演奏されることから、俗に「ため息のモティーフ」と呼ばれています。これは、当時の交響曲の慣例からするとかなり異例な始まりでした。

こうして「悲哀」や「嘆き」を表現する短調をもとに、「ため息のモティーフ」がいたるところにちりばめられたこの交響曲は、非常に個性的で特徴のある作品となりました。それだけに強い印象を残す、現在でも人気のある曲となっています。

この隣同士の音(2度音程)から始まる動機は、第1楽章だけでなく全曲を通して他の楽器に引き継がれていき、曲全体を支配していきます。

譜例1 ミレレが3回くり返される。このテーマを「ため息のモティーフ」と呼んでいる。

第1ヴァイオリン

演奏指示: *p*

标注: <1>, <2>, <3>

星号标记在第三个乐句的最后一个音符上。

譜例2 ★②の音から順次下行

标注: 下行するモティーフ

譜例3 (5小節～) 1音下がってレドドと再び始まる。★③の音から下行。

标注: 下行するモティーフ

ヴォルフガング・アマデウス・モーツアルト
(Wolfgang Amadeus Mozart 1756 – 1791)



モーツアルトはピアノ、ヴァイオリンのほかに、フルート、ファゴット、オーボエ、クラリネット、ホルンなどの管楽器のための協奏曲を数多く作曲しています。特に《クラリネット協奏曲》は当時のウィーンのクラリネットの名手であるアントン・シュタードラーのために書かれました。モーツアルトは彼のために、この協奏曲ともうひとつの傑作《クラリネット五重奏曲》を作曲しています。

ラヴェルのおかげで一躍脚光を

《展覧会の絵》は、ロシアの作曲家バラキレフ、キュイ、ボロディン、リムスキーキー＝コルサコフらとともに「ロシア五人組」の一人といわれたムソルグスキーの代表的な作品です。

冒頭の動機は伴奏のない単旋律で演奏され、展覧会場の絵と絵の間を歩いている雰囲気を、4分の5拍子、4分の6拍子という拍子の変化で生き生きと表しています【譜例1】。この部分は曲の前奏のようでもあり、また絵と絵を結ぶ間奏のようにも聞こえます。

「プロムナード」というのは散歩道という意味ですが、ここでは展覧会の絵を見る人が歩いている様子を表しています。展覧会の会場に入って絵を見ながら、次の絵に移ってまた鑑賞する、それからまた次の絵に行く…、ということでしょう。全曲中に計5回、このプロムナードのメロディが現れます。

もともとは地味なピアノ組曲でしたが、さまざまな作曲家によってオーケストラのために編曲されました。そのなかでも「管弦楽の魔術師」とも呼ばれたモーリス・ラヴェルの編曲によって、この曲は一躍有名になりました。オーケストラ版の「プロムナード」は、トランペットのソロで開始されます。この同じ旋律は、3小節目からは和音の伴奏を伴ってもう一度現れます。ラヴェルのオーケストラ版では、ホルン、トロンボーン、チューバがこの和音を演奏します。このハーモニーの響きはとても魅力的です。

なお、この曲のように1小節から数小節ごとに拍子が変化するのを「変拍子」といいます。変拍子になると、必然的に強拍のアクセントが小節によって異なります【譜例2】。それが、この動機が印象的なメロディに聞こえる理由のひとつになっています。

また、このプロムナードの旋律は、音階の4番目と7番目の音を抜いた、日本では「ヨナ抜き音階」と呼ばれる音階で書かれています【譜例3】。西洋音楽で一般的な7つの音を持つ音階とは異なるので、その点からも異国的な雰囲気を感じさせます。

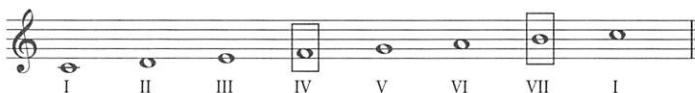
譜例1 絵と絵の間を歩く動機(テーマ)



譜例2 変拍子 アクセント(>)の位置がずれていく。

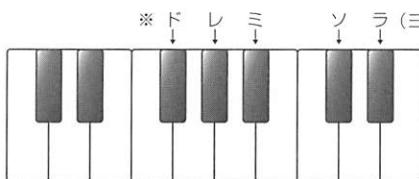
●5拍子	3拍子+2拍子	> 1 2 3 + > 1 2
	2拍子+3拍子	> 1 2 + > 1 2 3
●7拍子	4拍子+3拍子	> 1 2 3 4 + > 1 2 3
	3拍子+4拍子	> 1 2 3 + > 1 2 3 4
	2拍子+3拍子+2拍子	> 1 2 + > 1 2 3 + > 1 2

譜例3 ハ長調の音階



(この4番目と7番目の音がない音階をヨナ抜き音階という。)

ピアノの黒鍵を弾くとこの音階になります。



※移動ドでそうきこえますね



キエフの大門

モデスト・ペトローヴィチ・ムソルグ斯基
(Modest Petrovich Mussorgsky 1839 - 1881)

ムソルグスキーが、友人の建築家であり画家でもあったV.ハルトマンの遺作展の想い出のために作曲した作品です。「カタコンブ」「キエフの大門」など個性的な10曲の小品が、プロムナードで繋がれています。ムソルグスキーはこの曲を書いた後、アルコール中毒と生活苦から衰弱し、この世を去ってしまいます。

シュトラウス・ファミリーの代表作

ヨハン・シュトラウスはオーストリアのウィーンで活躍した作曲家で、父親と同じ名前のため、シュトラウスという名前の後に〈II世〉と付けることで区別しています。弟にはヨーゼフとエドワルト2人のシュトラウスがあり、どちらも作曲家として兄のように多くのワルツやポルカを世に送り出しています。

第1ヴァイオリンと第2ヴァイオリンが小刻みに繰り返すトレモロという奏法で和音が鳴り続けるなか、2小節目からホルンのソロが登場して、後に出てくる主旋律のテーマを奏します【譜例1】。この動機が演奏されて曲の主題が始まるまでに長い前奏が続きます。まずヴァイオリンのトレモロが終わると、ワルツのリズムである4分の3拍子で華やかな舞踏会の雰囲気を盛り上げる前奏が続き【譜例2】、その後にやっと主題【譜例3】が登場します。この主題は4小節です。

ウィンナ・ワルツは一般的に、4分の3拍子のそれぞれの拍が等分に演奏されるのではなく、1拍目は短く、2拍目が少し長くなる感じで、いわゆるウィーン訛りとでもいえる独特な雰囲気をかもし出しています。またテンポが速いため1小節を1拍にとることもあります。

ちなみに、この長い前奏は、芝居や演劇が始まる前に「前口上」があるのと同じことで、フルコースのフランス料理にたとえると、まずアペリティフ(食前酒)を飲みながら食欲を増進させていく、次に前菜やスープが出てきて、それから待ちに待ったメインディッシュの登場となるのと同じことです。

この曲は毎年、お正月にウィーンで行われるウィーン・フィルハーモニー管弦楽団の「ニューイヤーコンサート」のアンコール定番曲でもあり、この弦楽器のトレモロを聴いただけで聴衆の拍手が起こることからも、その人気の高さがうかがえます。冒頭の数小節を演奏した後、指揮者は必ず曲をいったん休止して、指揮者と楽団員が「新年おめでとうございます」と、世界各国に向けて挨拶するのが恒例になっています。また、映画「2001年宇宙の旅」で、宇宙船ディスカバリー号が月に向かう場面でも効果的に用いられています。

譜例1 冒頭 後に出てくるテーマをホルンが奏します。

Andantino

The musical score shows a horn part (Holz) in G major, 6/8 time, starting with a rest. It leads into a section labeled "Solo" where the horn plays a melodic line over a sustained note from a string instrument (弦楽器のトレモロ). The dynamic is marked *p*. The strings play a rhythmic pattern of eighth and sixteenth notes. The violins (ヴァイオリン) provide harmonic support with sustained notes.

譜例2 前奏は華やかな装飾音を伴った音型で奏される。(主題への期待が高まる。)

Tempo di Valse

The musical score shows a first violin part (第1ヴァイオリン) in G major, 3/4 time, marked *p*. The violin plays a continuous pattern of eighth and sixteenth notes, creating a decorative sound. The dynamic changes to *cresc.* towards the end of the excerpt. The violin's performance builds anticipation for the main theme.

譜例3 テーマが始まる。(ハ長調で歌うと、ドミソソ～と始まります。)

The musical score shows a first violin part (第1ヴァイオリン) in G major, 3/4 time, marked *p*. The violin begins the main theme with a melodic line consisting of eighth and sixteenth notes. The dynamic remains soft throughout the excerpt.

ヨハン・シュトラウスⅡ世
(Johann Strauss 1825 - 1899)



オーストリアに伝わる3拍子の農民舞曲「レントラー」を、優雅なワルツへと発展させた功労者です。同名の父親は「ワルツの父」と呼ばれ、息子は「ワルツ王」と呼ばれています。ワルツ、ボルカの舞曲だけでなく、オペレッタの分野でも成功を収め、まさに19世紀のウィーンを代表する作曲家のひとりだということができます。

第1章

2部形式・複合2部形式

異なる2つの部分から成り立っています。

2部形式とは音楽の形式のひとつで、曲全体が大楽節2つで成り立っている曲の形式です。2つの大楽節は、まったく対照的な場合と、少し似かよった場合とがあります。記号で表してみると、対象的な場合はA-B、少し似ている場合はA-A'となります。最も単純な音楽形式のひとつで、あらゆる音楽の基礎となっている形式ということができます。

最もよく用いられる2部形式を図で表すと、次のようにになります。

A		B	
a	a'	b	a'（またはb'）

この図の記号A・Bは大楽節を示し、a・bは小楽節を示しています。

このように図式化すると非常に短い曲のように思える曲が、実際には繰り返しが多く、そのため曲としてまとまった印象を与えます。

分かりやすくするために、ファッションに例をとってみましょう。洋服の上着がトップス、スカートやパンツがボトムスです。このトップスとボトムスのコントラストがハッキリしているような場合、メリハリがきいて生きいきした感じになります。

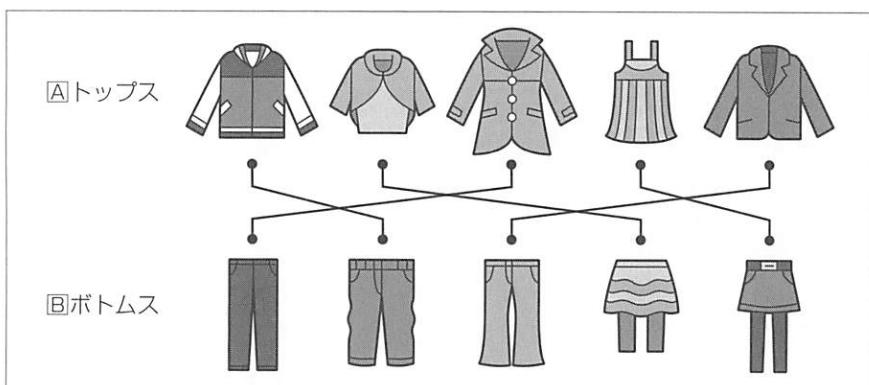
例えば、赤いシャツに黒いスカート、この組み合わせだと情熱的なイメージですし、同じ反対色の組み合わせでも、緑色の上着と白いパンツだと清々しい印象を与えます。このようにボトムスの色によってトップスの鮮やかさが引き立つ場合もありますし、逆にボトムスの色使いによって穏やかな落ち着いた雰囲気に入れることもできます。

このように、すっきりさせたい時には白を、引き締めたい時には黒を上手に使うことによって、感じが変わってきます。逆にこのトップスとボトムスを同系色、類似色でまとめると、すっきり落ち着いた感じになります。

色使いでいうと、同じ色あいで配色をまとめる場合のことです。例えばオレンジと茶色、ピンクと赤、ブルーと水色などの組み合わせです。

この場合は無難なので、少々おもしろみに欠けることもあるかもしれません。このように地味すぎる時には、反対色を少しアクセントカラーとして加えるとイメージが変わり、全体が生きてきます。トップスとボトムスを2部形式のAとBに置きかえても、まったく同じことがいえます。AとBの組み合わせによってイメージが大きく変わります。旋律にアクセントを付けたり、伴奏の和音を1回目と2回目で少々変化させたりして、飽きのこないよう曲を作るのも作曲家の腕の見せどころとなるのです。

●トップス(A)とボトムス(B)の組み合わせはいろいろ。



始まりは笛と太鼓の模倣から

ドメニコ・スカルラッティは当時の鍵盤楽器であるチェンバロのためのソナタを550曲以上残しています。チェンバロは英語ではハープシコード、フランス語ではクラヴサンと呼ばれ、当時の宮廷や貴族の間で愛好され盛んに演奏された花形楽器です。

ここでいう「ソナタ」は、後のハイドンやモーツアルト、ベートーヴェンが書いたいわゆるウィーン古典派以降の多楽章形式のソナタとは違って、ほとんどが単一楽章の単純な2部形式で書かれています。しかし、提示される2つの主題はしばしば性格を異にするものであり、いくつかの動機の組み合わせや積み重ねは、古典派前期のソナタのスタイルに近いものだとみることができます。

全体は前半のA部分と後半のB部分2つに大きく分かれています。

まずA-aの部分【譜例1】の1小節目は下行する旋律、2小節目は装飾音が付いた和音が3回繰り返されるという形で書かれています。この2小節の主題は4回繰り返されます。A-a'はaの冒頭の音型が変化したもので、これが6回繰り返されますが、変化しない右手に対して、左手は1小節ずつバス音が上行しながら、それに伴って和音が変化していきます。

B-bでは、Aで用いられているリズムは全く用いられていません。ここでは新しく太鼓の連打を思わせるリズムが登場し、これが両手交互に現れます【譜例2】。このリズムを含んだ8小節の旋律が同じ形で2回繰り返されます。こうした笛や太鼓をイメージさせる曲想から、後世の人によって「行列」という曲名が付けられてもいます。

なお、当時の習慣として、オリジナルの楽譜には作曲家の指示が細かく書かれていません。そのためにさまざまな解釈が可能で、演奏家は自由に奏法や強弱などを付けて演奏しています。それがまたこの曲に多彩な魅力を与えることにもなっています。このソナタはA部分がホ長調、B部分がロ長調というように異なった調性で登場します。

譜例1 3回繰り返されるA-aのテーマ

Andante Commodo

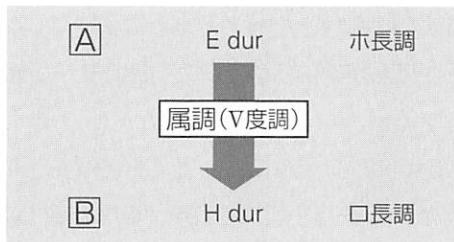


譜例2 B-bのリズムが交互に出てくる

太鼓の連打を思わせる新しいリズム



●2部形式の調の推移



ドメニコ・スカルラッティ
(Domenico Scarlatti 1685 – 1757)



イタリアのナポリ出身の作曲家で、J. S. バッハやヘンデルと同年生まれです。父親のアレッサンドロ・スカルラッティも作曲家として知られています。ドメニコはスペイン宮廷楽長として王女マリア・バルバラの音楽教師を務めました。この王女のためには、これらのソナタのはほとんどが作曲されたといわれています。

「ラバース・コンチェルト」として有名に

アンナ・マグダレーナは、バッハの2度目の妻となったケーテンの宮廷歌手です。このメヌエットが収められた《アンナ・マグダレーナ・バッハのための音楽帖》は、この新しい妻に捧げるために、またフリーデマンやエマヌエルなど、バッハの息子たちの教育用として書かれた小品集です。

曲はA – B ふたつの部分から構成されています。

A部分はaとa' から成り立っており、それぞれ8小節のうち最後の2小節のみが変形されています【譜例1-★】。B部分はbとcから成り立っており、それぞれの8小節は全く異なるものとなっています。AとBは、旋律は異なるものの共通したリズムが用いられていて、曲の統一が図られています【譜例2】。

全体を図式化すると、A (a + a') と B (b + c) のようになります。

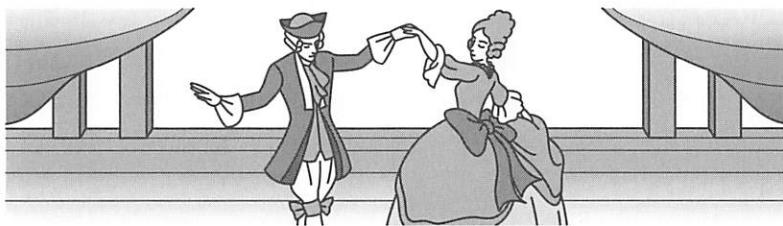
この曲は1965年にランデルによって4分の4拍子に編曲され「ラバース・コンチェルト」というタイトルで広まっていきました。特にジャズ・シンガー、サラ・ヴォーンの名唱によって世界中に知れわたりました。

「メヌエット」はヨーロッパの舞曲のひとつで、比較的ゆったりとした4分の3拍子の宫廷舞踊です。しかしバロック時代以降になると、独立した楽曲として組曲のなかの1曲として用いられたり、あるいはソナタや交響曲などのひとつの楽章として、さまざまな作曲家によって書かれるようになりました。とりわけバッハには数多くのメヌエットがありますが、モーツアルトやベートーヴェンにもメヌエットはいくつもあります。

なお、このト長調のメヌエットは特に「バッハのメヌエット」として広く知られてきましたが、しかし最近のバッハ研究によって明らかにされたところによると、クリスティアン・ペツォルト(1677 – 1733)という人の作品であることが判明しています。そのため最近の楽譜には〈伝バッハ〉と記されることが多いっています。

譜例1 ◆…a・a'の最後の2小節(☆)のみ変型されている。

譜例2 ◆…共通したリズムが用いられて曲の統一が図られる。



メヌエット

Column

18世紀に生まれたこの曲は、20世紀に「ラバース・コンチェルト」というタイトルで蘇りました。アメリカのD. ランデルとS. リンザーは、この3拍子のメヌエットを4拍子に変えポップ調の現代的なアレンジをし、歌詞をつけて歌いました。その後多くの歌手に歌い継がれ、ポップスのスタンダード曲として今なお親しまれています。

ヨハン・ゼバスティアン・バッハ
(Johann Sebastian Bach 1685 – 1750)



「音楽の父」と呼ばれ、ベートーヴェン、ブラームスとともに「ドイツ三大B」と呼ばれています。バッハ一族は音楽家の家系であるため、他のバッハと区別するために「J. S. バッハ」と略記されることもあります。また、一族で最も偉大であるという意味で「大バッハ」という呼び名も使われています。単に「バッハ」といった場合、一般的にはこのJ. S. バッハを指します。

文豪と歌曲王の出会い

この「野ばら」は、16小節の短い作品です。歌詞はドイツの文豪ゲーテ（1749－1832）によるものです。2小節の動機①が1小節～2小節目と5小節～6小節目に出てきます。最初の動機と2回目の動機は非常によく似ていますが、ただ1音ドの音だけが異なります。2回目の動機のこの部分は、この1音がド[#]になっています。これはどうしてでしょうか。調の変化に注意してみると分かります。

曲はト長調で始まります。5小節の2回目の動機は、ト長調の主音から5つ上の属音と呼ばれる音から始まる二長調に調が変わっています。転調しているのです。このト長調と二長調の関係は、専門的には属調といわれる関係の調で、いわば曲本来の調のト長調の親戚関係にあたる調だと考えると分かりやすいと思います。この調関係は、音楽用語でも「近親調」といいます。

Aの部分に当たる小節数は、8小節の場合が多いのですが、この曲では、10小節でできています。4小節の小楽節に後半の2小節が増えて6小節になっているからです。このAの部分の最後はフェルマータ（♪）で音楽がいったん休止しています。この休止は半終止と呼ばれ、文章でいうところの読点にあたります。

後半Bは、元のト長調に戻っています。Bの部分の後半2小節の歌が終了すると、同じメロディをピアノ伴奏が少し装飾して繰り返しています。

ピアノ伴奏は、全曲を通して非常に平易で演奏しやすく、簡潔に書かれています。

同じゲーテの詩に、ハインリッヒ・ウェルナー（1800－1833）も曲を付けています。

このウェルナーの「野ばら」は、日本では昔から音楽の教科書に載っており、多くの人々に歌わされてきました。

●「野ばら」の形式

A		B	
a	a'	b	c

譜例1 「野ばら」全曲

Lieblich ($\text{♩} = 69$)

① 動機

(ト長調・4小節)

(二長調・6小節)

② 動機

(ト長調・2小節)

A —————— A —————— B —————— b ——————

(ト長調・2小節、ピアノ伴奏のみ)

C —————— C' ——————

フランツ・ペーター・シューベルト
(Franz Peter Schubert 1797 – 1828)



シューベルトは、600曲以上もの歌曲を作曲し、「歌曲王」といわれることもあります。豊かな旋律性と表現力あふれる和声によって、歌詞の核心をとらえた多くの傑作を残しました。現在もシューベルトの歌曲が人気を得ている理由のひとつは、魅力的で歌いやすい旋律で作曲されていることです。ペートーヴェンを尊敬し、生涯オーストリアから国外にでることはありませんでした。

あの胃腸薬のCMでおなじみです

ショパンほどピアノのために多くの曲を書いた作曲家はいません。しかもそのどれもがピアノでしか表現できない豊かな詩情にあふれていて、聴く者の心の琴線に触れます。そんなところから「ピアノの詩人」と呼ばれてきました。

この《24の前奏曲集》のなかの第7番イ長調という曲は、テレビの胃腸薬のCMでおなじみの曲です。「胃腸」と「イ長調」の同じ発音のゴロ合わせをねらって、この曲が使われたそうです。

曲は16小節という短い曲ですが、AとA'の部分に分かれています。

古典派の作曲家の作品には、主和音から始まる曲が多いのですが、この曲は属和音から始まります。少し専門的な話になりますが、属和音から主和音に進行することを「和音の解決」といいます。この考え方は、西洋音楽における和声法(和音の機能と進行)の基本となるものです。分かりやすい例として、次の場面を想像してください。

小学校の朝礼や授業の始まりの挨拶などでよく使われる〈起立〉→〈礼〉→〈直れ〉の合図の音型です。この音形のうち〈起立〉→〈礼〉の和音を鳴らして、その後、突然中断したとしたらどうなるでしょうか？　多分、必然的に〈直れ〉の和音を聴きたくなってくると思います。この希求が和音の解決を引き起こしています。

この作品はA(a+b)とA'(a'+b')の構成【譜例1】で書かれています。全曲を通して同じリズムが曲を支配しており、それがこの曲に統一感をもたらしています。また、途中で転調することもなく、常にイ長調を保持しており、激しいテクニックを要する前奏曲集のなかにあって、一抹の安堵感をもたらす存在になっています。演奏技術的にも非常にやさしく、ピアノ初心者が弾くのに適した作品です。

●この曲の形式

A		A'	
a	b	a'	b'

譜例1 全曲の右手部分

Andantino

p dolce

A

a

b

A'

a'

b'



属7の和音は「終わらない感じ」、つまりおじぎ(礼)をして、はやく主和音に戻りたいという響きです。ショパンのこの曲は、この“終わらない感じ”から始まるので、「問い合わせ」をしているように聞こえます。さて、いったいどんな問答かちょっと想像すると面白いですね。

フレデリック・フランソワ・ショパン
(Frédéric François Chopin 1810–1849)



ボーランド出身の前期ロマン派を代表する作曲家、ピアニストです。作品のほとんどはピアノのために書かれ、「ピアノの詩人」とも呼ばれています。さまざまな形式や半音階を使った美しい旋律、即興的な和声法などにより、ピアノの表現方法や可能性を拡大し、ピアノ音楽というジャンルに新しい境地を切り開きました。今日では彼のピアノ曲はクラシック音楽ファン以外にもよく知られており、ピアノの演奏会において最も演奏されることが多い作曲家のひとりです。

第2章

3部形式・複合3部形式

サンドイッチ形式です。

読んで字のごとく、3つの部分から成り立っている形式です。音楽を図にあてはめて簡単に書くと〈A-B-A〉となります。

ちょうどサンドイッチみたいな形式ですね。

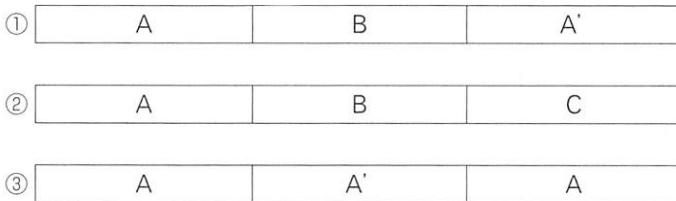


Aの部分がパン、Bの部分は中身です。サンドイッチと同じく、この中身Bの部分がAと同じ厚さのハムだったり、野菜だけの野菜サンドがあるかと思えば、卵、ハム、ツナ、チーズなどボリュームたっぷりのミックスサンドで、Aのパンよりも具がたっぷりの場合もあります。逆に中の具よりもパンの方が厚いサンドイッチもったり、2枚のパンの間に、薄くバターが塗ってあるようなサンドイッチもあるのと同じで、音楽でもそれぞれの曲によってA、Bの大きさが異なります。音楽では、この中身(B)の部分を「中間部」と呼び、ここに音楽のクライマックスがくることが多いのです。中身で勝負ということになりますね。

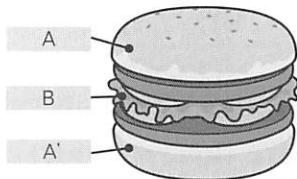
中身をはさんでいる2枚のパンが、同じ食パンでも、一方が小麦粉で作られた白い食パン、もう一方が全粒粉で作られた褐色の食パンというように、見た目や味を考えて作られたサンドイッチも売っていますね。勘のいい方はもう気が付いたかもしれません、サンドイッチでもいろいろな種類があるように、音楽形式でもA-B-AまたはA-B-A'だけでなく、A-B-Cという形でも3部形式といえるのです。この場合を3部形式に当てはめてみると、2枚のパンを区別するため最初のパンをAとしたら、少しかわったパンの方をA' というように(')をつけることにより、聴いている人にも「あれ、前に聴いた部分と少し違うな」と思わせるのです。あなたも1曲を通して聴いた時にそう思うようになれば、しめたもの。もう

「違いが分かる音楽家」です。この外側のパンも、食パンのように柔らかいパンもあれば、バケットのような少々固めのフランスパンのこともあるのは、皆さんご承知のとおりです。

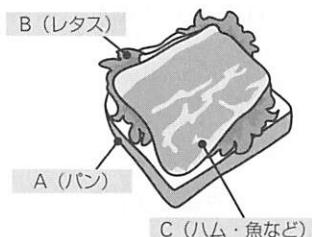
今までのことを簡単な図に表すと次のようになります。



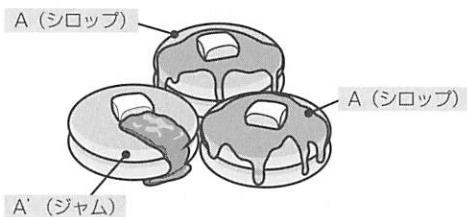
①ハンバーガー 真ん中がガラリと違う



②オーブンサンド それぞれ違う味



③パンケーキ 少しだけ違う味付け



複合3部形式とは、3部分をさらに細かく分けた形式です。例えば、Aの中身が $a + a'$ や $a + b + a'$ など、様々な組み合わせで形成されます。これはBやCの中身にも当てはめることができます。

お料理の話しさはこれくらいにして、実際の曲を聴いてみましょう。

ドラマでよく耳にする口マンチックな曲

幼い頃から文学や音楽に親しみながら過ごしたローベルト・シューマンの曲には、哲学的な背景と文学的な表現が強く反映されているのが特徴です。とりわけ歌曲とピアノ曲にすぐれた作品を多く残しています。

ドイツ語で〈夢〉を意味する「トロイメライ」は、13曲の小品が納められた《子供の情景》のなかの第7曲で最も有名な曲です。曲集には「子供の」というタイトルが付いていますが、子供が簡単に演奏できる曲ではなく、大人から見た子供の日常の様子を描いたもので、シューマンの芸術的表現力が發揮された作品です。また、このトロイメライはピアノの独奏曲ですが、ヴァイオリンやチェロ用にも編曲されて広く親しまれています。

曲は〈A – A' – A〉の単純な3部形式で書かれていて、それぞれが8小節ずつ均等な小節数に分かれています。

A【譜例1】 – A'【譜例2】 – A【譜例3】、それぞれの冒頭はどれも弱拍から始まり、すべて〈ド→ファ〉という上行する音の動き【譜例1～3の★印】に統一されています。ただし、最初4分音符で始まったこの音型は、2回目は8分音符で、そして3回目は短い装飾音符(前打音)として書かれています。このように、同じ旋律音を毎回少しづつ短くすることで曲の盛り上がりを織り込んだところに、シューマンの作曲家としての工夫が感じられます。最後のAは、終わりの2小節のみ、フェルマータの後、すてきな和音を伴って少し変化しています。

またA'の部分では、Aの部分と同様に始まりますが、途中から次々と調を変えて推移することにより、Aの部分との対比が施されて曲にメリハリをつけています。

曲は演奏レベル的には決して高度ではなく、むしろ平易に書かれています。が、それがかえってピアニスト一人ひとりの個性を際立たせることになっています。また、複数の声部の動きを柔らかくもつれさせる書法により、穏やかで夢見るような効果をあげています。

★①②③のとおりアウフタクト「ド」の長さが変わります。

譜例1 A

A musical score example in G major, 4/4 time. The tempo is marked as 100 BPM. The melody consists of eighth and sixteenth notes. There are dynamic markings: a star above the first note labeled ①, a star below the second note labeled ②, and a star above the third note labeled ③. The notes are connected by a continuous line.

譜例2 A'

A musical score example in G major, 4/4 time. The tempo is marked as "a tempo". The melody consists of eighth and sixteenth notes. There are dynamic markings: a star above the first note labeled ①, a star below the second note labeled ②, and a star above the third note labeled ③. The notes are connected by a continuous line.

譜例3 A

A musical score example in G major, 4/4 time. The tempo is marked as 100 BPM. The melody consists of eighth and sixteenth notes. There are dynamic markings: a star above the first note labeled ①, a star below the second note labeled ②, and a star above the third note labeled ③. The notes are connected by a continuous line.

ローベルト・アレクサンダー・シューマン
(Robert Alexander Schumann 1810-1856)



ドイツのロマン派を代表する作曲家のひとりで、ショパンと同年生まれです。ハイデルベルク大学で法律を学んだこともある一方、作曲やピアノ演奏をごなしていましたが、無理なピアノ練習のために指を痛めてしまい、作曲家の道を志しました。この曲集は、ピアニストで後に妻となるクララとの結婚を、彼女の父親に反対されていた時期に書かれました。ほかに「鬼ごっこ」「おねだり」など、それぞれの曲に愛らしいタイトルが付けられています。

小犬のしぐさは世界共通

この作品は《3つのワルツ》作品64の第1曲です。「小犬のワルツ」という俗称は、恋人の飼っていた小さな犬が、自分の尻尾を追いかけながらぐるぐる回っている様子を、即興的な演奏で表現したものです。

Aの部分は、ラトの音（○印）を中心に、その上下の音がいったり来たりする右手の速い単旋律の前奏4小節から始まります【譜例1】。右手がテンポの速い細かい音符で動き続けるなか、5小節目から左手にはっきりと4分の3拍子のワルツのリズム【譜例2】が加わります。

この曲ではAとBがはっきりと区別できます。楽譜ではBに入る直前に小節線が二重線できちんと分けられているからです。これを専門用語で「複縦線」と呼びます。つまり「さあ、ここから新しい部分に移りますよ」という意味合いがこの複縦線に含まれているのです。

Bからはテンポも変化します。楽譜にはPoco più tranquillo（少し静かに）と書き込まれていますが、演奏を聴いていても、Aでの細かな動きが全くなくなり、静かなワルツの旋律【譜例3】が少しずつ変化しながら4回繰り返されます。その間、左手はほとんど変化せず、右手のメロディを支えています。

Aの再現は、冒頭の前奏を倍の8小節に引き延ばした形で始まります。その後の左手の4分の3拍子のワルツのリズムや、高いファの音から一気に下りてくる右手のメロディが、ショパンらしい即興的な華やかさを感じさせて終わります。

ワルツはもともと3拍子の舞曲、およびそれに合わせて踊るダンスを指していましたが、ショパンのワルツは踊ることを前提としておらず、演奏会用作品として芸術的に高められています。ちなみに、J. シュトラウスのワルツは踊りが目的のワルツですね。

この曲は、曲の短さ（演奏するのに1分にも満たない）から「一瞬のワルツ」とも呼ばれています。

譜例1 速い単旋律の前奏

Molto vivace (きわめて速く)



譜例2 ここからワルツのリズムが始まる

A

譜例3 中間部でガラリと雰囲気が変わる

Poco più tranquillo (少し静かに)

B

 Column

「小犬」ってどんな犬を想像しますか？ ショパンの愛人ジョルジュ・サンドの飼っていた小犬は「マルキ」と「ディブ」という名前でしたが、マルチーズ、テリア…どんな犬だったのでしょうね。

フレデリック・フランソア・ショパン
(Frédéric François Chopin 1810 – 1849)



ショパンのワルツ全19曲の中には、第7番「別れのワルツ」、第1番「華麗なる大円舞曲」など魅力的な作品が多くあります。また、ワルツのほかに映画「戦場のピアニスト」で有名になった第20番嬰ハ短調のノクターンや、やはり映画「愛情物語」で使われた第2番変ホ長調のノクターンなど、BGMで知られるようになった曲もあります。ショパンは自分の曲にニックネームを付けることで作品のイメージが固定されることを嫌いました。ですから「別れの曲」「革命」「蝶々」「黒鍵」などは、そのどれもがショパン自身によるものではありません。

田舎の踊りをウィーンへ

ポルカは、もとはチェコの民俗舞曲で、軽快な2拍子のリズムで書かれた曲です。シュトラウス一家の作品によって人々に知られ、親しまれるようになりました。

J. シュトラウスII世は多くのウィンナ・ワルツを作曲し「ワルツ王」とも呼ばれることがあります。毎年、元日に行われ、世界中にテレビで衛星生中継されるウィーン・フィルの「ニューイヤーコンサート」では、彼や父親のヨハン・シュトラウスI世、弟のヨーゼフ・シュトラウス、エドワルト・シュトラウスらシュトラウス・ファミリーの作品を中心に音楽会のプログラムが組まれます。音楽の都ウィーンの代表的な作曲家です。現在の通貨のユーロに変わる前、オーストリアの100シリング紙幣には、彼の肖像が描かれていたほどです。

全体は大きくA (a + b + a) — B (c + d) — A (a + b + a) の複合3部形式に分けられます。

まず、4小節の前奏から始まります。A-a部分の軽やかな旋律は、第1ヴァイオリンと2本のクラリネットによって演奏されます。1拍目と2拍目が細かくなっている独特のリズムは印象的で、一度聴いたら忘れならない親しみのあるリズムです【譜例1】。2拍子の軽快なポルカのリズムを刻むのは、指で弦をはじくピッティカートのチェロです。bでは、二長調からイ長調に転調し、打楽器も加わり華やかなメロディになります【譜例2】。その後aが前回同様に繰り返されます。

Trioと書かれた中間部Bは、ト長調になり、cは装飾された華やかな旋律を第1ヴァイオリン、クラリネット、フルート、ピッコロが受け持ち【譜例3】、dは同じト長調のまま打楽器も加わり、全楽器が合奏します【譜例4】。これをトゥッティ(tutti)といいます。

Codaと書かれた後半のAは前半のAと全く同じ繰り返しですが、最後の9小節は、本来の「終結部」という意味のCodaらしく、ティンパニが加わり、全楽器が同じリズムで演奏し、クライマックスを作り上げて曲が終わります。

譜例1 ♥ A-a このテーマは曲全体で4回出てきます。



譜例2 ♣ A-b



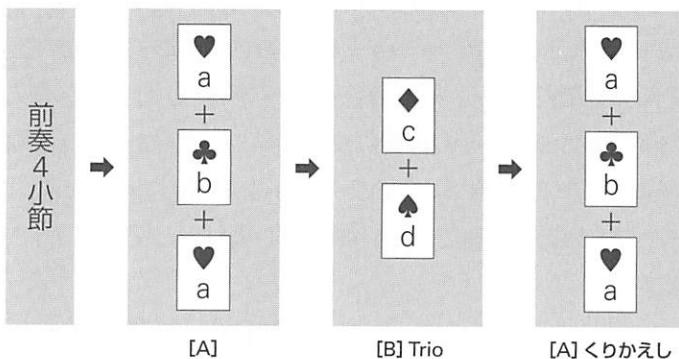
譜例3 ♦ B-c ※三部形式の中間部をTrio(トリオ)と呼びます。



譜例4 ♠ B-d



テーマと構成 図に書くと次のようになります。非常に分かりやすい構成になっています。



ヨハン・シュトラウスII世
(Johann Strauß II 1825-1899)



オーストリアの作曲家です。父親のヨハン・シュトラウスは、
ウィンナ・ワルツの原型を作り上げたことで「ワルツの父」と呼ばれ、
シュトラウスII世は、そのワルツをより芸術性の高い音楽に発
展させました。「美しく青きドナウ」「ウィーンの森の物語」などの
ワルツ、「トリッチ・トラッチ・ポルカ」などのポルカ、「ごうもり」
「ジブシー男爵」などのオペレッタが知られています。

ジプシー音楽を芸術作品へ

ブラームスの《ハンガリー舞曲》第5番は、彼の作品の中でも最もポピュラーな曲のひとつで、オーケストラ演奏会でのアンコール曲としてよく演奏されます。もとは4手連弾のために書かれたピアノ曲ですが、オーケストラに編曲されたほうが有名になりました。

ピアノは本来、一人のピアニストが演奏することを前提としていますが、音域が広く、2人のピアニストが同時に演奏することもできます。この2人で弾く演奏スタイルを「連弾」といい、一人で弾く場合よりも一層音が厚くなり、幅広い音域を使ってダイナミックに演奏できるため、華やかな表現を可能にすることができます。ピアノの鍵盤に向かって右側に座り、高い音域を演奏するのが第1奏者(プリモ)であり、左側に座り低い音域を担当するのが第2奏者(セコンド)です。ペダルは通常、第2奏者が担当します。

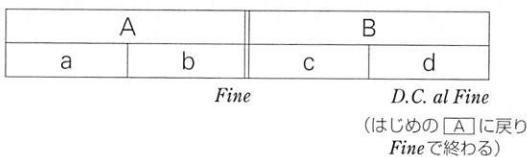
曲はA(a+b) - B(c+d) - A(a+b)の複合3部形式でできています。

まずAの部分を確認しましょう。最初に第2奏者が、低いバス音と後打ちの和音を演奏し続けます。その伴奏に支えられて、有名な旋律aが第1奏者によって演奏されます【譜例1】。このテーマaは2回繰り返されます。2回目は1オクターヴ上の音も一緒です。b【譜例2】も繰り返し記号によって2回繰り返されます。

Bになると、テンポはさらに速くなり、c【譜例3】が2回繰り返されますが、ここでもAの時と同じように、それぞれの2回目はオクターヴ上の音も一緒です。

このように非常に単純な構成になっていながら、テンポや強弱が激しく変化するため、ジプシー音楽を彷彿させるハンガリーのイメージにぴったりな曲になっています。

●ハンガリー舞曲第5番の形式



譜例1

Allegro

A

譜例2

f marc.

譜例3

Vivace

***c**

***d**

poco rit.

in Tempo

ヨハネス・ブラームス
(Johannes Brahms 1833 - 1897)



ドイツ音楽における「三大B」と称される一人で、古典主義的な形式美を尊重しながらも作風は概ねロマン派音楽であるといえます。この《ハンガリー舞曲》は、友人であったハンガリー生まれのヴァイオリニスト、レメーニの影響を受けていて、ジブシースタイルをうまく取り入れた独特の魅力を持っています。

ドリーちゃんへのプレゼント曲

フォーレは教会のオルガニストやパリ音楽院の院長になったフランスの作曲家です。

この《ドリー》という名前は、後に作曲家ドビュッシーの2人目の妻になったエンマ・バルダックの娘、エレーヌのニックネームであったといわれています。つまり、まだ幼い「ドリーちゃん」のために、フォーレがこのようにすてきな音楽をプレゼントしたところからこの名前が付けられました。

全6曲からなるピアノ連弾の代表的な曲です。この曲をアルフレッド・コルトーがピアノ独奏用に編曲した版や、他にオーケストラのヴァージョンもあります。

組曲全体は、全般的に低音パートは和声の色合いに変化を付ける役割を持ち、高音パートは大げさになりすぎずメランコリックな旋律を表現していくように作曲されています。

この曲のAでは、主旋律【譜例1】が第1奏者(プリモ)によって、1回目は右手だけで、2回目は両手で演奏されます。

Bでは、第2奏者(セコンド)からこの部分の主旋律【譜例2】が演奏されます。その後、この旋律は第1奏者に2オクターヴ高くなって引き継がれます。

A'では、主旋律の再現と同時に、Bの主旋律の断片が第2奏者によって奏されます。

穏やかな旋律のなかに、フォーレならではの巧みな転調が用いられ、独特の美しい和声は、フランス近代音楽の新しい道の一歩となりました。

このような子供のためのピアノ作品の系譜としては、この《ドリー》のほかにシューマンの《子供の情景》やドビュッシーの《子供の領分》などの作品があります。また、フランス近代の作曲家のピアノ連弾作品として親しまれているものとしては、ドビュッシーの《小組曲》、ラヴェルの《マ・メール・ロワ》、ビゼーの《子供の遊び》などが知られています。

譜例1 A 第1奏者によって始まるメロディ

Andantino

第1奏者

譜例2 B 第2奏者によって始まるメロディ

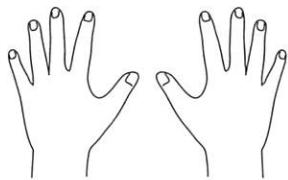
marcato

第2奏者

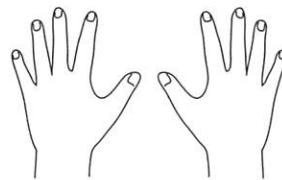
●連弾の並び方

低い ←

→ 高い



第2奏者(セコンド)



第1奏者(プリモ)

※ペダルは通常、第2奏者にゆだねられます。

ガブリエル・ユルバン・フォーレ
(Gabriel Urbain Fauré 1845 – 1924)



フォーレはマスネの後任としてパリ国立音楽院の作曲科教授となり、ラヴェルのローマ大賞落選の事件後、院長に就任しました。彼自身はパリ音楽院出身ではありませんし、ローマ大賞の受賞者でもありませんでしたが、在任中に数々の音楽院改革を実行しました。そのひとつに教授との癆着阻止のため、入学審査に外部の者も加えるという形は現在まで受け継がれています。弟子からはラヴェルをはじめ、F.シュミット、エヌスコ、ブーランジェといった20世紀の音楽界で活躍する優秀な弟子が育っていきました。

プロポーズはヴァイオリンの音色と共に

イギリスの作曲家エルガーが作曲したこの曲は、流れるような美しい旋律に満ちています。フランス語で《愛の挨拶》(Salut d'amour)と名付けられた幸福感に満ちあふれたこの曲は、後に妻となる女性に捧げられた曲といわれています。親しみ深く美しいメロディは多くの人々の心をとらえ、世界中で愛好されています。

エルガーは自分で作曲したこの曲を、ピアノ・ソロとヴァイオリン用に、また小編成の管弦楽用など、いくつかの版を残しました。きっと自分自身でもこの旋律が気に入っていたのではないかと思われます。全体的に平易に書かれていますが、単純な旋律のなかに優美さがあふれており、甘い曲想が幅広い支持を集めています。そのため演奏会のアンコール・ピースとしてもよく取り上げられます。

曲は、ピアノ伴奏の低音の上に書かれた4分の2拍子のシンコペーションのリズムで始まります。このリズムは全曲を通して頻繁にピアノ伴奏に使われます。

2小節の前奏の後、Aの部分有名な主旋律【譜例1】が現れます。ヴァイオリニストでもあったエルガーが、旋律楽器としてのヴァイオリンの歌わせ方を十分に心得た旋律で、16小節間続きます。

Bの部分になると調性が変わり、穏やかなメロディ【譜例2】がヴァイオリンによって演奏されます。後半、今まで控えめだったピアノ伴奏にBの部分の旋律の出だしが現れ、その間、ヴァイオリンはこの旋律の助奏に徹する形でピアノの演奏を引き立てます。

再現されたA'では、Aと同じようにヴァイオリンによって冒頭の旋律が奏された後に、今度はBの時と同じように、ピアノ伴奏にも最初の主旋律の出だしが現れます。最後の8小節では、ヴァイオリンがミ(mi)の音を引き延ばしている間に、ピアノ伴奏が最初のリズムを再現して曲を閉じます。

譜例1 A 有名なヴァイオリンのメロディ

ヴァイオリン

譜例2 B ヴァイオリンからピアノに引き継がれるメロディ

ヴァイオリン

●全曲を通して流れる特徴的なリズム



●ヴァイオリンのボーアーニング記号



下げ弓の記号



上げ弓の記号



エドワード・ウィリアム・エルガー
(Edward William Elgar 1857 – 1934)



音楽教師でありヴァイオリニストでもあったイギリスの作曲家。吹奏楽でよく演奏され、イギリスの「第2の国歌」とまでいわれる《威風堂々》の作曲家としても知られています。ピアノの教え子だった8歳年上のキャロラインと結婚した後、《エニグマ（謎）変奏曲》を成功させ、イギリスを代表する国民的作曲家となりました。その功績を称え、国王よりエルガーにナイトの称号が授けられました。

唐草模様をフランス風に

この曲はドビュッシーが29歳の時に書いた、ピアノ曲としては最も早い時期の作品です。《2つのアラベスク》はその名の通り、第1番と第2番の2曲で構成されています。それぞれは独立した楽曲で、美しく繊細な印象の第1番、明るく活発な第2番というように対照的に作曲されています。

「アラベスク」というのは、アラビア風とか唐草模様といった意味を持つ言葉で、この曲も流れるような音の動きが、ちょうど唐草模様のように絡み合いつつ展開されていきます。

全体は〈A－B－A'〉の典型的な3部形式です。

まずAは、5小節間の序奏を思わせる出だし【譜例1】で始まります。この序奏は、AにもA'にもしばしば現れます。この部分の左手の動きは分散和音といわれ、和音を構成するすべての音を同時に鳴らすのではなく、下から順に分けて鳴らす演奏の仕方で書かれています。Aではこの演奏方法が多用されています。

6小節目になって、本来の調であるホ長調の主旋律【譜例2】が現れます。右手と左手が一致しないリズムを同時に演奏する「ポリリズム（異なるリズム型）」という演奏法で弾くことによって、まさにアラベスクの名にふさわしい流れるような甘美な美しさを生み出しています。

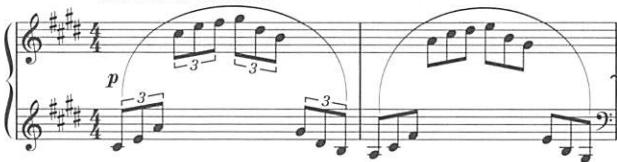
Bの部分はテンポを自由に動かしながら演奏するように、ドビュッシーはここに〈テンポルバート Tempo rubato〉【譜例3】と指定していて、頻繁にテンポの指示が変わります。Aで使われていた両手のポリリズムの組み合わせは、この部分には出てきません。

再現部A'になると、冒頭の序奏が再現し主旋律が戻ってきます。

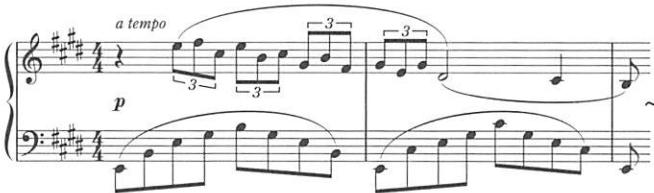
全曲を通して流れている抒情性と軽やかに運動するリズムは、既成の音楽観や形式観にとらわれずに、響きそれ自体を重要視したドビュッシーのこれ以降の独自の音楽世界を切り開いていく、新しい感覚の創造への道に結びついていきます。

譜例1 序奏

Andantino con moto



譜例2 A 主旋律の登場。右手と左手が一致しないポリリズム。



譜例3 B 奏者のイメージを反映させた、自由なテンポが求められる

Tempo rubato (un peu moins vite)



●唐草模様



クロード・アシール・ドビュッシー

(Claude Achille Debussy 1862 - 1918)



フランス印象主義の代表的な作曲家といわれています。西洋音楽で長年使われてきた長音階や短音階以外の旋法の使用や自由な和声法を用いて、独自の音楽語法を築きあげました。20世紀への扉を開いた作曲家として西洋音楽史上重要な作曲家のひとりです。『牧神の午後への前奏曲』によって広く知られるようになりました。彼の音楽は「印象主義音楽」と呼ばれるようになりました。

第3章

変奏曲形式

一つのメロディをさまざまな方法で変化させていきます。

一つの主題（テーマ）をまず聞かせてから、それをいろいろな方法で少しづつ変形させる曲のスタイルのことをいいます。

ちょっと話が難しくなりましたが、この「変奏」を「変装」という文字に置きかえてみると、少しは身近な感じがすると思います。例えば私たちは外出する時、帽子をかぶったり、マスクをしたり、サングラスをかけたり、普段と少し様子や雰囲気を変えて出かけることがあると思います。これが「変装」です。

音楽で、この手をかえ品をかえて主題を変えること、それが音楽の形式における「変奏」というわけです。具体的には、リズムを飾ってみたり、メロディを長くしたり、短くしたり、切り刻んでみたり、テンポ、調、拍子を変化させたり、伴奏を変えたり、和音を変化させたり、旋律を逆行させたり……と、いろいろな方法があります。

私たちも、知っているメロディを少し変えて歌ってみたり、いじったりして遊ぶことがあります。それと同じことです。

古くはバロック時代からある形式です。作曲家が遊びのように、気軽にその場その場で変奏してみるとすることもあり、いうなればアレンジを加えていく形式と考えてもいいでしょう。また、この変奏曲形式は、クラシック音楽に限ったものではありません。ジャズはアドリブ（即興）をメインとしていますから、ほとんどがこの変奏曲形式を用いていることになります。

このもとになる主題ですが、作曲家自身が新しく作曲する場合もありますし、他の自作を用いること、別の作曲家の曲、民謡や国歌、童謡などを使っている例もあります。他の作曲家の主題を使って変奏曲を作曲している場合には、「～の主題による変奏曲」と題名を付けることもあります。このように主題に関しても、変奏の仕方と同様に何の制約もありません。変

奏する曲数にも制限はありません。「変装」がまったく個人の自由、おしゃれ感覚、本人のセンスに頼っているのと同じことです。

一般的には、明快な、シンプルな曲が主題に選ばれることが多く、変奏をすることによって、地味で、単純な曲を華やかに変身させるのが変奏曲です。ちょうど、化粧前と化粧後の女性の顔が違うのと同じことです。

また、変奏曲は次のように分類することもあります。

●装飾変奏

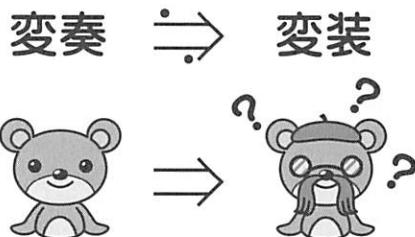
旋律や音型を装飾していく変奏です。和声や旋律の一部はそのまま残して作曲しますので、主題がまったく分からぬほど変化させることはあります。古典派の時代の変奏曲はこのスタイルで書かれていることがあります。

●性格変奏

主題の雰囲気だけを残して、自由に変化させます。変奏が主題の性格そのものに及ぶため、ほとんど原型をとどめていないような変奏もあります。慣れない人には、主題との関連が分かりにくい部分もあるかもしれません。これはベートーヴェンによって始められましたが、それ以降の作曲家たちに大きな影響を与えたスタイルです。

●低音変奏

低音に主題を置いて、これをしつこく繰り返しながら、上の声部だけを変奏させたり、低音とはまったく別のものを弾いたりするスタイルです。バロック時代はこれが主流でした。



眠れぬ夜のために

この曲の正式名称は、《2段鍵盤付きクラヴィチェンバロのためのアリアと種々の変奏》BWV988です。バッハの弟子ゴルトベルクが、不眠症に悩む伯爵のためにこの曲を演奏したという逸話からこの名前が付けられました。本来はクラヴィチェンバロ（チェンバロと同様のイタリア語）のために書かれています。演奏には高度なテクニックが必要なため、演奏される機会は少なかったのですが、20世紀になって、カナダ出身のピアニスト、グレン・グールドがこの曲でデビューしてから一躍有名な曲になりました。TVでこのグールドの一生をドキュメンタリーにした番組があり、放送されていましたのでご覧になった方も多いと思います。

主題となるアリア【譜例1】は、多くの装飾を持つ美しい旋律で、曲の最初と最後に配置されています。その間に30の変奏曲を置くという構成で成り立っています。実際の変奏主題は、バスの下行していく旋律（○印）です。合計で32曲がこの変奏曲に含まれているわけです。この32という数字は、この曲のキーナンバーになっており、変奏曲のほとんどは32小節で書かれています。でなければ32の半分の16小節や、1.5倍の48小節というように、何らかの形で32という数字に関わりを持っています。

30の変奏曲のなかでも特に注目されるのは、3曲ずつがひとかたまりになっており、それが10のグループに分けられていることです。また、それぞれの曲の調性は、ト長調、ト短調のどちらかで書かれています。ひとかたまりになった3曲の真ん中の曲では2段鍵盤を使い、テクニックを駆使するような構成になっています。

折り返し点に当たる第16変奏は、付点リズムによる莊重でゆったりとした部分と速いフーガ風の部分とからなるフランス風序曲で、ここから後半の始まりを告げています。演奏する場合には、各曲の対比を聴かせることが大切です。第30変奏は変奏曲の最後に当たり、複数の主題が、それぞれを追いかけるように鮮やかに展開した後、最初のアリアが再び演奏されて曲を閉じます。

譜例1 変奏主題は、下行していくバスの旋律（○印）

Aria

※○印はバスの音

 Column

クラヴィイチエンバロは16世紀から18世紀にかけて使われた鍵盤をもつ撥弦楽器です。外見は小型のグランドピアノに似ていますが、音の出し方は全く異なります。チェンバロは爪がついた部品が弦をはじいて音を出すので、鍵盤を強く弾いても同じ大きさの音しか出ません。この点がハンマーで弦をたたいて音を出すピアノとは大きくちがい、全く別の弾き方を必要とします。

一人で四重奏?! の難曲

3曲のソナタと3曲のパルティータ、合計6曲からなる《無伴奏ヴァイオリンのためのソナタとパルティータ》は、今日では古今の名作として知られています。そのなかの第2番の第5楽章がこの有名な「シャコンヌ」です。

「シャコンヌ (chaconne)」とは、16世紀頃のスペインに起源をもつゆったりとした3拍子の舞曲で、短い低音を繰り返しながら、その上に次々と変奏を築き上げていく一種の変奏曲形式の楽曲です。

この作品は、伴奏なしで独奏ヴァイオリンのみで演奏されます。ヴァイオリンは、和音よりも旋律を演奏することが得意な楽器です。そのような楽器だけで充実した音楽を書くことは非常に難しいのですが、バッハはその難しさを克服して素晴らしい作品にしています。この曲では、三重音、四重音を多用しているので、ヴァイオリニストはそれらを十分に響かせるために、大変な努力をしなければなりません。非常に難易度の高いことで知られ、ヴァイオリニストの技量や表現力が問われる曲だといわれています。

曲は変奏曲の形式で書かれていますが、二長調の中間部を持つ3部形式と考えることもできます。音楽の構成としては、冒頭8小節のシャコンヌの主題【譜例1】が基本となっています。この主題は前半の4小節と後半の4小節がほぼ同じに書かれ、小節の2拍目が付点4分音符になっているために重々しい感じがして、サラバンドという舞曲にも近いといえます。以下の変奏では、この8小節が基本単位となっており、この旋律をもとにして種々の変奏が30回以上行われていきます。

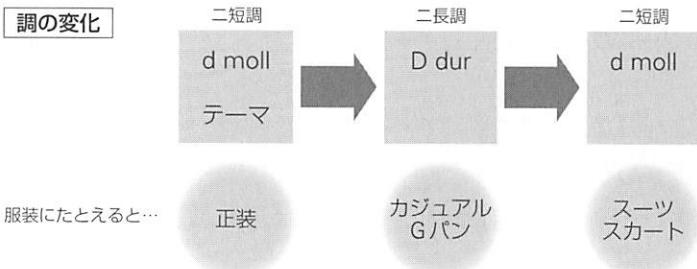
主題から第15変奏までは二短調、第16変奏から24変奏までは二長調、第25変奏から最後の変奏までは再び二短調で書かれています。

イタリア人のブゾーニは、この作品を演奏効果の高いピアノ曲に編曲【譜例2】しています。彼はすぐれた作曲家でもあったことから、屈指の名作・名編曲となっています。

譜例1 バッハのオリジナル「シャコンヌ」の主題



調の変化



譜例2 ブゾーニ編曲 ピアノ版

Andante maestoso, ma non troppo lento
Feierlich gemessen, doch nich schleppend

ヨハン・ゼバスティアン・バッハ
(Johann Sebastian Bach 1685–1750)



バッハの作品は、多くの音楽家によって編曲されています。クラシック系では、大作曲家のリストやピアニストのW.ケンブ、オーストラリアのピアニスト、グレインジャーなどによるピアノ編曲があります。また、ジャズ系ではフランスのジャック・ルーシエ・トリオやアメリカのMJQ、スウィングル・シンガーズなどによってもアレンジされています。

メロディの七変化

このキラキラ星の曲は、もとはフランスの子どものための歌です。皆さんもよくよく歌っていたのではないでしょうか。

変奏という方法を分かりやすく説明するため、この主題(ドドソソララソ)を若い女性のA子さんとします。

A子さんが変化している様子を、譜面と物語で追ってみましょう。

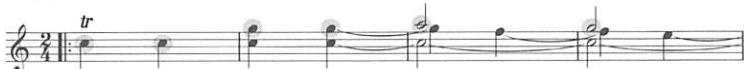
主題 A子さんは仕事を終え、帰宅しようと、会社から駅までの道をいつものようにゆっくり歩いています。



変奏1 おや、電車の時間に間に合わなくなりそうなので、A子さんは少し早足で歩き出しました。



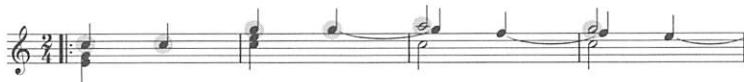
変奏2 A子さんは今までの早足をさらに早め、腕を振って駆け出しました。



変奏3 その途中、同じ会社のN君をちらりと見かけました。何となく心がウキウキし、気がつくとスキップをしていました。



変奏4 N君も、A子さんに気がつき、近づいてきました。



変奏5 N君は、もしA子さんに時間があるのなら、美味しいレストランが近くにあるので、夕食を一緒にどうかと聞いてきました。



変奏6 A子さんは、N君のことが以前から気になっていました。



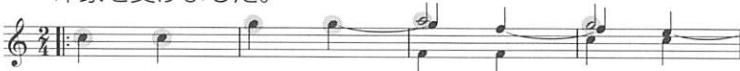
変奏7 実はN君もA子さんのことが気になっていたようです。



変奏8 A子さんは、N君がイケメンなので、ライバルが多いのではないかと少し心配でした。



変奏9 でも、こうして食事をしながら話してみると、誠実な人だな、という印象を受けました。



変奏10 2人は会話を弾み、お互いに好感をもちました。



変奏11 2人はすっかりうちとけました。



変奏12 食事のあとN君から真面目にお付き合いをしてほしいと言われ、A子さんの気持ちはバラ色です。主題に飾りがいっぱいつき、最後を締めくくるにふさわしいコーダによって、幸せに満ちあふれたハッピーエンドとなります。



無名の作曲家の名前を後世に残して

ベートーヴェン最後のピアノ変奏曲で、最高傑作といわれている曲です。ベートーヴェンのこれまでの変奏技法が思う存分駆使されています。演奏時間も50分ほどかかる大曲です。

作曲のきっかけは、1819年ウィーンの楽譜商で作曲家のアントン・ディアベッリから、彼の自作のワルツを主題にした変奏曲を書いてほしいとの依頼を受けたからです。その時には、ベートーヴェンはあまり乗り気ではなかったと伝えられています。たしかにディアベッリの主題は充実したものではなく、ここから33もの変奏が続くとは感じさせない曲です。

この変奏曲は、主題【譜例1】の雰囲気だけを残して、大胆に自由に変化されていきます。ほとんど原型をとどめていないような変奏もありますので、聞き慣れない人にはテーマとのつながりが分かりにくい部分もあるかもしれません。こうした変奏法を専門用語で「性格変奏」と呼びますが、この変奏の方法はベートーヴェンが最初に確立し、それ以降の作曲家たちに大きな影響を与えました。それぞれの曲は、テンポ表示や拍子、調性などを変化させることによって、さまざまな変奏に仕立てられています。しかし主題の動機が徹底的に活用され変化されているにもかかわらず、主題を想起させやすい変奏曲が間に入っているために、全体の統一感は失われていません。

第1変奏【譜例2】から拍子も変化し、行進曲風の新しいリズムが与えられます。その後の変奏も、さまざまに曲想が変化していきます。例えば第22変奏では、ベートーヴェンはディアベッリの主題と、モーツアルトのオペラ『ドン・ジョヴァンニ』のなかの旋律を結び付けています【譜例3】。最後の第33変奏では、主題がメヌエットで奏されます。この変奏は、ベートーヴェン最後のピアノ・ソナタ作品111の主題を想起させます。

譜例1 テーマ

Vivace

Musical score example 1 shows the theme in 3/4 time. The treble staff starts with a eighth note followed by a sixteenth-note pair, dynamic *p*. The bass staff starts with a quarter note, dynamic *p*. The melody continues with eighth notes and sixteenth-note pairs, ending with a dynamic *f*.

譜例2 第1変奏(ベートーヴェンらしい男性的な変奏)

Alla Marcia maestoso

Musical score example 2 shows the first variation in common time. The treble staff consists of eighth-note chords, dynamics *f* and *sf*. The bass staff consists of quarter notes, dynamics *sf* and *sf*.

譜例3 第22変奏(モーツアルト風になった変奏)

Allegro Molto

Musical score example 3 shows the 22nd variation in common time. The treble staff features eighth-note chords, dynamics *p*, *f*, *p*, and *sf*. The bass staff features quarter notes, dynamics *p*, *f*, *p*, and *sf*.

ルートヴィヒ・ヴァン・ベートーヴェン
(Ludwig van Beethoven 1770-1827)



ベートーヴェンは、故郷のボンから訪問先のウィーンに出てきた時、モーツアルトに会いました。その際モーツアルトは、即興演奏をしたベートーヴェンのあまりの上手さに「この青年は立派な音楽家のなるに違いない」と予言したといわれます。その後、ハイドンやサラエリなど有名な作曲家に師事しながら、ピアノの名手として名声を博しました。

一つの曲を2つの編成で使い回し

この曲が《ます》と呼ばれているのは、シューベルト自身が作曲した歌曲「ます」【譜例1】の旋律を主題にした変奏曲が、第4楽章に出てくるからです。ただし調が異なり、歌曲は変二長調で書かれていますが、このピアノ五重奏曲では二長調になっています。

通常のピアノ五重奏は、ピアノ1台と弦楽四重奏（ヴァイオリン1・2、ヴィオラ、チェロ）という編成ですが、このシューベルトの作品ではピアノ、ヴァイオリン、ヴィオラ、チェロおよびコントラバスという少し特殊な編成がとられています。ピアノ五重奏にコントラバスが入ること自体、非常にめずらしいことです。

曲は〈主題と5つの変奏＋コーダ〉から成っています。各変奏では、それぞれに主題を演奏する主役の楽器が異なります。

まず主題【譜例2】は第1ヴァイオリンによって提示され、他の弦楽器は伴奏でこれを支えます。ここではまだピアノは登場しません。第1変奏はピアノが主題をオクターヴで奏し、他の弦楽器は美しい装飾音でこのピアノを引き立てます。第2変奏ではヴィオラが主題を受け持ちます。そこに第1ヴァイオリンが、細かい3連符で高い音を軽やかに助奏していきます。続いて第3変奏は、チェロとコントラバスがオクターヴで主題を奏します。ピアノは高音の細かい音符で軽やか主題を装飾します。これまで長調で提示されていた主題は第4変奏で短調に変わり、テーマも大幅に変奏されダイナミックに展開されていきます。

第5変奏では再びもとの長調に戻りますが、曲の趣はいくぶん変化して変ロ長調に移ります。チェロが「ます」の主題を美しく変奏します。最後のコーダはテンポも速くなり、二長調に戻ります。ピアノは原曲の歌曲にあるままの伴奏形で奏され、ヴァイオリンとチェロが交互に主題を演奏して終わります。

譜例1 歌曲の《ます》(変二長調)

Etwas lebhaft

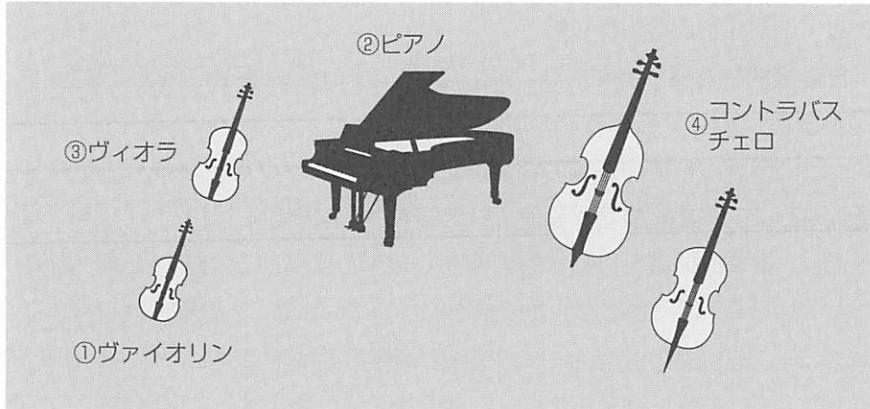


譜例2 ピアノ五重奏曲の「ます」のテーマ(二長調)

Andantino



●《ます》のテーマが順番に出てきます。はじめはヴァイオリンから弾きます。



フランツ・ペーター・シューベルト

(Franz Peter Schubert 1797-1828)



シユーベルトには、ほかにも自身の歌曲を主題にした弦楽四重奏曲《死と乙女》があり、名曲として知られています。ピアノ曲には《さすらい人幻想曲》があり、これも自身の歌曲からテーマを用いています。また、リストは「ます」「糸を紡ぐクレートヒエン」「アウェ・マリア」「春の信仰」「魔王」など、シユーベルトの歌曲をいくつもピアノ曲に編曲しています。シユーベルトには、彼を囲んで開く親しい友人たちの集い「シユーベルティアーデ」と呼ばれる集まりがあり、そこでの友人たちの支えのなかから多くの素晴らしい作品が生み出されていったのです。

フジコ・ヘミングのテレビ番組で有名に

「ラ・カンパネラ」は、リストがピアノのため書いた6曲からなる《パガニーニによる大練習曲》のなかの第3番にあたり、イタリア語で「鐘」を意味しています。パガニーニの《ヴァイオリン協奏曲第2番》の短調作品7の第3楽章ロンド「ラ・カンパネラ」【譜例1】を原曲に、リストがピアノ作品に作り上げた変奏曲です。ただし、調は原曲の口短調から嬰ト短調に変更しています。リストは以前にも、同じパガニーニの主題を用いて練習曲を作曲していますが、それらに大幅に手を加え、1851年に《パガニーニによる大練習曲》と名付けて改訂版を出版しました。

曲は軽快な速度で演奏され、1オクターヴより広い音程の和音で書かれている箇所がいくつもあるために、全体としてピアニストには器用さとともに、広い音域にわたる跳躍の場合の正確なテクニックなどが要求されます。そんなピアノの超絶技巧が駆使された華やかな曲です。

曲は、まず鐘の音を思わせる前奏から始まります。この鐘の音は、ヴァイオリンよりも、はるかに鮮やかに描き出されています。その鐘の音を背景に、パガニーニの主題から取られた主旋律【譜例2】が現れます。この主旋律を聞かせながら、高音に絶えずきれいに鐘の音を鳴り響かせるのは容易なことではなく、非常に高度な演奏技術を要します。

左右の手が交差する形で旋律が演奏され、32分音符の細かい動き、華やかな音の跳躍からなる箇所を経て、圧倒的なクライマックスへと曲は進行していきます。ピアノの高音域を駆使し、同じ音を繰り返し反復し、半音階で上行、下行する速いパッセージ、テンポの変化などの手法を効果的に使用して、きらびやかな作品に仕立てています。

このようにリストは、パガニーニの主題を単にピアノ用に移し替えただけでなく、ピアノ独自の技巧によって作品を高度なレベルで表現しようと試みています。その結果として非常に革新的で、今までにない難度の高さをもつ作品が生み出されることになりました。

譜例1 バガニーニの作曲した「鐘（ラ・カンパネラ）」のテーマ

Violin

Allegretto grazioso



譜例2 バガニーニのオリジナルからピアノに合うバッセージで編曲

Allegretto

8va

p ma sempre ben marcato il tema



フランツ・リスト
(Franz Liszt 1811 - 1886)



ハンガリーで生まれ、ヨーロッパ各国で活躍した音楽史上最大のピアニストであり、作曲家です。「ピアノの魔術師」と呼ばれるほどの技巧を持っており、演奏活動だけでなく、教育活動においてもリスト音楽院を設立したりして貢献しました。リストの娘コジマは、後に作曲家ワーグナーと結婚します。ということは、リストとワーグナーは義理の親子関係だったことになります。

多くの作曲家が用いたパガニーニのメロディ

この曲は、ピアノを独奏楽器とする協奏的作品で、ピアノ独奏と管弦楽による主題と24の変奏から成り立っています。この主題は、パガニーニのヴァイオリン曲《24のカプリース（奇想曲）》の第24番の主題【譜例1】を用いています。雄大、華麗な作品で、ラフマニノフの曲の中でも最も高い人気を持つ作品です。狂詩曲とは、叙事的、民族的な色彩を帯びた幻想風な内容をもつ器楽曲のことです。ちなみにリストやブラームスはじめ、少し時代が下りますがルトスワフスキイという作曲家も、同じこの主題を用いて変奏曲を書いています。

作品は、第1変奏と第2変奏の間に主題が置かれるという、少し変わった配置で書かれています。まず短い序奏は、主題の部分動機を3回繰り返す形で始まります。その後、短い第1変奏の後に主題【譜例1】が、第1、第2ヴァイオリンによって演奏され、第2変奏に続きます。

第7変奏では、新たにグレゴリオ聖歌の「ディエス・イレ」(dies irae 怒りの日)の旋律【譜例2】がピアノによって演奏されます。主題は低音楽器のファゴット、チェロ、コントラバスによって奏でられます。

第18変奏【譜例3】は、この曲の中でも特に有名な部分です。ラフマニノフならではの、叙情的な旋律が情熱的に演奏されます。そんな魅力ある部分のために、映画のBGMとして使われたり、この変奏部分だけを抜き出して演奏されることもあります。パガニーニの主題の一部を逆行形（上下を反対にした形）にした形で書かれています。最初はピアノが独奏で演奏し、それをオーケストラの弦楽部がトゥッティで受け継いで高らかに歌っていく形で進行していきます。

第24変奏に続くコーダでは、テンポが速くなり金管楽器が「ディエス・イレ」の旋律をフォルティッシモで奏し、最後はピアノが主題の断片を演奏して曲を閉じます。

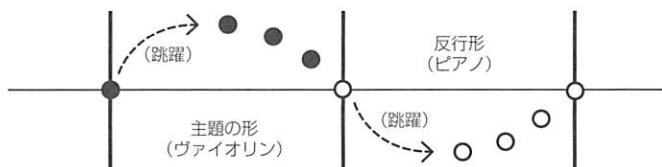
譜例1 パガニーニ「24のカプリース」の第24曲のメロディ

Quasi Presto

譜例2 ラフマニノフの第7変奏 Dies irae(怒りの日)

譜例3 この曲のクライマックスとなる第18変奏

●主題の一部を逆行形にして演奏する



セルゲイ・ヴァシリエヴィチ・ラフマニノフ
(Sergey Vasilievich Rachmaninov 1873 - 1943)



ロシア・ロマン主義を代表する作曲家で、敬愛したチャイコフスキーやリムスキー=コルサコフなどの影響を受けながら、独自の作風を築き上げました。彼自身も卓越した演奏技巧と人並みはずれた大きな手を持つ優れたピアニストで、ピアノという楽器の可能性を最大限に引き出すことを追求し続けました。作品に書かれた憂愁をおびた抒情的で甘い旋律は、現在でも世界の人々から愛されています。

第4章

ロンド形式

主題とエピソードが交互に繰り返されます。

ロンドには「輪舞」、同じ旋律が何度も回ってくるという意味があります。本来は踊りの曲でした。

例えばバレエなどで、主役級の人が踊る曲をAとします。この主役の人気が1曲踊り終わると、今度はその他大勢の人がいっせいに踊り出します。この部分の曲をBとします。その間、主役は2回目のAの曲で踊ることを考えて、お休みしています。その他大勢の人が踊るBの曲が終わると、再び主役の登場です。Aの曲の出番です。また主役は1曲踊ると、今度はCの曲が鳴り始めます。ここでは、今までとは異なったグループが踊り出します。この部分の曲をCとします。曲の雰囲気は、Aでもない、Bでもない、新しい曲です。その間、主役もBの曲を踊った大勢の人もお休みです。次の登場に備えて、エネルギーを蓄えなければなりません。

このようにして、主役は常にAの曲にのって登場、いうなればAは主役のテーマです。このように、曲は1回ごとにくるくるとAに戻り、ちょうど輪のように続していくので、「輪舞」と呼ばれるのです。

この考え方を音楽に当てはめて考えると、一つの主要な主題(A)の間に、いろいろな主題が挟まった形が、何回も繰り返される形式になります。図で書くと〈A－B－A－C－A〉、この場合は小ロンド形式、または単純ロンド形式といいます。A－B－A－C－Aの後にDやEが付け加えられる場合もあります。この場合は、大ロンド形式、または複合ロンド形式と呼びます。

主要な主題Aはいつも同じです。B、Cは、エピソードまたは挿入句、あるいは副主題と呼ばれます。フランス語ではAの部分をルフランといい、B、Cをクプレといいます。Aはいつも同じでも、異なるエピソードを挟むことによって、飽きがこないように、主題を反復することで強調しつつ、単調にならないようにできているのです。

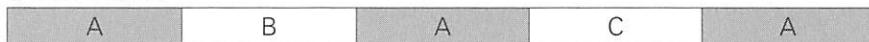
このように、ロンド形式とは、一つの主要な主題が、間にそれぞれ他の素材をはさみながら、何度も繰り返される音楽形式のことです。

ロンド形式の曲調は、軽快で、テンポの速い、流れるような曲想のものが多く、それ自体、独立した曲として書かれているものもあります。また古典的な形式で書かれたソナタ、交響曲、協奏曲の終楽章でもよく用いられ、曲の最後を飾るにふさわしい、華やかな演奏効果、演奏技巧が発揮できるように書かれています。

「ロンド」とか「ロンド・ブリランテ」とか「ロンド・カプリチオーソ」とか、曲の名前自体にロンドと付けられていれば、当然ロンド形式で書かれています。

整理して図式化すると次のようになります。

小ロンド形式



大ロンド形式



小ロンド



大ロンド①



同じ花飾りを持っている

大ロンド②



左右違う花飾りを持っている

お決まりの舞曲の順番に
独創性を加味しました

「パルティータ (partita)」とは、17世紀から18世紀に書かれた器楽曲のジャンルの一つで、多楽章構成による小品集のことです。

J. S. バッハは6曲のパルティータを作曲しました。それぞれのパルティータに含まれる標準的な曲の構成順序は、それまでは〈プレリュード、アルマンド、クーラント、サラバンド、ジーグ〉という定番の舞曲の配列になっていましたが、バッハの場合は、必ずしもその順番に従って作曲していません。ガヴォットやメヌエットなどの舞曲を自由に挿入したり、他の舞曲に置きかえたりすることによって、組曲全体の流れを独創性に富んだ個性的なものにしています。このパルティータ第2番の終曲では、テンポの速いジーグの代わりにカプリッチョが取り入れられています。

この「ロンド」も、バッハがパルティータの標準的な順序に関係なく、任意に挿入した舞曲です。ロンド全体は、常に2つの声部の模倣的なやりとりで進行していきます。

最初のロンド主題A【譜例1】は、哀愁を湛えた8分音符の軽やかな音の動きに特徴があります。続くエピソードB【譜例2】は音がなめらかに進んで行き、Aとの違いを浮き立たせています。2回目のAは、冒頭のAの忠実な再現になっています。エピソードC【譜例3】は、同じリズム・パターンの繰り返しが3回続きます。調はBもCも、もとのハ短調から離れて、転調を繰り返して单调さを避けるように工夫されています。3回目のAは、最後のコーダを引き立てるように前の2回の時よりも短縮されており、その代わりにコーダに重点が置かれ、華やかに曲が終止するように作曲されています。

全体は〈A - B - A - C - A - コーダ〉という典型的な小ロンド形式の順序で構成されています。

●この曲の形式

A + B + A

C

A + (Coda)

譜例1 A 8分音符で軽やかに始まる

Rondeau

譜例2 B 16分音符でなめらかに進む

譜例3 C 変ホ長調をへて再びAへ

ヨハン・セバスティアン・バッハ
(Johann Sebastian Bach 1685 - 1750)



バッハの鍵盤作品のほとんどは、チェンバロやクラヴィコートのために作曲されています。その多くはケーテンの宮廷楽長時代に書かれ、子供や弟子の教育のための作品として書かれました。なかでも《平均律クラヴィーア曲集》全2巻は長調・短調合わせて24の調による前奏曲とフーガから成り立つ作品で、ベートーヴェンの32のソナタがピアノの「新約聖書」と例えられるのに対して、このバッハの《平均律クラヴィーア曲集》は「旧約聖書」に例えられる最も重要な作品です。

鳥の鳴き声を絶妙に模した傑作

ダカンの《かっこう》というこの作品は、もとはクラヴサン（英語ではハーブシコード、イタリア語ではチェンバロ）のために書かれた曲ですが、現代ではピアノでよく演奏されます。ダカンの作品のなかでもとくに親しまれている小品で、かっこうの鳴き声をモティーフにした描写が優れています。

ロンド主題A【譜例1】のフレーズは何度も繰り返されます。普通は2小節の動機が、この曲の場合には1小節で形成されています。右手が分散和音風に16分音符で速く動くのに対して、左手はかっこうの鳴き声を模倣した音型を奏していきます。したがって、演奏する場合も左手のメロディを強調して弾くことになります。このパターンが何回も繰り返されます。

続くエピソードBは今まで短調で書かれていたフレーズが長調に変わると同時に、今度は右手にかっこうの鳴き声を模した音型が現れます。その後、再び全体としてよどみない流れのなかにAが現れ繰り返されます。

中間部に当たるC【譜例2】は、途中から右手の16分音符の1拍目の音が音階的に上昇して行き、この曲のクライマックスともいえる部分を形成します。そして最後にAが再現されるという、非常に分かりやすい〈A－B－A－C－A〉の典型的な小ロンド形式で書かれています。

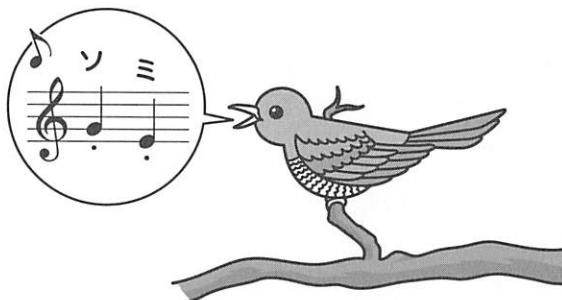
曲は全体的に軽快な印象を与えますが、同時に絵画的で描写的な色彩が強く、「かっこう」という題材を繊細に音で描いた華麗な作品に仕上がっています。

ダカンの作曲技法は、バロック時代でありながら同じ時期のJ. S. バッハの厳密な作曲法とはまったく異なり、装飾音を非常に巧みに使用しており、主旋律がはっきり浮かび上がった音楽になっています。同じフレーズがずっと続くのでテンポが狂いやすいこともあり、難易度を高くする曲となっています。演奏では描写的な表現が求められます。

譜例1 A 左手に「かっこう」のテーマが入る

Vivo
p e leggiere

譜例2 C かっこうの鳴き方が変わる



かっこうの鳴き声はソミ。楽器はいろいろですが、クラリネットなどで表されます。

ルイ＝クロード・ダカン
(Louis-Claude Daquin 1694 – 1772)



クープランやラモーに続く、18世紀フランスの鍵盤音楽を代表する作曲家のひとりです。幼少時から音楽の才能を発揮し、6歳のときフランス国王ルイ14世の前でクラヴサンを演奏したこともあります。その後、宮廷楽士として使え、王室礼拝堂、サン・ポール教会などでオルガニストとして活躍し、クープラン等の音楽を継承していました。また優れた口ココ調の曲を作り、クラヴサンのための小品を数多く残しています。

異色な組み合わせが奏でる音は？

フルートとハープという、それまでの協奏曲では考えられなかったような異色の楽器を独奏曲として組み合わせたことが、この曲の特徴です。音色のかけ離れた楽器の組み合わせは、それまでには前例がありませんでした。しかし、もともとハープの協奏曲が少ないために、今日では演奏される機会が多い曲となっています。

曲は1778年、モーツアルトがパリに滞在していた時に作曲されました。フルートを愛好する公爵とハープを愛好するその令嬢のために書かれたもので、優雅な雰囲気をたたえた名作です。紳士と淑女の愛好する2種の楽器を主役に据えたこの協奏曲は、まさに優雅な貴族社会の情景を彷彿とさせます。

曲は、まず最初の主題Aがヴァイオリンとヴィオラの弦楽器のみで提示されます。その後、この主題は管楽器に引き継がれてもう一度演奏されます。主題B【譜例1】は、まずハープのみによって演奏されます。この主題が自然な形でフルートに受け継がれていきます。主題C【譜例2】は、オーケストラが休んで、ハープの伴奏でフルートが奏します。またこの後、主題Dに相当する旋律を、今度はフルートが先に演奏し、それをハープが1オクターヴ下で再現していきます。

181小節から、最初の主題Aがハープとフルートだけで演奏されます。その後、主題Bが異なった調で演奏され、3回目の主題Aが、ガラッと変わって短調でハープに現れます。その後、主題C、Dと続いていきますが、それぞれ最初とは異なった調に変化し、単調さを避けています。

オーケストラがフェルマータで一時休止すると、フルートとハープだけがオーケストラの伴奏を伴わずに、それぞれ演奏者のテクニックを駆使し、「カデンツァ」と呼ばれる即興的な演奏を行います。そして最後は、オーケストラを伴ったハープとフルートが一緒になって最初の主題Aを再現して華やかに曲を締めくくります。

譜例1 B 奏される主題

ハープ

譜例2 C ハープの伴奏で奏されるフルートのメロディ

フルート

ハープ

Column

ハープは、弦を指ではじいて音を出す、1m70～80cmくらいの大きな楽器です。弦の数は47本もあり、それを両手の指を使って演奏します。ピアノとほぼ同じ音域を持ちます。オーケストラで用いられるものは「グランド・ハープ」で、その他にもさまざまなサイズの楽器があります。宮崎駿監督のアニメ映画「千と千尋の神隠し」の主題歌を歌って有名になった木村弓が演奏していたのは小型のハープです。

写真協力：青山ハープ株式会社

ピアノを習つたら一度は弾いてみたい曲

だれでも知っているピアノ曲の代表的作品です。少しでもピアノを習つた人なら、弾いたことがないという人はまずいないと思います。発表会やコンサートなどでよく演奏されます。

最初の主題A【譜例1】は、右手の弱拍から始まる有名な旋律で書かれています。このような曲の始まり方は、音楽用語で「アウフタクト」と呼ばれています。右手と左手が交互に揺れ動く印象的で特徴のあるこの8小節の主題は、ハ長調への転調を経て何回も繰り返されます。

主題B【譜例2】は短調の主題Aとは異なり、ヘ長調で書かれており明るく愛らしい旋律です。主題Aに比べて、後半では32分音符が使われており、細かい動きになっています。

主題Bから主題Aに続く部分は、自然に右手が流れるように進んでいきます。

主題C【譜例3】は、この曲の主音であるラの音が保続低音となって激しく鳴り響きます。この部分は、今までの主題AとBとの対比が明確で、非常にはっきり区別できるように書かれています。

全曲は、〈A－B－A－C－A〉と形式的にも簡素で分かりやすい小ロンド形式になっており、曲の構成も分かりやすく、現在でも多くの人に愛されている作品です。

ところで曲のタイトルとなっている「エリーゼ」とは誰のことなのでしょうか、今だにはっきりしません。が、「エリーゼのために」は、もともと「テレーゼ(Therese)のために」という曲名だったのが、ベートーヴェンがあまりに悪筆だったために解読不可能など、何らかの原因で「エリーゼ(Elise)」となったという説が有力視されています。

この曲は、簡単な曲だと思われるがちですが、音楽的に聴かせるには、テンポや強弱などにかなり心を碎く必要があります。

譜例1 A あまりにも有名なメロディ

Poco moto

譜例2 B イ短調からヘ長調に明るくなる

dolce

cresc.

譜例3 C イ短調にもどり音楽が激しくなる

cresc.

ルートヴィヒ・ヴァン・ベートーヴェン
(Ludwig van Beethoven 1770-1827)



主として19世紀(ロマン派前後の時代)に、特定の気分や標題を想起させ、即興風な自由な発想によって作られたピアノの小品を「キャラクター・ピース」と呼びます。決まった形式はなく、曲の長さも自由です。また、数曲まとめて曲集とされる場合もあります。ベートーヴェンのこの曲や《バガテル》は、このジャンルの最初期の作品です。やがてそれらはシーベルトの《樂興の時》や《即興曲》につながり、さらにシューマンの《子供の情景》やメンデルスゾーンの《無言歌》などにつながっていきます。

Shall We ダンス？

『舞踏への勧誘』は愛妻力口リーネに捧げられたウェーバーらしい華やかな作品です。もとはピアノ曲として書かれましたが、ベルリオーズのオーケストラ編曲で一躍有名になりました。オリジナルのピアノ曲は変二長調ですが、オーケストラ版は二長調で書かれています。

曲は、おだやかな序奏で始まります。ここは、男性が女性にダンスを勧誘する場面です【譜例1】。「お嬢さん、もしよろしければ、私と一緒に踊っていただけませんか？」。左手が奏でる低音のフレーズは、舞踏へと誘う男性の声です。

「あらまあ、どうしましょう…。」それに応えるように、右手が奏でる高い音のフレーズは女性の声です【譜例2】。

オーケストラ版では、男性の勧誘はチェロが演奏し、女性はクラリネットによって表されます。この2つの異なる楽器のかけ合いが、この場面で表現されています。

しばらくこのやりとりが続いた後、やがて華やかな舞踏会が始まります【譜例3】。この部分がロンド形式のA部分です。Bは8分音符の流れるような旋律と低音から半音階で上昇する部分から成り立っています。続くCでは、優雅さにあふれたワルツが演奏され、2人が踊りに熱中している様子がうかがえます。Dの部分では、今までのワルツと上昇する旋律が繰り返され、テンポも速くなり音量も大きくなります。この曲のクライマックス部分です。この後、最初のAにもどり、Bも繰り返されます。最後に冒頭の序奏が回想されて舞踏会の幕が静かに閉じます。この部分が後奏に当たります。

このように全曲は、紳士と淑女の対話を表す序奏と後奏をはさんで、主部に華やかな舞踏会の様子を表現している構成になっています。

譜例1 序奏 男性のお誘い

Moderato
grazioso

譜例2 女性の応え

譜例3 A ダンスを踊りはじめます

Allegro vivace

●この曲の形式

序奏

A + B + A

C + D

A + B + A

後奏

カール・マリア・フリードリヒ・エルンスト・フォン・ウェーバー
(Carl Maria Friedrich Ernst von Weber 1786 – 1826)



ロマン派初期の作曲家として知られています。モーツアルトによるドイツ・オペラの伝統を継承し、ドイツの国民的伝統に根ざしたオペラの流れを受け継ぎ、ドイツ国民オペラを確立しました。この伝統はワーグナーへと受け継がれていきます。また、よりよい音の融合とコントロールを求めて、オーケストラの配置を現在の形に変えたり、指揮棒を持ち、立ってオーケストラを指揮した最初の人物ともいわれています。

ドラマチックで迫力満点

この《幻想小曲集》は8曲からなるピアノ曲集で、ひとつひとつの曲は幻想的かつ情緒に満ちており、作曲家自身によりそれぞれの曲に文学的な標題が付けられています。また、これらの曲は単独でも頻繁に演奏されています。ただ手が小さいと演奏困難で、曲の持ち味を出すには相当なテクニックが必要です。

「飛翔」は、この曲集のなかの第2曲で、最も有名な曲です。曲は弱拍から始まる力強い冒頭主題A【譜例1】で印象的に始まります。高い音と低い音に挟まれた声部には、情熱的な旋律が歌われています。左手や右手に1オクターヴずつ2回の広い跳躍があり、曲名の由来を感じさせます。主題B【譜例2】では調が変わり、16分音符が軽やかに高い声部を歌うと同時に、左手の中間声部の動きも重要な役目をもち、この2つの旋律が絡み合うように曲が進行していきます。再び主題Aが出てきますが、1回目のA(8小節)のうち、今回は後半の4小節が転調しています。

続く主題Cでは再び調が変化し、いくぶん落ち着いた感じになります。この主題Cは主題AやBよりも規模が大きく書かれており、右手のゆったりとした力強い旋律の部分、中間部の半音階的できらびやかな部分、ゆったりとした力強い部分というように、3つの部分に分けることができます。

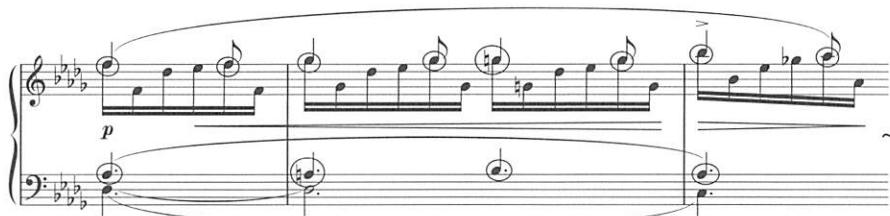
2回目の主題Aは短くなって再現されますが、音が厚く重量感が増しています。2回目の主題Bは、最初の時と同じように書かれていますが、最後の主題Aは冒頭と同様に力強い飛翔を感じさせます。

形式は〈A-B-A-C-A-B-A〉の大ロンド形式です。Cの部分をはさんで、3つの部分に分けて考えることができます。

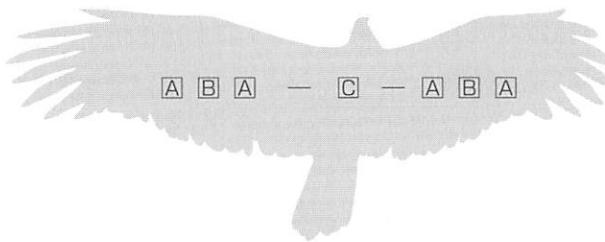
譜例1 A 力強い冒頭の主題



譜例2 B 右手のメロディに寄り添う左手のメロディ



●大ロンド形式は翼を広げた鳥のような構造です。



ローベルト・アレクサンダー・シューマン
(Robert Alexander Schumann 1810 – 1856)



ドイツのロマン派音楽を代表する作曲家の一人です。若い頃、ライプチヒ大学とハイデルベルクで法学を学びますが、やがて学業を放棄して音楽に専心するようになります。文学への関心が高く、このことはシューマンの音楽の本質を理解する上で重要な要素になります。特にピアノ曲と歌曲の領域で、優れた作品を多く残しました。この曲はシューマンがクララとの大恋愛中に、他のピアノ曲《子供の情景》や《クライスレリアーナ》《幻想曲》などとともに書かれました。

異国情緒にあふれた曲で作曲者は一躍有名に

この曲は、独奏ヴァイオリンとオーケストラのために書かれています。情熱的なメロディや原色的な色彩感が満ちあふれており、ラロの血に流れる“スペイン”を感じさせます。一般に協奏曲は3楽章形式なのですが、この曲は5楽章からなり、独奏ヴァイオリンだけでなくオーケストラ・パートも雄弁に書かれていることが、交響曲と名付けられた理由のひとつなのでしょう。

流麗でロマンティックなヴァイオリンの旋律や、軽快な木管楽器とヴァイオリンのかけ合いもあり、全体としてはそれほど重々しい印象の曲ではありません。この第5楽章は、ヴァイオリニストがテクニックを駆使し華やかに活躍するように、曲の最後にふさわしい楽章として書かれています。古典的なロンド形式とは違い、簡単な展開をはさみながらロンド主題が何回も繰り返される形をとっています。

鐘の音を思わせるようなオーケストラの序奏が30小節続きます。規則的なリズムの上で特徴のある序奏【譜例1】がファゴットなどによって執拗に繰り返し演奏されます。この動機はタンバリンとトライアングルを伴い、いろいろな楽器を加えながらピアノピアニッシモからフォルテへと盛り上がり、またピアノピアニッシモに落ち着きます。

続いて出てくるロンド主題A【譜例2】は、独奏ヴァイオリンにより軽快にはずむように多彩な表情をもって展開されながら何回も演奏されます。オーケストラは1度だけこのロンド主題をフルティッシモで演奏し、それが独奏ヴァイオリンに受け継がれていきますが、それ以外は独奏ヴァイオリンの独り舞台です。

中間部ではテンポが遅くなり、オーケストラが3拍子と2拍子の混ざった強いリズムの前奏を演奏した後、独奏ヴァイオリンがこのリズムで書かれた新しいハバネラ風の主題B【譜例3】を演奏します。その後、8分の6拍子と4分の2拍子の交替が続き、三の音の長いトリルを経て再度ロンド主題Aが戻ってきます。華々しく高揚した後、一気にコーダに入り、華やかに曲が終わります。

譜例1 鐘のような序奏

Allegro

8va
8va
8va
8va
8va
8va

ppp

ファゴット

譜例2 A ヴァイオリンのソロで始まる主題

Solo

mf

譜例3 B ハバネラにのったメロディ

mf appassionato

cresc.

f

ヴィクトール・アントワーヌ・エドゥアール・ラロ
(Victor Antoine Édouard Lalo 1823–1892)



フランスでヴァイオリン、ヴィオラ奏者として活躍したスペインの血をひく作曲家です。1850年代にフランスで室内楽への関心がよみがえったのは、ラロの功績によるところが大きいといわれています。というのは弦楽四重奏曲の普及を目指して四重奏団を結成し貢献したからです。彼の曲の作風は力強く新鮮なリズムや和声が特徴的です。曲中で出てくるハバネラは、もともとキューバに起きた独特的のリズムをもつ2拍子の舞曲で、ラロはこの《スペイン交響曲》のなかでハバネラのリズムを効果的に使っています。

ヴァイオリニストのテクニックが發揮される曲

この曲は、もともとは独奏ヴァイオリンとオーケストラのための協奏的作品ですが、ピアノ伴奏でも時おり演奏されます。現在でもサン=サーンスの最も人気のある作品の一つとなっています。1863年に名ヴァイオリニストで作曲家のサラサーテのために作曲、献呈されました。ヴァイオリンの小品としてはサラサーテの『ツィゴイネルワイゼン』と並ぶ人気の曲となっています。サラサーテのために書かれただけあって技巧的に大変難しい曲ですが、サラサーテからヴァイオリン奏法に関してアドバイスを受けて作曲していますので、無理なく弾ける曲のようです。

曲は文字通り「序奏」と「ロンド・カプリチオーソ」の2つの部分から成っています。「メランコリックに」と書かれた序奏は、サラサーテを意識してかジプシー音楽風に書かれています。弦楽器が同じリズムを繰り返すなか、独奏ヴァイオリンは最初の主題【譜例1】を奏でます。この主題は、基本的に和音を構成する音を一音ずつ低いほうから順番に弾いてゆく「アルペッジョ」という演奏方法で成り立っています。

続くロンドの部分は「カプリチオーソ」(気まぐれに、自由に)と題されているように、テンポを上げ、難技巧を繰り出す派手なロンドです。8分の6拍子によるロンドの主題A【譜例2】がヴァイオリンによって奏されます。主題B【譜例3】は、1オクターブ以上にわたってリズミックに上行、下行する旋律が中心です。主題C【譜例4】は、同じ音を反復しながらスタッカートで演奏されるリズムで書かれ、まずオーケストラの弦楽器で演奏され、それが独奏ヴァイオリンに引き継がれます。主題Dは4分の2拍子で、今までの主題と異なり静かに演奏されます。この後、主題A、C、Bという順序で繰り返され、軽快なコーダに続き華やかに終わります。

一般的に、ロンド形式は生きいきとした性質の主要な主題があり、それが一定の間隔で繰り返されながら、その間に対照的な素材で作られた挿入部によって繋いでいく役割を果たしています。形式は〈A-B-A-C-D-A-C-B-コーダ〉という構成になっています。

譜例1 序奏 アルペッジョが印象的なヴァイオリンのメロディ

譜例2 A ヴァイオリンの独奏で始まるロンド主題

Allegro ma non troppo

ヴァイオリン

譜例3 B リズミックに上行、下行するヴァイオリン独奏

ヴァイオリン

譜例4 C 同じ音を反復しながらスタッカートで奏される

オーケストラ

シャルル・カミーユ・サン=サーンス
(Charles Camille Saint-Saëns 1835 – 1921)



フランスのオルガニスト、ピアニストでもあった作曲家です。組曲《動物の謝肉祭》、交響曲第3番「オルガン付き」、交響詩《死の舞踏》などが特に有名です。あらゆるジャンルの作品を書きましたが、最も成功した作品は伝統的な古典派の様式に基づいて書かれた曲、すなわちソナタや室内楽、交響曲、協奏曲でした。他のフランスの音楽家と共に国民音楽協会を創設し、若き作曲家たちに大きな希望と自信を与えました。

音楽だけでいたずらの様子が分かります

「ロンド形式による昔の無頼の物語」とサブタイトルに書かれているように、14世紀の北ドイツの伝説にある奇人ティル・オイレンシュピーゲルの冒険談を題材にしています。オーケストラの各楽器の扱い方がみごとに生かされた傑作です。R. シュトラウス (リヒャルト・ゲオルク・シュトラウス Richard Georg Strauss 1864 - 1949) 流のユーモアがあふれた曲で、冒頭のホルンの旋律はよく知られており、彼の交響詩のなかでは演奏される機会が多い作品です。

譜例1 [前奏] 弦楽器による親しみやすい短い前奏で始まります。これは昔話の始まりの「むかしむかし……」を表すテーマです。



譜例2 ティル・オイレンシュピーゲルの旋律。続いて軽やかなホルンのソロによってティルが登場します。この旋律は「ティル・オイレンシュピーゲル」を表しています。曲中にいろいろな姿をとって繰り返し現れます。前奏とこのティル・オイレンシュピーゲルの主題の2つが全曲を通して繰り返し演奏されます。



譜例3 ティル・オイレンシュピーゲルの動機。オーケストラがフェルマータで一段落すると、続いて現れるクラリネットのソロによる主題が、もうひとつのティルの動機として、やはり曲全体のいたるところにちりばめられています。この動機は、冒頭の「むかしむかし……」の旋律が形を変えたものです。



譜例4 ティルは何かを思いつくと、すぐにいたずらを始めます。僧侶に変装して、でたらめなお説教で人々を煙に巻きます。



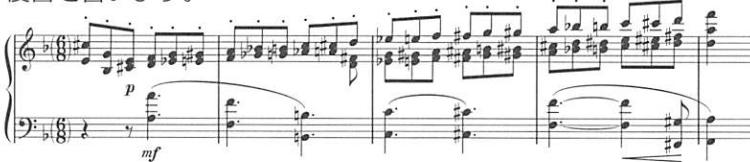
譜例5 ふと彼の心に破滅への予感がよぎります。弱音器をつけたヴァイオリンがその様子を表現しています。



譜例6 次にティルは騎士に変装し、美しい淑女を口説きます。ホルンとチエロがそれを表現しています。



譜例7 しかし、彼女に拒否されてしまいます。怒ったティルは、全人類への復讐を誓います。



譜例8 このように、好き放題にいたずらを繰り返しているティルの様子が描かれますが、突如金管楽器が鳴り響いて、ついにティルは逮捕されてしまいます。



譜例9 ここで、ティル・オイレンシュピーゲルの動機がクラリネットによって演奏され、ティルは最期を遂げます。



その後、ティルの残した愉快ないたずらは不滅であることを示し、冒頭の「むかしむかし……」のテーマが回帰して曲を閉じます。

フィンランドの国民的作曲家

自由なロンド形式で〈A－B－A－B－A'（コーダ）〉の構造となっています。ティンパニとヴィオラ、チェロ、コントラバスの低音弦楽器が刻むリズム【譜例1】にのって、独奏ヴァイオリンが、付点のリズムと跳躍のない音の進行で始まる主題A【譜例2】を奏します。この主題は1オクターヴ上で2回目が繰り返された後、最初から繰り返されているリズムの上に、独奏ヴァイオリンが華やかな旋律を展開していきます。

主題B【譜例3】は短調で書かれています、第1、第2ヴァイオリンと1オクターヴ下のチェロによって演奏されます。これは舞曲風のリズミックな主題で、8分の6拍子と4分の3拍子のリズムが交互に奏されます【譜例4】。その後、独奏ヴァイオリンによって主題Bが技巧性を発揮した旋律に発展します。

再び主題Aが、まず2本のクラリネットで演奏され、それを第1、第2ヴァイオリンとフルート、オーボエ、クラリネットの木管楽器が模倣してかけ合いのような形で反復していきます。冒頭のリズム【譜例1】は、最初はヴィオラ、チェロ、コントラバスの低音弦楽器から再現しながら、次第に第1ヴァイオリン、第2ヴァイオリンというように楽器を増やし、音の厚みが増すなかを、独奏ヴァイオリンが華麗に盛り上げてきます。

その後、主題Bが再び2本のクラリネットで演奏され、ヴィオラ、チェロ、コントラバスの低音弦楽器が冒頭のリズムを反復していきます。

最後はティンパニと弦楽器による冒頭の刻みのリズムにのって、独奏ヴァイオリンが技巧的な華やかさをまといながら舞曲風な主題を奏し、急速な上昇で全曲を閉じます。職人芸的な効果を発揮させた超難曲です。

譜例1 序奏 低音弦楽器が刻むリズム

序奏 ティンパニ
弦楽器

This musical score example shows a bassoon part in 3/4 time, marked 'poco f' (poco animato). The bassoon plays eighth-note patterns with grace notes, creating a rhythmic foundation. The strings provide harmonic support.

譜例2 A 付点のリズムと飛躍のないヴァイオリンのソロ

This musical score example shows a violin solo line in 3/4 time, marked 'energico'. The violin plays sixteenth-note patterns with grace notes, demonstrating rhythmic precision. The dynamic changes from 'poco f' to 'cresc.'

譜例3 B 短調になり舞曲風のリズミックなテーマ

This musical score example shows a rhythmic theme in 6/8 time, marked 'Tutti'. The theme consists of sixteenth-note patterns with grace notes, creating a dance-like feel. The dynamic changes from 'ff' to 'p'.

譜例4 テーマBのリズム

This musical score example shows the rhythm of theme B in a box. It consists of sixteenth-note patterns with grace notes, similar to the previous examples but in a different context.

ヤン・シベリウス
(Jean Sibelius 1865-1957)



後期ロマン派的傾向の作風を持った、フィンランドを代表する作曲家です。若い頃はヴァイオリニストを目指したこと也有つたといわれています。有名な交響詩《フィンランディア》が作曲された当時、フィンランドは帝政ロシアの圧制に苦しめられており、独立運動が起こっていました。シベリウスが祖国フィンランドへの情熱を込めて作曲したこの曲は、フィンランド民族の心の叫びが表現されているといつてもよいでしょう。

第5章

ソナタ形式

交響曲や器楽曲などの第1楽章に使われている代表的な形式です。

▶ 2つの主題のラブストーリー

世の女性を魅了し、韓流ブームを日本に巻き起こした「冬のソナタ」の「ソナタ」形式についてお話ししましょう。残念ながら「冬のソナタ」のストーリーは、ソナタ形式とは関係ありません。もともとソナタとは「鳴り響く」という意味をもっています。この「ソナタ形式」で書かれた曲を含んでいる曲を「ソナタ」といいます。音楽の形式の代表的なものです。

ソナタ形式には、必ず相対する2つの主題（テーマ）が必要です。分かりやすくするために、映画やテレビ・ドラマにたとえると、主人公の男性（ヒーロー）と女性（ヒロイン）に当てはまるといえるでしょう。

提示部：

この「提示部」には、2つの主題—これは作曲家が一番言いたいこと、強調したいこと、訴えたいこと—が書かれています。映画やドラマ、また小説でのヒーローやヒロインと同じと考えてください。キャラクターが濃くオーラのある、一度聴いたら忘れないようなメロディが使われます。第1主題が男性的でしたら、第2主題は女性的というように、対照的な雰囲気、メロディで書かれています。具体的に例を挙げてみてみましょう。

第1主題のタクト君は、長身でオーラのあるイケメンです。学生たちの間でもひときわ目をひきます。一回でも彼を見た女学生は、なかなか忘れられません。このタクト君のテーマは男性的でインパクトがあり、印象に残ります。

第2主題の響ちゃんは、おしゃれで可愛い女性です。スタイル抜群、流行も上手く取り入れ、ファッション雑誌から抜け出たモデルさんのように。多くの男性のあこがれの的です。響ちゃんのテーマは女性的で、優雅さを感じさせます。

展開部：

このタクト君と響ちゃんが出会った直後から、2人の間には恋心がめばえました。タクト君のテーマと響ちゃんのテーマが複雑にからみ合って、恋愛中の2人の心の躍動感や葛藤、嫉妬などが音楽で表現されていきます。行き違い、すれ違い、和解、糸余曲折、長い時間の経過を経て、恋愛が成就していきそうな予感がします。これがソナタ形式の聞かせどころ、「展開部」です。

再現部：

再び、タクト君と響ちゃんの2人は、出会った頃を思い出し静かな落ち着いた日々にもどります。響ちゃんは、すっかりタクト君のペースに慣れ、恋愛から発展してついに結婚することになりました。響ちゃんの名字も変わりました。タクト君と同じ姓(同じ調)になったのです。ハッピーエンドです。

コーダ：

これまでの糸余曲折を思い出しながら、2人は楽しい時を過ごしています。ここでは、第1主題をタクト君、第2主題を響ちゃんと名付けましたが、音楽では、このように相対する2つの主題(テーマ)をヒーローとヒロインになぞらえて作曲された曲が数多くあります。

このように考えると、ソナタ形式は、まるで人生、芝居、文学、哲学などのよう思え、より身近なものに感じられませんか。私たちは、文章を書く時によく「起承転結」を考えて書くと思いますが、それと全く同じことなのです。作曲家によって音で書かれた「起承転結」のストーリー、それがソナタ形式なのです。

このソナタ形式を図で書くと：

	提示部	展開部	再現部	コーダ
長調の曲	第1主題(主調) ↓ 第2主題(属調)	いろいろな転調、 動機の展開	第1主題(主調) ↓ 第2主題(主調)	曲全体の 締めくくり
短調の曲	第1主題(主調) ↓ 第2主題(平行調)	いろいろな転調、 動機の展開	第1主題(主調) ↓ 第2主題(主調)	曲全体の 締めくくり

演奏中の居眠り禁止！

100曲以上の交響曲を書いたハイドンですが、この交響曲「驚愕」という愛称は、第2楽章のはじめに静かな演奏が続いた後に、びっくりするような大きな音の和音【譜例1】が1回だけ現れる、すなわちゆっくりした緩徐楽章で全楽器がフォルティッシモで大きな音を出すという、その当時としては常識はずれの管弦楽の扱い方から名付けられました。そのエピソードとして、コンサート会場で居眠りしているご婦人方を起こすために、ハイドン独特の機知にあふれた思いつきからきているともいわれています。

第1楽章はゆっくりした序奏から始まります。

提示部はテンポが速くなり、第1主題【譜例2】はト長調で第1ヴァイオリンによって演奏され、これを引き立てるような対旋律が第2ヴァイオリンによって奏されます。第2主題【譜例3】は、多くのソナタ形式に見られるような対照的な主題ではなく、どちらかというと第1主題に近いものになっています。ただ、調は二長調になっており、この点では古典的なソナタ形式にのっとっています。それぞれの主題には、もう一度主題を確認するための確保と次の部分への橋渡しをする推移があり提示部が終了します。

続く展開部は、第1ヴァイオリンとオーボエの第1主題の演奏によって始まります。今までの主題の素材が手堅い方法で展開されていきます。

再現部では、第1主題が提示部と同様に第1ヴァイオリンと第2ヴァイオリンによって演奏されますが、フルートが第1ヴァイオリンと同じ旋律を1オクターヴ上で奏し、オーボエがフルートを引き立てるような短いフレーズを演奏します。この点が、第1主題の提示部と再現部の大きな違いです。

譜例1 第2楽章の有名なメロディ

Musical score example 1 shows a melodic line in 2/4 time. The first measure starts with a piano dynamic (p) and a sixteenth-note pattern. The second measure begins with a pianissimo dynamic (pp) and includes three 'ten.' (tenuto) markings above the notes. The third measure has three 'ten.' markings. The fourth measure begins with a forte dynamic (ff). The melody consists of eighth and sixteenth-note patterns.

譜例2 第1主題(ト長調) 第1ヴァイオリンの主題を引き立てる第2ヴァイオリン

Musical score example 2 shows the first theme in G major (indicated by a key signature of one sharp). The first violin (V1) plays a rhythmic pattern of eighth and sixteenth notes. The second violin (V2) enters with a melodic line that highlights the first violin's theme. The dynamics include piano (p), forte (f), and accents. The first violin's line ends with a fermata over the last note of the measure.

譜例3 第2主題(二長調) 第1主題に近い第2主題

Musical score example 3 shows the second theme in D major (indicated by a key signature of two sharps). The first violin (V1) plays a melodic line with grace notes and trills (tr). The second violin (V2) provides harmonic support. The dynamics are marked with piano (p) and dolce (dolce).

フランツ・ヨーゼフ・ハイドン
(Franz Joseph Haydn 1732 – 1809)



オーストリア出身の古典派を代表する作曲家です。多くの交響曲や弦楽四重奏曲、オペラを作曲し、「交響曲の父」とも、「パパ・ハイドン」とも呼ばれています。ハイドンの作風は古典的でありながら、それまでのソナタ形式を洗練化し、古典派のソナタ形式を確立しました。作品のなかでは交響曲、弦楽四重奏曲、オラトリオがよく知られています。ハンガリーの貴族エステルハージ家の楽長という仕事を長年つとめました。

国歌として歌われているハイドンの曲

弦楽四重奏はヴァイオリン属の楽器(ヴァイオリン2、ヴィオラ1、チェロ1)の4人で演奏される器楽合奏です。

第1ヴァイオリンは主旋律、音の高い部分を担当し、第2ヴァイオリンは主に伴奏の音型、低い音域を担当します。第2ヴァイオリンの方が難しい部分を弾く場合もあります。

ヴァイオリンで用いられる演奏法はヴィオラでも可能です。ヴァイオリンの音色がきらびやかなものに対して、ヴィオラの音はどうちらかというと柔らかく暖かいのが特徴です。ヴィオラは弦楽合奏にとって重要な楽器です。

チェロは非常に音域が広い楽器で、合奏の低音部を確保するだけでなく、艶やかな高音域も持つ非常にすばらしい独奏楽器でもあり、ビロードのような音色をもっています。ヴァイオリンやヴィオラが左肩に楽器を乗せて演奏するのに対し、チェロは大きいために、楽器のエンドピンを床にたてて演奏します。

この曲の「皇帝」という副題は、第2楽章がハイドンの歌曲《皇帝賛歌》を主題とする変奏曲であることから名付けられました。現在のドイツ国歌【譜例1】は、この曲が用いられています。

提示部では、第1主題【譜例2】が4小節間ハ長調で演奏されます。この第1主題には2つの動機が含まれています。2回目にこの第1主題がヴィオラとチェロで演奏される時に、新しい副主題が第2ヴァイオリン、続いて第1ヴァイオリンへと引き継がれていきます。

第2主題【譜例3】は、第1主題の動機をもとに作られており、提示部でも展開部でも確保、展開はされていません。

展開部では、第1主題を中心に、むしろ第1主題の副主題の方が多用されています。

譜例1 第2楽章がドイツ国家にもなった《皇帝賛歌》のメロディ

Musical score example 1 consists of three staves labeled A, B, and C. Staff A starts with a dotted quarter note followed by eighth notes. Staff B has a similar pattern with a different rhythm. Staff C features sixteenth-note patterns.

譜例2 第1楽章提示部 2つの動機による第1主題(ハ長調)

Allegro

Musical score example 2 shows two motifs under the heading "Allegro". The first motif is a descending eighth-note pattern, and the second is an eighth-note followed by a sixteenth-note pattern.

譜例3 第1楽章提示部 第2主題(ト長調)

Musical score example 3 shows the beginning of the second theme in C major, featuring a sixteenth-note pattern followed by eighth notes.

●弦楽四重奏



フランツ・ヨーゼフ・ハイドン
(Franz Joseph Haydn 1732 – 1809)



このハイドンの弦楽四重奏曲「皇帝」のメロディはドイツ国歌として親しまれていますが、同じようにフランスの「ラ・マルセイエーズ」、アメリカ合衆国の「星条旗よ永遠なれ」、イギリスの「ゴッド・セイヴ・ザ・キング」はその国民に親しまれよく知られています。現在、ベートーヴェンの交響曲第9番の終楽章「歓喜の歌」は、EU(欧州連合: European Union)の歌になっています。

漫画愛好家のクラシック音楽ファンが増えました

クラシック音楽に題材をとってヒットした「のだめカンタービレ」で一躍その名を知られようになった曲です。テレビで放映されたのでご覧になった方も多いと思います。オープニングの場面では、この曲の冒頭がいつも演奏されていました。

ベートーヴェンの交響曲には副題の付いたものがいくつかありますが、付いていない曲の中では一番人気のある曲です。ベートーヴェンの革新的な側面が現れている曲です。

まず、「ジャン」という強拍の和音【譜例1】で始まります。第3番交響曲「英雄」も同じように「ジャン」で始まりますが、第7番の冒頭の方はかなり長く続きます。ダイナミックな中にオーボエのソロが入って来たりして、非常に聴き応えがあります。上行する音階が何回か繰り返される序奏の後、付点音符による軽快なリズムが始まり、主題の提示を予感させます。序奏から、付点音符の入った軽快なリズムによる第1主題【譜例2】に切り替わる瞬間の間合いの面白さも聴きどころです。第1主題は、まず木管楽器によって奏され、その後ヴァイオリンに主旋律が移り、オーケストラ全部で演奏されます。この印象的なリズムは、金管楽器や打楽器に引き継がれて演奏されます。

第2主題【譜例3】も朗らかな感じですが、一貫して  という付点音符の動機が全曲を通して反復されるため、第1主題との対比は少なくなっています。区別はつきにくいかかもしれません。

展開部でも、この基本リズムが延々と続きます。

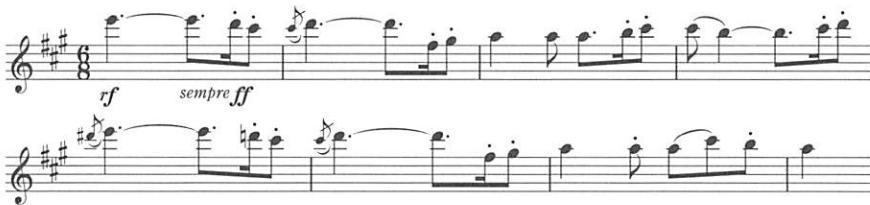
再現部になってもこの基本リズムは続いていきます。コーダでは、低音楽器が同じような音型を延々と繰り返すなかで、音楽は迫力を増していく豪快に終わります。

このように、この第7番交響曲で試みられているように、ひとつの楽章をリズミカルな同一リズムで押し通すという手法は、当時としては新しい試みであり、曲自体を大変生命力あふれたものにしています。

譜例1 序奏「ジャーン」という強拍の和音に続くオーボエのメロディ



譜例2 軽快なリズムによる第1主題(イ長調)



譜例3 第2主題(ホ長調)



ルートヴィヒ・ヴァン・ベートーヴェン
(Ludwig van Beethoven 1770 - 1827)



ベートーヴェンの交響曲は9曲ありますが、奇数番号の曲は男性的、偶数番号の曲は女性的だといわれています。奇数番号の代表作である第3番「英雄」第2楽章の葬送行進曲のリズム、第5番「運命」のリズム動機、第7番第1楽章の軽快なリズム、第9番第2楽章のスケルツォのリズムなどは、どれも劇的でしかも生命力に満ちたリズムで書かれています。

三大ヴァイオリン協奏曲のひとつです

協奏曲は「協力して演奏する曲」と書きます。では何と何が協力して演奏するのかというと、独奏楽器とオーケストラが協力して演奏してゆくのです。独奏楽器がピアノであれば「ピアノ協奏曲」、ヴァイオリンであれば「ヴァイオリン協奏曲」となります。

この曲は、メンデルスゾーンの作品のなかで最も親しまれている曲です。全編に美しいメロディと詩情があふれています。ヴァイオリンの魅力が最大限に発揮された作品で「メンコン」（メンデルスゾーンのコンチェルト）という愛称でも知られています。ブラームスやチャイコフ斯基のそれとともに「三大ヴァイオリン協奏曲」のなかの1曲として、多くの音楽ファンに愛されている名曲です。全曲は3つの楽章からなり、それぞれの楽章は切れ目なく演奏されます。これは当時としては新しい手法でした。

冒頭、2小節の弦楽器の分散和音による前奏の後、いきなり独奏ヴァイオリンが出てきて、美しい第1主題【譜例1】を演奏します。この始まりは大変有名で、哀調を帯びたその優雅な旋律は、映画やドラマ、CMなどさまざまな場面で親しまれています。その後、次の主題に進むまで、印象的な旋律【譜例2】がまずオーボエと第1ヴァイオリンによって演奏され、それは1オクターヴ上で独奏ヴァイオリンに受け継がれます。第2主題は、まず木管楽器によって奏された後【譜例3】、独奏ヴァイオリンが弾き継ぎます。

展開部は第1主題を中心に扱われています。展開部の終わりに、通常は再現部の後に置かれる、演奏者が高度な演奏技術を発揮するカデンツァという独奏部分が演奏されることもこの作品の特徴であり、そのカデンツァの音符が作曲家によってすべて書き込まれているのも、この時代としては画期的のことでした。

それが終わると再現部となり最初の主題が現れ、その後は情熱的な長いコーダになります。ここで独奏ヴァイオリンが華やかな技巧的音楽を繰り広げ、最後は情熱的に高潮して駆け抜けるように終わります。

譜例1 第1主題(ホ短調) 有名な独奏ヴァイオリンのメロディ

Allegro molto appassionato

譜例2 オーボエ・第1ヴァイオリン・独奏ヴァイオリンに受け継がれるメロディ

譜例3 第2主題(ト長調) 木管楽器で奏される

ヤコブ・ルートヴィヒ・フェリックス・メンデルスゾーン・バルトルディ
(Jakob Ludwig Felix Mendelssohn Bartholdy 1809 – 1847)



ドイツ・ロマン派の作曲家、指揮者です。ユダヤ系の富裕な銀行家の息子として生まれました。彼は作曲家としてだけでなく指揮者としても活躍し、わずか38年余りの生涯とはいえ、音楽史の上で重要な働きをしました。1829年に、歴史に埋もれ忘れていたJ. S. バッハの『マタイ受難曲』の音楽を復活させました。1750年バッハの死以来、初演後100年を経てこの再演の成功は、バッハ再評価の原動力となっただけでなく、全ヨーロッパにおけるバッハ復興につながる重要な契機になりました。

作曲家の性格は冒頭のリズムに表現されました

古今東西のピアノ協奏曲のなかでも、最も人気の高い作品のひとつです。

オーケストラによるフォルテの和音の後、独奏ピアノが鋭いリズムで弾き始めます。極めてドラマティックな序奏【譜例1】で印象に残る曲の始まりです。当時としては非常にめずらしい出だしかったが、これは聴衆を一気に引きつけます。

一度聴いたら忘れられない哀しみを湛えた美しい第1主題【譜例2】は、木管楽器によって提示されます。オーボエの素朴な響きが印象的です。その後すぐにピアノによって模倣されます。この第1主題に由来する副主題【譜例3】は、ピアノだけでなくオーケストラによって、何回も変化して演奏されます。

第2主題【譜例3】は第1主題の形の変わったもので、古典的なソナタ形式のように、第1主題とは対照的に作曲されたものではありません。この主題はまずクラリネットで演奏されます。最初ピアノはこのクラリネットの伴奏を受け持ちますが、このピアノの伴奏はかなりのテクニックが必要とします。その間も、副主題は他の木管楽器によって演奏されることによって、頻繁に現れていきます。

展開部ではテンポが変わり、少しゆっくりになります。再び第1主題の動機がクラリネットとピアノのかけ合いによって演奏されます。シューマンらしい叙情的な美しい箇所です。その後、突然冒頭のピアノの鋭い付点リズムの音型が現れ、オーケストラとピアノとのかけ合いが続き、フルートとピアノが形を変えた第1主題を演奏します。

再現部の出だしは、木管楽器が第1主題を演奏することから始まります。この曲は、同じロマン派の他の作曲家の協奏曲にあるような、きらびやかな職人芸的な演奏をピアノに求めているのとは少し異なり、時にはピアノがオーケストラの旋律の伴奏を受け持ったり、ひとつのメロディをかけ合ったりと、ピアノをオーケストラのなかの一つの楽器として扱っています。この点に、素晴らしい室内楽曲を数多く残したシューマンらしい手法が感じられます。

初演はライプツィヒのゲヴァントハウス管弦楽団の演奏会において、シューマンの妻で著名なピアニストだったクララの独奏で行われています。

譜例1 序奏 印象的でドラマティックな始まり

オーケストラ ピアノ

譜例2 第1主題(イ短調) 哀しみを湛えた美しいオーボエのメロディ

譜例3 第2主題(ハ長調) 第1主題を変形したクラリネットのメロディ

ローベルト・アレクサンダー・シューマン
(Robert Alexander Schumann 1810 - 1856)



クララ・シューマンは、作曲家ローベルト・シューマンの妻であるばかりでなく、もともとは父親フリードリヒ・ヴィークに師事した有能なピアニストでした。自身も作曲家で、夫の多数のピアノ曲を世のなかに紹介しました。後年、生涯の友人だった Brahms の音楽を広めるためにも尽力しました。

作曲者の死を予感させる曲

「ソナタ(sonata)」という言葉からイメージするのは、ピアノ・ソナタ、ヴァイオリン・ソナタ、チェロ・ソナタ、フルート・ソナタ等が多く、ひとつの楽器だけの独奏曲やピアノ伴奏などがついた小編成の曲と思われがちですが、「ソナタ」とはソナタ形式で書かれた曲を含む作品のことです。ということは「交響曲」とはオーケストラのために書かれたソナタである、ということができます。

この《交響曲第6番「悲愴」》は、チェロとコントラバスの低音に支えられたファゴットが、題名のごとく暗い動機【譜例1】をソロで演奏します。この動機は少しずつ上がっていき3回繰り返されます。その反対にコントラバスは半音ずつ下がっていきます。この部分は序奏とよばれる部分です。

第1主題【譜例2】は、ヴィオラとチェロで演奏されます。しかも、オーケストラのそれぞれのパートの半分の団員で演奏するように指定されており、弱々しい印象を与えます。古典派ソナタ形式の力強い男性的な第1主題とは印象が異なります。第2主題は逆に、一転して長調の甘い旋律【譜例3】が、弱音器をつけた第1ヴァイオリンとチェロで演奏されます。いかにも哀愁をおびたチャイコフスキー独特のメロディです。

展開部は突然テンポが変わり、全楽器で演奏するトゥッティ(tutti)から始まります。この展開部に入る直前に、**p**(ピアノ)が6個も書かれた**pppppp**という極端な記号が指示されているファゴットのソロ【譜例4】が出てきます。ただし、この音はファゴットで演奏するのは至難の技ということで、実際はバス・クラリネットで演奏されることが多いようです。神経を集中して、この楽器の音色を聴いてみましょう。この展開部では金管楽器が派手に活躍します。第1主題は、弦楽器や管楽器によって高い音域でたたみかけるように演奏されていきます。

再現部では、第1主題はフォルティッシモで演奏されます。第2主題はここでは弦楽器と木管楽器によって演奏された後、コーダに入っています。弦楽器の弦をはじくピツィカート奏法の音の上で管楽器のコラールが流れ、静かに終わります。

譜例1 動機 暗い動機がファゴットで奏される

Adagio

譜例2 第1主題(口短調) ヴィオラとチェロで弱々しく奏されるテーマ

Allegro non troppo

譜例3 第2主題(二長調) 第1ヴァイオリンとチェロで奏する哀愁あるメロディ

Andante (*teneramente, molto cantabile, con espansione*)

譜例4 極端な記号(*p*)が書かれたファゴットの譜面

Solo

ピョートル・イリイチ・チャイコフスキー
(Pyotr Ilyich Tchaikovsky 1840–1893)



チャイコフスキーは、生涯に6曲の交響曲を作曲しました。第1番から第3番には、それぞれ「冬の日の幻想」「小ロシア」「ポーランド」というニックネームが付けられています。現在では第4番から第6番の作品のほうがしばしば演奏されます。豊かで悲劇的なチャイコフスキーの旋律は、まさに彼の音楽の真髄を表現しています。

遠い外国の地から祖国に宛てた音の手紙

現在では第9番として知られているこの交響曲は、最初の出版の際には交響曲第5番といわれていた曲です。この曲の第2楽章のなかでイングリッシュ・ホルン(フランス語ではコール・アングレ)が演奏する有名なメロディは、日本でも「遠き山に日は落ちて～」という歌詞をつけて編曲された「家路」という題名の曲【譜例1】として知られています。学校の下校時によく耳にした方も多いと思います。このイングリッシュ・ホルンは、オーケストラではオーボエ奏者が演奏します。

また、全曲を通じてシンバルの一打が1回だけ、第4楽章に出てきます。シンバル担当の打楽器奏者は30分以上もの長い待ち時間の後での演奏だけに、非常に緊張するそうです。

今回は、第1楽章を見てみましょう。

まず、ゆっくりとしたテンポで低弦楽器のみの序奏【譜例2】から始まります。

第1主題の前半【譜例3】は、ホルンに続いてオーボエによって演奏され、後半はクラリネットとファゴットが受け継ぐ形になっています。この第1主題は弦楽器でも繰り返し演奏され、展開していきます。【譜例4】は、フルートとオーボエで奏される印象的な旋律です。

第2主題【譜例5】はフルートのソロによって提示されます。

展開部では、これらの主題が楽器を換えて繰り返し演奏されていきます。

再現部では提示部と同じように主題が進行していきますが、コーダではフォルティッシモですべての楽器が演奏するトゥッティのなかに、第1主題をもとにしたトランペットのファンファーレで華やかに終わります。

ドヴォルザークがアメリカ滞在中に書いた作品で、黒人靈歌やアメリカ・インディアンの歌からインスピレーションを受けたといわれています。

譜例1 第2楽章「家路」の題名で有名なメロディ



譜例2 第1楽章 序奏 ゆっくりとしたテンポで低弦楽器で奏される



譜例3 第1楽章 第1主題(ホ短調) ホルン・オーボエ・クラリネット・ファゴットに受け継ぐメロディ



譜例4 第1楽章 フルートとオーボエで奏される



譜例5 第2主題(ト長調) フルートのソロで奏される



アントニン・ドヴォルザーク
(Antonin Dvořák, 1841–1904)



ドヴォルザークは交響曲だけでなくいろいろなジャンルに傑作を残しています。なかでも室内楽と連弾曲《スラブ舞曲》のようなピアノ曲には親しみやすい曲が多くあります。ご存知のピアノ曲「ユーモレスク」は、アメリカ滞在3年目の夏、一時帰国した時に書かれました。『8つのユーモレスク』の第7曲目に当たります。彼の素朴で温かい人柄がにじみ出た曲です。この曲はヴァイオリン奏者クライスラーがヴァイオリン独奏用に編曲してから広く親しまれるようになりました。「家路」のメロディにしろ「ユーモレスク」にしろ、ドヴォルザークの故郷ボヘミアへの郷愁がそのまま私たちの心の深くに届きます。

自作「さすらう若人の歌」の一部が再登場

マーラーはこの曲を、当時彼が愛読していたドイツ・ロマン派の作家ジャン・パウルの同名の小説にちなんで「巨人(Titan)」と名付けました。

曲は序奏の「ゆるやかに重々しく」という指示で静かに始まります。マーラーは、常に楽譜に非常に細かい指示をドイツ語で記入しています。第1楽章の冒頭の音は、弦楽器で倍音を出すフラジオレット(ハーモニクスとも呼ばれる)という演奏技法で伸ばし続けるピアニッシモのラの音の上に、オーボエとファゴットが特徴あるカッコウの鳴き声を模した動機【譜例1】を演奏します。この動機は全曲いたるところに使われており、曲の統一を図っています。この動機と対照的に、半音階的に順次上行する別の動機【譜例2】もチェロとコントラバスによって演奏されます。

序奏の後、チェロが第1主題【譜例3】を演奏します。マーラー自身の歌曲「さすらう若人の歌」の第2曲「朝の野辺を歩けば」から引用された美しい旋律です。このように、以前に作曲した自作の連作歌曲を大規模な形式に発展させ、交響曲に仕立て上げるというユニークな方法はマーラーの作曲技法の特徴です。

第2主題【譜例4】は木管で演奏されますが、第1主題の対旋律のように扱われているため、明確ではありません。

展開部になると、フルートやクラリネットが鳥のさえずりに似せた動機を演奏し、コントラバスの低音にのってチェロが歌うような旋律を奏します。その後、ホルンの合奏が再び響くとテンポも再び速くなり、最後は息をもつかせないコーダで第1主題と第2主題が展開され、弦楽器に半音階的に上昇する動機が繰り返され、管楽器のファンファーレが鳴り展開部が終わります。

再現部は提示部の再現という型どおりに進み、冒頭のカッコウの動機による連打をティンパニが奏して勢いよく終わります。

譜例1 序奏 動機1 オーボエとファゴットにより「かっこう」の鳴き声を奏する

Langsam

譜例2 序奏 動機2 民謡から引用したメロディ

譜例3 第1主題(二長調) 歌曲「さすらう若人の歌」から引用されたメロディ

譜例4 第2主題 木管楽器で奏される第1主題の対旋律

グスタフ・マーラー
(Gustav Mahler 1860 - 1911)



マーラーは歌曲と交響曲を中心に作品を書いています。それらの交響曲には、ニックネームが付き、自身の歌曲が含まれているものが多くあります。交響曲第2番「復活」、第8番「千人の交響曲」など。特に李白や中国・唐の詩人の詩をもとに作曲された交響曲「大地の歌」などは、よく知られています。

シンプルな形式のなかに奥深さを秘めて

「ソナチネ(sonatina)」とは小さなソナタという意味です。ソナタの小型版、ミニ・ソナタともいえます。しかしこのソナチネは、ピアノの初心者(学習者)がかならず弾かされるあのソナチネとは違い、技巧的には難しい曲となっています。

曲は古典的形式に則して書かれており、簡潔にまとめられています。3楽章構成からなっていますが、第1楽章の第1主題が第2、第3楽章に和声やリズムを変えた形で現れます。作曲当時から大好評を博し、ラヴェル自身の名前を広めた1曲といわれています。この作品はラヴェルが音楽雑誌主催の作曲コンクールのために書いた曲ですが、どの旋律も魅力的で繊細な響きをもち、抒情的に歌われていきます。

第1主題は始めの2小節【譜例1】が1オクターヴのユニゾンで、両手で2回繰り返された後、次の2小節【譜例2】がまた2回繰り返されます。このオクターヴの旋律を、細かい音符で両手が絡み合う形の内声が支える形で曲は進みます。演奏ではテンポが速いえに右手と左手の交錯が多いため、慣れるまでは弾きづらい曲です。

全曲を通しての基本の動機は、この冒頭の完全4度下行する音の動きの旋律と中間を埋める声部の音程(専門的にいうと空虚5度)の平行移動が支配しています。

第2主題【譜例3】は4小節間続きます。この第2主題も後半の2小節が繰り返されています。

展開部では、第1主題と第2主題の展開がソナタ形式を踏襲しながら進行していく、【譜例4】では、第2主題の動機が縮小されています。

このように、この曲はラヴェルの斬新な和声と古典的な手法がみごとに結び付いたすぐれた作品になっています。

譜例1 第1主題 細かい音符で絡み合う内声部の伴奏形

doux et expressif

Modérément

完全4度

譜例2

譜例3 第2主題

a tempo

en dehors

p

譜例4

acce - - le - - ran - - do

ジョゼフ＝モーリス・ラヴェル
(Joseph-Maurice Ravel 1875-1937)



ドビュッシーと並んで近代フランスを代表する作曲家です。 「管弦楽の魔術師」とか「スイスの時計職人」ともいわれる精緻な作品を書いています。母親がスペインのバスク地方の出身であったため、彼の作品にはスペイン情緒を感じさせるものが多くあります。またジャズからの影響が見られる曲も書いています。初期の《古風なメヌエット》や《亡き王女のためのパヴァーヌ》には、彼の古い音楽への関心がうかがえます。また、これらの作品はラヴェル自身によって管弦楽にも編曲されました。

第6章

ロンド・ソナタ形式

ロンド形式とソナタ形式が融合しました。

ロンド・ソナタ形式は、 $\langle A - B - A - C - A - B - A \rangle$ のロンド形式を $\langle A - B - A - \square - A - B - A \rangle$ とCをはさんで2つの部分に分けて考えてみると一番分かりやすいと思います。すなわち、ソナタ形式のように3つの部分に分けて、最初のA-B-Aがソナタ形式の提示部、Cの部分が展開部、最後のA-B-Aが再現部のように書かれている場合、これをロンド・ソナタ形式といいます。ロンド形式とソナタ形式の折衷的な形式です。

Aでは、ソナタ形式と同じように第1主題、第2主題という2つのメロディが提示されます。Cの部分は中間部であり、同時に展開部でもあるので、AやBと比べて比較的長く書かれます。この形式の最後に、終結部にあたるコーダが付く場合もあります。

ロンド形式とソナタ形式の両方の性格をもっているため、古典派の独奏曲、交響曲、協奏曲、弦楽四重奏曲などの終楽章に多く用いられました。

しかし、明確に「ロンド・ソナタ形式」と分類できる曲は少なく、多くの場合「ロンド風のソナタ」、あるいは「ソナタ形式風のロンド」と分析されることがほとんどです。

ソナタ形式の提示部では、第2主題が提示されたあとは展開部へと進みますが、ロンド・ソナタ形式ではB(第2主題)のあとにまたA(第1主題)が現れることが、ソナタ形式との唯一の違いだと考えられます。

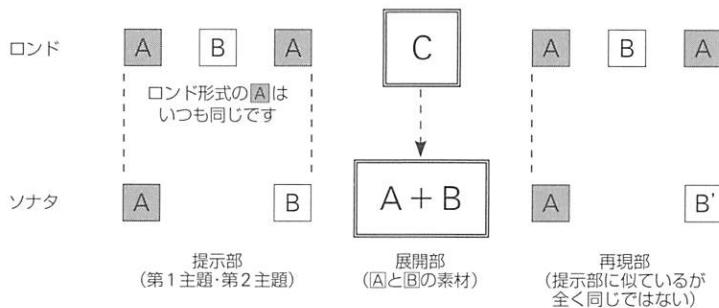
終楽章によく用いられるため、たいていのロンド・ソナタ形式はフィナーレにふさわしい軽快な雰囲気であることが多く、主題をはっきり響かせて最後を飾っています。

簡単な図で表すと、次ページのようになります。

●ロンド・ソナタ形式(2つを融合しました。)

主部			展開部	再現主部		
A	B	A	C	A	B	A
主調 平行調等	属調 平行調等	主調	さまざまな 調で展開	主調	主調 同主調	主調

●ロンド形式とソナタ形式の違い



モーツアルトとしては、めずらしい短調の曲

「協奏曲」はバッハ、ヘンデル、ヴィヴァルディの時代、いわゆるバロック時代からさかんに作られるようになった音楽スタイルです。しかし、ハイドンやモーツアルトが活躍した古典派時代の協奏曲は、バロック時代の様式とは少し異なります。

通常、協奏曲は独奏楽器とオーケストラで演奏するのですが、同じものをただ繰り返すのではなく、そこに何か変化を付けようとしたのです。そのために古典派の協奏曲では、最初の主題提示はオーケストラだけで行い、その後に初めて独奏楽器が登場するという形で始まる曲が多くなります。

しかしこの協奏曲の第3楽章は、前の第2楽章から一転していきなり独奏ピアノの分散和音が上行する激しい曲想の主題A【譜例1】を提示します。そしてピアノの独奏の後は、弦楽器でその主題を反復し拡大していきます。その後、ピアノが経過的な旋律を演奏し主題Bに入ります。

主題B【譜例2】はへ短調に転調しており、はっきりとした主張をもっています。展開部に相当する主題C【譜例3】は、へ長調で明るく演奏されます。その後、冒頭の分散和音の主題Aが再度現れ、曲が進むにしたがって華やかさもさらに増していきます。カデンツアの後は二長調に転じ、主題Cによるコーダで、壮大に曲を閉じます。全体は〈A－B－C－A－B－C〉の形式で書かれています。

モーツアルトは、生涯に27曲のピアノ協奏曲を作曲しましたが、短調のピアノ協奏曲はこの二短調と、もう1曲、第24番のハ短調の2曲しか書きませんでした。この曲は華やかさが求められていた当時のピアノ協奏曲とはまったく感じが違って、それまでの彼の協奏曲には見ることができない、激しい感情の高まりを感じさせます。暗く不安げな旋律、劇的な展開、厳しさと激しさの入り混じった感情など、彼の作品のなかでも、強い意志と表現力をもった作品ということができます。

譜例1 激しい曲想の主題A（二短調）



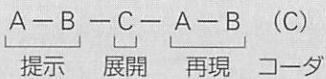
譜例2 へ短調に転調した、はっきりした主題B（へ短調）



譜例3 展開部に相当する主題C（へ長調）



●この曲の形式



ヴォルフガング・アマデウス・モーツアルト
(Wolfgang Amadeus Mozart 1756 - 1791)



ヴォルフガングの父、レオポルト・モーツアルトは、現在でいうところの「ステージ・ババ」のはしりでした。交通手段として馬車しかない時代に、幼いアマデウスを連れて、ヨーロッパ中を演奏旅行で回りました。それは北はロンドン、アムステルダムから南はローマ、ナポリにまで及んでいます。姉ナンネルとの連弾、幼い彼の自作品発表などによって示されたヴォルフガングの才能は、各地で神童として称賛的となりました。

自作からの使い回し

標題の「ハフナー」とは、モーツアルトの出身地ザルツブルクの大富豪の名前であり、この曲がハフナー一家に献呈されたことから名付けられました。

モーツアルトは数多くの交響曲を作曲しましたが、ザルツブルクからウィーンに移り住んだ頃に書かれた交響曲は、従来の交響曲の枠を超えて充実した傑作となっています。この時代に書かれた6曲の交響曲は、どれも古典派の交響曲を代表する傑作に数えられています。そのなかで最初に作曲されたのがこの交響曲第35番「ハフナー」です。

「ハフナー」という名前のつく作品は、この交響曲以外に「ハフナー・セレナーデ」と呼ばれているセレナーデ第7番があります。

第4楽章は、プレスト(急速に)と書かれたテンポで開始されて、一気に終わってしまう曲です。形式的には〈A-B-A-C-A-B-A〉のロンド形式と、提示部がA-B、展開部がA-C、再現部がA-Bと考えるソナタ形式を融合させたような形になっています。

主題A【譜例1】は弦楽器が弱音で、みんなで同じメロディを弾く形で始まり、さざめくようなこの主題は全曲を通して4回登場します。4回とも同じ二長調で書かれています。この主題は、ちょうどその頃に初演されたばかりの彼自身の歌劇『後宮からの誘拐』のオスミンのアリアから取られています。この主題は毎回弦楽器で演奏され、その後、打楽器、管楽器が加わって繰り返され展開していきます。

主題B【譜例2】はおだやかな旋律です。この主題も全曲を通して3回演奏されますが、それぞれ調が異なって登場します。3回目は主題Aと同じ二長調で再現されています。主題Cに相当するのは主題Bが展開されたもの【譜例3】と考えることができます。

この交響曲は、すでに大家の域に達していたモーツアルトが、なおも新しい表現に挑戦した意欲作と考えることができます。

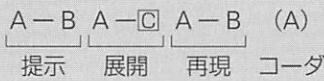
譜例1 弦楽器の弱音で演奏される主題A（二長調）

譜例2 おだやかな旋律B（イ長調）

譜例3 旋律Bが展開された主題C（ト長調）

●この曲の形式

シンメトリックな形式ではない。



沃尔夫冈·阿马德乌斯·莫扎特
(Wolfgang Amadeus Mozart 1756 – 1791)



モーツアルトの交響曲には、副題として作品の献呈者のかたに都市の名前が付いたもののがいくつもあります。第31番「パリ」、第38番「プラハ」などです。これらは、それぞれの交響曲が作曲された場所の名前です。この点から見ても、モーツアルトの演奏旅行がいかに広範囲にわたっていたかが分かります。

ロンド・ソナタ形式の見本

ベートーヴェンの「三大ピアノ・ソナタ」のひとつで、初期の作品を代表する傑作として知られています。この曲ではそれまでのピアノ曲とは異なり、人間的な感情の表現が豊かになっています。その点でロマン派の音楽の原点のひとつとみなすことが可能であり、ピアノのロマン的な特性を、うまく利用することに成功した曲ということができます。

この第3楽章は、ロンド・ソナタ形式の代表例としてよく紹介される作品です。本来はヴァイオリンとピアノのデュオのためにスケッチされていました。

主題A【譜例1】は、第1楽章の第2主題の動機がもとになっています。分散和音の伴奏の上にドラマチックな主題が提示されます。

主題B【譜例2】は変ホ長調に転調し、この主題が3連符に発展したり、コラール風に形をかえて奏された後、再び主題Aが回帰します。主題C【譜例3】は変イ長調の新しい主題で、右手の第1の旋律が上行に跳躍、左手の第2の旋律が下行に跳躍というように、2つの旋律が組み合わさっていく、専門的にいうと対位法的な樂想になって進行していきます。この主題Cは4小節が基本の動機で、これが4回繰り返されて続いていくのですが、同じ繰り返しではなく、音がオクターヴで反復されたり、使用する音域も広くなるなどの変奏が見られます。この楽章の頂点にあたる部分と考えてよいかもしれません。主題Cの最後は、ピアノの低音を使って主題Aの再登場を予感させる4小節の音型が4回繰り返されて期待感を増していきます。このような曲の構成は、ベートーヴェンの作曲家としての個性を感じさせます。

この後、再び主題A【譜例1】が演奏されます。ちょうどソナタ形式の再現部に当たるので、主題Bも再現されます。いま一度主題Aが現れた後、主題Bの3連符の要素と組み合わさり、コーダを形成します。最後に冒頭の動機【譜例4】が回想されて曲を閉じます。

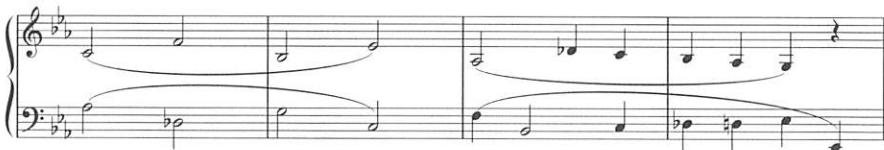
譜例1 ドラマチックなロンド主題A（ハ短調）

RONDO
Allegro

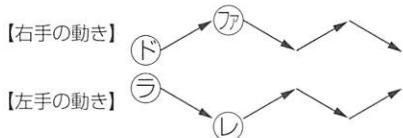
譜例2 変ホ長調に転調する



譜例3 対位法的なシンメトリックな動きの主題C（変イ長調）



●主題C（譜例3）は対位法的な音の動きをしている。

両手が反行して
シンメトリックな
動きをする

譜例4 冒頭の動機の回想（変イ長調）

主題Aの回想



ルードヴィヒ・ヴァン・ベートーヴェン
(Ludwig van Beethoven 1770 - 1827)



この「悲愴」のように、ベートーヴェンのピアノ・ソナタには第14番「月光」、第15番「田園」、第17番「テンペスト」、第23番「熱情」、第26番「告別」、第29番「ハンマークラヴィーア」など、いろいろニックネームが付いた曲が多くあります。しかもそのどれもが名曲として知られています。そんな標題をよりどころにしてこれらの曲に耳を傾けてみるのも興味深いでしょう。

晩年のブラームスが至った枯淡の境地

ブラームスは3曲のヴァイオリン・ソナタを残しています。

昔のヴァイオリン・ソナタは、ヴァイオリンとピアノという2つの楽器が対等な関係ではなくて、どちらか一方が主で他が従という形をとっていました。ロマン派の時代には、ピアノはその機能を限界まで高めた結果、実際の演奏ではピアノがヴァイオリンを圧倒してしまう場合が多く見受けられます。しかしブラームスのヴァイオリン・ソナタは、この2つの楽器が実際に美しい調和を保っていることに感心させられます。そのような絶妙のバランスを保ちながら、聞こえてくる音楽からは、しみじみとした深い情感がにじみ出できます。

この作品は、他のヴァイオリン・ソナタと比べて、より外向的で職人芸的な性質を持ち合わせている点が特徴です。第4楽章では交響的なスケールの大きさがあり、音がよく響く広々としたスペースで演奏される方が効果的です。第2番のソナタと2年しか隔たっていないにもかかわらず、作品の雰囲気が大きく異なります。第2番のソナタではあれほどまでも幸福感につつまれていたのが、この第3番のソナタでは晩年のブラームスに特徴的な渋くて重厚な雰囲気や厭世的な気分が支配しています。

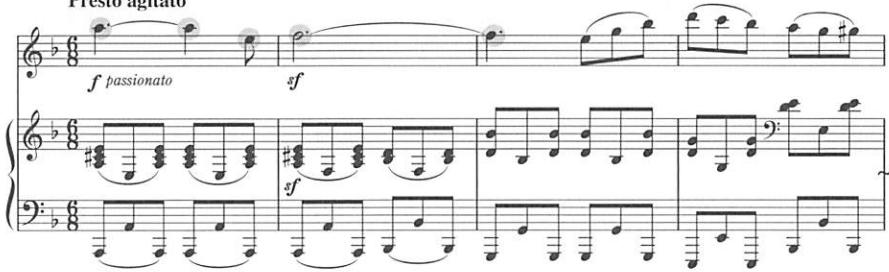
曲はそれまでの第1、2、3楽章とは変わって終楽章はプレスト・アジーター(速く、激して)と書かれています。はっきりした主題A【譜例1】が提示されます。ヴァイオリンとピアノのかけ合いの後、コラール風の主題B【譜例2】がまずピアノによって弱音で演奏され、ヴァイオリンが加わってピアノを引き立てるようにして展開していきます。

再び主題Aにもどり、今度は主題C【譜例3】が演奏されます。ピアノ伴奏の静かなメロディです。半音階のヴァイオリンとピアノ、それに印象的なシンコペーションと呼ばれるリズムが特徴的な要素となってこの作品のクライマックスを形作っていきます。

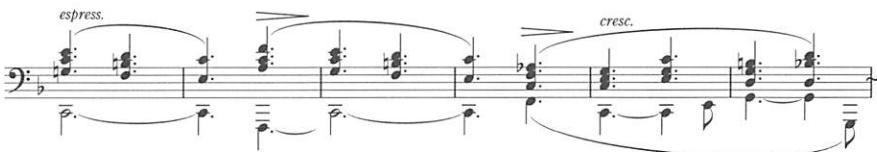
3回目の主題Aとそれに続く主題Bが再現し、コーダに現れる主題Aが燃えるような興奮を呼び起こして終わります。

譜例1 速く激しくと指定された主題A(二短調)

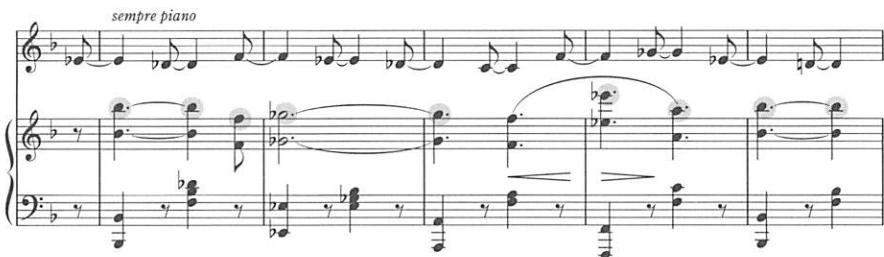
Presto agitato



譜例2 コラール風の主題B



譜例3 主題A(ヴァイオリン)を変形させて、主題C(ピアノ)になじませている



ヨハネス・ブラームス
(Johannes Brahms 1833 - 1897)



このヴァイオリン・ソナタ第3番は、この時期に相続いた友人の不幸を映し出すかのように、短調で書かれています。ブラームスの作品はマーラーやワーグナーからは批判されました。シューマン夫妻やこのソナタを献呈された指揮者でピアニストのハンス・フォン・ビュローには高く評価されていました。

ノルウェーの踊りのリズムを協奏曲に

この作品は古今のピアノ協奏曲の中でも非常に人気の高い曲であり、グリーグの代表的な作品として広く知られています。作曲家でピアノの名手であったフランツ・リストが、この作品の楽譜を初めて見てすぐに弾いて絶賛したというエピソードが伝わっています。また、シューマンのイ短調のピアノ協奏曲と似ている点がよく指摘されます。そのため、この2曲が組み合わされて1枚のCDにまとめられて販売されることも多くあります。

第3楽章は第1楽章と同じイ短調で書かれ、自由なロンド・ソナタ形式の形をとっています。軽快なリズムが印象的で、第2楽章から続けて演奏されます。

曲は管弦楽による短い導入の後、4小節のピアノの華々しいカデンツァで開始されます。ノルウェーの舞曲を思わせる主題A【譜例1】は、まずピアノによって提示され、この主題は管弦楽によって反復されていきます。ピアノによる経過的な流れから主題B【譜例2】に進みます。

トランクイロ(静かに)の指示で始まる中間部では、独奏フルートが抒情性に溢れたメロディの新しい主題C【譜例3】を歌い上げます。ピアノの独奏はこのメロディを受け継いで変奏、反復され、これに管弦楽が加わり美しい音の綾を作り上げていきます。

再現部では初めのテンポに戻り、主題Aがピアノによって演奏されます。この部分のピアノで演奏される主題は自由に展開、拡大され、ピアニストのテクニックの見せ場となるように作曲されています。

コーダは、まずイ長調で4分の3拍子に変化し、テンポも速くなります。主題Aの動機【譜例4】がピアノによって華麗に演奏されます。続いて4分の4拍子に変わり、マエストーネ(堂々として)の指示にふさわしく、中間部の主題Cが管弦楽とピアノによって雄大に演奏されて壮大な効果を上げます。

譜例1 ノルウェー舞曲を思わせる主題A(イ短調)

譜例2 ピアノが華々しく活躍する経過的部分 主題B(ハ長調)

譜例3 抒情的なメロディがフルートのソロで演奏される主題C(ヘ長調)

譜例4 コーダで主題Aの動機が拍子を変えて現れる(イ長調)

エドヴァルド・ハーゲループ・グリーグ
(Edvard Hagerup Grieg 1843 - 1907)



グリーグは自国の民族音楽から着想を得て作曲し、国民楽派のひとりとして注目されたノルウェーの作曲家です。ピアノが上手かったのでピアノのための小品を数多く作曲しており「北欧のショパン」と呼ばれることもあります。彼は北欧的な哀愁の漂う美しい音楽を作りました。グリーグの曲には、男性的な厳しさ、力強さに加えて、抒情的な細やかさが溢れています。彼の肖像は、旧500クローネ紙幣に描かれていたこともあります。

第7章

カノンとフーガ

それぞれの旋律が追いかけっこをします。

複数のパートが、同じ旋律を追いかけっこする音楽の形式のことを「カノン (canon)」といいます。学校の音楽の時間に歌った輪唱もカノンの一種です。それぞれの旋律が同じ音から始まる場合もありますし、異なる音から始まる場合もあります。

「かえるの歌」が一番分かりやすい例でしょう。まず誰かが「かえるのうたが」と歌います。その後をうけて、別の人気が「かえるのうたが」と歌い始めると同時に、初めの人は「きこえてくるよ」と次のメロディを歌います。この「かえるのうたが」のメロディと「きこえてくるよ」のメロディが重なって、ハーモニーが生まれます。先へ進むと「グワッ グワッ グワッ グワッ」というメロディが出てきますが、前のメロディと重なると別なハーモニーができ上がります。少しの時間をずらして一つのメロディを歌っているだけで、それらが重なり合い新しいハーモニーを引き出していると考えることができます。

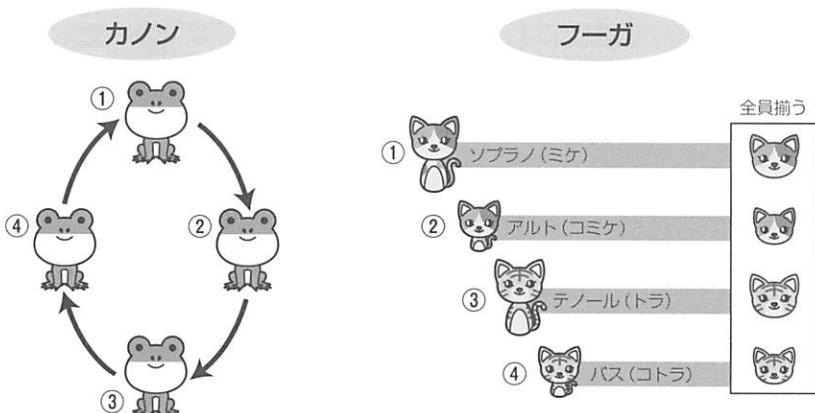
このようにカノンでは、どのパートも旋律を厳密に模倣します。それに対して、フーガは同じ主題の旋律が複数のパートで模倣したり、追いかけっこをする点はカノンとよく似ていますが、各パートの始まり方や、後半の展開の仕方には、カノンとは大きな違いがあります。フーガは「ポリフォニー (polyphony)」という複数の同時進行する声部がそれぞれの独自性を保持しつつ構成される音楽形態が特徴です。ここで典型的なフーガの例として4つのパートのフーガの出だしを説明しましょう。

まず第1のパートが主題を演奏します。次に第2のパートが同じ主題を別の調で演奏します。これを「応答」といいます。「もしもし」という呼びかけに対して、「はいはい」と答えるようなものです。それに対して最初の第1のパートは黙っているのではなく、その応答に対して調和的な対旋律を奏でます。次に第3のパートが最初と同じ調で主題を演奏し、その後第4

のパートが他の調で応答します。カノンと異なるのは、前の声部の主題が最後まで演奏されてから次の声部が入ってくる点です。こうしてすべてのパートが出揃うのです。あとは絡み合いながら主題を展開していきます。

「フーガ (fuga / fugue)」として決まっているのは各パートの入り方だけで、その後どう展開し、どう曲を終わらせるかについては厳格な決まりはありません。他のパートは主題を模倣、拡大、縮小、転回、逆行などの手法を用いて展開していきます。このように、フーガは全曲を通じてパートの数は常に一定で変わらないのです。したがってフーガの楽譜には、パートの数が書かれている場合もあります。だいたい3パートから5パートのものが多く見られます。お芝居で、最初に登場人物が舞台に現れたら、途中で消えたり、増えたりしないのと同じことだと考えてください。

フーガの特徴として、ストレッタ (stretta / stretto) と呼ばれる部分があります。これは、私たちがおしゃべりに夢中になったり、会話がはずんだり、議論が白熱すると、相手の言うことをしまいで聞かずに、また相手の話が終わらないうちに話始めことがあると思います。興奮してくると、次から次に言葉が飛び出し、会話のテンポが速くなるのと同じことです。この技法は、主題が完全に終わらないうちに、応答が開始し始めるという方法です。主題の終了を待たずに応答がくると切迫感が増し、緊張感が高まるために、曲の終盤に置かれます。



まったく同じカエルが順序よくずれて登場します。

出てくるネコはそれぞれ違って出てくる。全員揃ったところで、追いかけたり、入り乱れ遊んだりケンカしたりする。

カノンといえばこの曲です

パッヘルベルの作品で最も有名なのはこの「カノン」ですが、これは生涯に書いた唯一のカノンだといわれています。曲の形式がそのまま曲名になっている、カノンの代表的な作品です。

チェロ、コントラバスの低音楽器とチェンバロが2小節のバスのメロディ【譜例1】を演奏するところから曲は始まります。この2小節のバスのメロディが、全曲を通して28回繰り返されます。そのバスのメロディの上に、3小節目からまず第1ヴァイオリンが登場してカノンの旋律を演奏し、その後、第2ヴァイオリンが2小節遅れて、全く同じ音から同じ旋律を演奏します。さらに第3ヴァイオリンが同じように2小節遅れて、第1・第2ヴァイオリンと全く同じ音から同じ旋律を演奏します。こうして、やっと3声部のカノンの全声部が出そろうのです【譜例2】。

パッヘルベルのカノンは、この各楽器の入り方を完全に忠実に書いています。4分音符で書かれた旋律は、少しずつ細かく分かれたり装飾されたりしながら、寄せては返す波のような演奏効果をもたらし、曲想の広がりをみせます。

この作品は17世紀に書かれましたが、楽譜には細かい強弱などの指定がいっさいありません。演奏者は、自分の解釈をつけて演奏していきます。弦楽合奏で演奏する場合には、テーマが出るたびに少しずつ強く演奏していくのが通例になっています。この形式では必然的に、初めの和音進行が最後まで同じ形で継続していくことになります。

ジャズでは、低音が同じパターンを繰り返し、そのパターンの上で他の楽器が即興的に次々といろいろなメロディを作り出しています。このように考えると、バロック時代の音楽とジャズとは、意外に共通点が多くあります。

譜例1 28回繰り返されるバスのメロディ



譜例2 3つのヴァイオリンパートで、3声のカノンが出そろう

Violin 1

Violin 2

Violin 3

Bass

(1)

(2)

(3)

ヨハン・パッヘルベル
(Johann Pachelbel 1653 – 1706)



ドイツにおけるバッハ以前の、最もすぐれたバロック中期の作曲家のひとりに数えられています。生地のニュルンベルクなどで教会と宮廷のオルガン奏者を歴任し、南ドイツ・オルガン楽派の最盛期を支えたオルガニストでもありました。宗教曲、非宗教曲を問わず多くの楽曲をつくり、コラール前奏曲やフーガの発展に大きく貢献しました。このカノンは特に「パッヘルベルのカノン」と呼ばれて有名です。

フーガのミニ版、お手本になります

パイプオルガンの独奏曲です。バッハがドイツのワイマールで宮廷オルガニストとして活躍していた1709年頃の作品といわれています。当時の西欧では、バッハは並外れたテクニックを備えたオルガニストでありクラヴィーア奏者の第一人者でした。同じ頃に活躍していたヘンデル(英)、スカルラッティ(伊)、クーブラン(仏)もそれぞれに鍵盤楽器の得意な音楽家たちですが、なかでもバッハはやはり群を抜いて偉大な音楽家だったのです。

1台のオルガンが同じ主題を何度も繰り返しながら、いろいろと調を変えて複雑に絡み合って進行していきます。オルガンの響きがストレートに伝わってくる曲です。重なり合うフレーズが響き合い、不思議な世界へといざなってくれます。内声に書かれている声部や低音が、淡々と流れる同じフレーズを1音ずつはっきり聞かせるように書かれています。

まず、第1声部が主題【譜例1】を提示し、第2声部【譜例2】が同じメロディで入ってきます。ただしこの時は二短調に転調しています。この時、第1声部は高音域で対旋律【譜例3】を歌っています。この対旋律は全曲を通して主題とペアになって何度も現れます。

この2声部のメロディが同時に鳴っている時、第3声部がもとのト短調で主題を演奏し、曲は3声部となります。

両手が3つの声部を演奏しているので、低音部の第4声部は「足鍵盤」で二短調で現れます。これで4声部が出そろいました。あとはこの4声部が絡み合うように主題を展開していきます。

基本的に各声部は対等です。途中で長調に転調しますが、また短調に戻り、最後に足鍵盤の第4声部が主題をもとのト短調で重々しく再現して、曲を閉じます。

譜例1 第1声部主題（ト短調）

Musical score example 1 shows the first vocal part theme in G major. The score consists of two staves of musical notation.

譜例2 第2声部主題（二短調）

Musical score example 2 shows the second vocal part theme in A minor. The score consists of one staff of musical notation.

譜例3 対旋律（裏メロディ・オブリガート）

Musical score example 3 shows the counter melody (obligato bass line). The score consists of one staff of musical notation.

【第1声部】 ♥ 主題（ト短調） ♥ 対旋律 ♥ 自由な旋律 ...

【第2声部】 ♠ 主題（二短調） ♠ 対旋律 ♠ 自由な旋律 ...

【第3声部】 ♦ 主題（ト短調） ♦ 対旋律 ♦ 自由な旋律 ...

【第4声部】 ♣ 主題（二短調） ♣ 対旋律 ...

ヨハン・セバスティアン・バッハ
(Johann Sebastian Bach 1685–1750)



西洋では、人々の暮らしが教会を中心に営まれてきました。生活の中にキリスト教があるからです。オルガンはそれぞれの教会に必ず備え付けてあります。毎日曜日の礼拝の時やミサ曲を歌う時、必ず伴奏でオルガンが使用されてきました。我々日本人は、普段バイブルオルガンの音色を耳にすることは少ないと思いますから、このような機会にじっくり耳を傾けると、とても落ち着いた気持ちになれると思います。この作品は、バッハのオルガン曲のなかでも特に親しまれており、指揮者のレオポルド・ストコフスキーやが編曲した管弦楽版でもよく演奏されます。

オルガン曲の名曲中の名曲

数多いバッハのオルガン曲の中でも、特に人気の高い作品のひとつで、初めてオルガンを聴く人にとっては聴きやすい曲だといえるでしょう。バッハには《トッカータとフーガ》あるいは《前奏曲とフーガ》と題するオルガン曲が多数ありますが、そのなかでもとりわけ親しまれているのが、この二短調の《トッカータとフーガ》です。

レオポルド・ストコフスキイ編曲の管弦楽版もあり、これはウォルト・ディズニーが1940年に制作したアメリカのアニメーション映画「ファンタジア」でも使われて、広く知られるようになりました。曲の出だしは強烈な旋律で始まるため非常に印象的です。

トッカータ (toccata) とはイタリア語で 鍵盤に「触れる」の意味で、自由で即興的な音楽様式のことです。非常に華やかで演奏効果のあるトッカータの部分と、分かりやすい主題で書かれたフーガ (fuga) の部分から成り立っており、これが多くの人に親しまれている理由です。難解なバッハの作品のなかでは、むしろ異色の存在といえるかもしれません。

冒頭、トッカータの動機【譜例1】が、なだれ込むように3回繰り返してかけ下りてきます。続いて次の動機【譜例2】がめまぐるしく上行していくますが、ただちに下行をたどり、足鍵盤の低音に答えるかのように、ひとまず落ち着きます。

フーガの主題【譜例3】はまず左手で奏され、それが右手に移り2声部から3声部に、さらに4声部にと繰り広げられながら、最高潮に達し華やかに展開します。最後に再びトッカータの一部が再現され、激しい緊張感と重厚な響きのうちに曲は終わります。

曲のなかで頻繁に使われているのが「減七の和音」といわれる不協和音【譜例4】で、これが大変効果的に使われています。教会には必ずパイプオルガンが備えられていたこの時代、オルガンの莊厳な響きがこの特徴的な和音に生かされています。

譜例1 トッカータの冒頭（二短調）

Adagio



譜例2 トッカータの动机

Prestissimo



譜例3 フーガの主題



譜例4 減七の和音

※当時は、不協和音と呼ばれていましたが、今ではポピュラーやジャズに頻繁に使われる和音です。主和音（ドミソ）に戻りたい属和音系の響きで、ミステリーなど「ガーン」と何か起こった時に使われたりします。



パイプオルガン

ヨハン・セバスティアン・バッハ
(Johann Sebastian Bach 1685 – 1750)



楽器の王様と称されるパイプオルガンは、同じ鍵盤楽器であるピアノなどとは異なり音を出すのに弦を使っています。何千ものパイプに空気を送り、振動や共鳴をさせて音を出します。その歴史は非常に古く、紀元前までさかのぼるといわれています。日本では宗教の違いから馴染みの薄い楽器でしたが、最近の音楽ホールではオルガンを設置しているところが多く、身近なものになってきています。

二重フーガのお手本

この曲は、シューマンの代表的な室内楽作品です。多くのピアノ五重奏曲と同じく、ピアノと弦楽四重奏のために書かれています。シューマンにとって「室内楽の年」といわれているほど多くの室内楽作品が作曲された1942年、シューマン32歳の時に書かれています。この年は、長年の念願がかなってクララ・ヴィークと結婚した2年目で、この作品に書かれている感情豊かで口マンティックな音楽からは、彼の充実した生活の様子がよくうかがえます。

第4楽章の前半はソナタ形式で書かれています。ソナタ形式の第1主題【譜例1】と第2主題【譜例2】が、曲の後半のフーガの部分で効果的に使われています。この部分は、厳密にいうとフーガの形式に則っているわけではありません。このようにフーガ風の部分を専門用語で「フガート(fugato)」と呼びます。フーガ風になってからの各主題の動きを順に追ってみましょう。

まずピアノが単音ではっきりとこの第1主題を演奏します。このフーガの引き立て役の対旋律は、第2ヴァイオリンで演奏されます【譜例3】。

その後この第1主題は第1ヴァイオリン、対旋律はピアノといった組み合いで続きます。次は第1主題はチェロ、対旋律は第1ヴァイオリンとヴィオラの組み合わせです。このように、次から次へと第1主題と対旋律がいろいろな楽器で繰り返され展開されていきます。

第2主題は、まずヴァイオリンとヴィオラが一緒に演奏しますが、すぐに第1主題が再登場し、一度クライマックスを築きます。この後、この楽章のコーダで、第1楽章の第1主題【譜例4】と第4楽章の第1主題とが、見事な二重フーガで組み合わされていきます。各主題と各楽器の演奏順の振り分けは、下記のように構成されています。

1. ピアノ右手(第1楽章第1主題)／2. ピアノ左手+第2ヴァイオリン(第4楽章第1主題)／3. 第1ヴァイオリン(第1楽章第1主題)／4. チェロ(第4楽章第1主題)／5. ヴィオラ(第1楽章第1主題)／6. ピアノ(第4楽章第1主題)／7. チェロ(第1楽章第1主題)

譜例1 ソナタ形式 ピアノで奏される第1主題(ハ短調)

Allegro ma non troppo

ピアノの楽譜で、ハ短調、2拍子。強調記号(sf)が付いています。

譜例2 ソナタ形式 ヴィオラで奏される第2主題(ト長調)

ヴィオラの楽譜で、ト長調、2拍子。弱音記号(p)が付いています。

譜例3 ソナタ形式の第1主題がフーガのテーマとして使われている

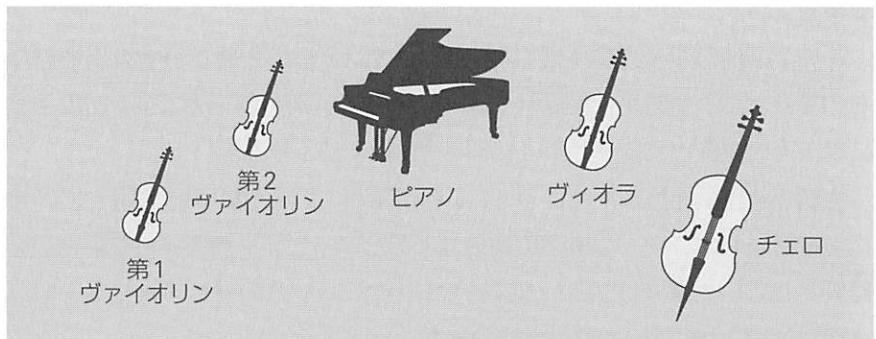
第2ヴァイオリン
ピアノ

第2ヴァイオリンとピアノの二重音楽で、ハ短調、2拍子。

譜例4 第4楽章の終わりに第1楽章のテーマが現れる

Allegro brillante

ピアノの楽譜で、ハ短調、2拍子。強調記号(f)が付いています。



ローベルト・シューマン
(Robert Schumann 1810-1856)



作曲家として知られているシューマンですが、彼は音楽評論も行い、「新音楽雑誌」の編集を始めました。同じ年のショパンの才能をいち早く見出し、誌上でショパンの出現を「諸君、脱帽したまえ、天才だ！」と称えた言葉はあまりにも有名です。著書「音楽と音楽家」は日本語にも訳されています。

大作曲家の主題を拝借

ブラームスは優秀なピアニストでもあり、大変な技巧を要する多くのピアノ曲を作曲しました。この『ヘンデルの主題による変奏曲とフーガ』には、変奏曲を得意としていたブラームスの面目躍如たる、高度な技法が使われています。当時の楽壇で対立関係にあった作曲家ワーグナーは、この曲を聴いて感嘆したといわれています。

主題【譜例1】は、ヘンデルの《ハープシコード組曲》第2巻第1曲の第2樂章を使っています。ヘンデルのオリジナルの楽譜には、Air（エア）と記されていますが、ブラームスはこれを、Aria（アリア）としています。

曲はこの簡単な主題と25の変奏、最後の主題に基づく壮大なフーガから成り立っています。このフーガは、ブラームスの出版されたピアノ曲のなかで唯一のフーガです。

変奏曲については第3章に書きましたので、ここではフーガの部分を見てみましょう。

この2小節のフーガの主題【譜例2】は、ヘンデルの主題から導き出されたものです。この主題が4回提示されるいわゆる4声のフーガです。どのようにフーガの主題が引き継がれていくのか、順に追ってみましょう。

主題が4回出そろったところで、この主題が、反行、拡大等に変形され、また重音奏法やオクターヴ奏法の連続などあらゆるピアノ演奏技巧を駆使して展開されていきます。ブラームスのフーガは、バッハの時代の厳格なものとは異なり、自由な構成で書かれています。

ブラームスは、このほかにも《パガニーニの主題による変奏曲》や《ハイドンの主題による変奏曲》のように、他の大作曲家の主題を用いて変奏曲をいくつか作曲していますが、それらはいずれも古今の名曲として結実し、今日ピアニストの貴重なレパートリーとなっています。

譜例1 ヘンデルの主題

Aria

譜例2 ヘンデルの主題から導き出したフーガの主題①～④へと受け継がれる

(①アルト→②ソプラノ→③バス→④テノール)

Fuga

ヨハネス・ブラームス
(Johannes Brahms 1833-1897)



19世紀後半の音楽界は、ブラームス派とワーグナー派の2つに対立していました。音楽の美は音との関係にあるとしてブラームスを評価した批評家ハンスリックの「絶対音楽」に対して、音楽を他の芸術と結びつける「標題音楽」的な傾向を考えるリストやワーグナーらとの対立です。この問題は、人間関係や思想を巻き込んで激化していました。

第8章

オペラ

オペラでは、いろいろな歌い方があります。

西洋音楽の総合芸術といわれるオペラは、日本における歌舞伎のような存在です。歌い手は演奏家の上演プランにもよりますが、一般的には劇の時代背景に合った衣装を身に付け、舞台装置、照明のあるステージで、歌だけでなく、オーケストラによる伴奏に合わせて演技もしなければなりません。費用の面でも、上演に必要なスタッフの人工費、大道具、小道具など舞台をつくるための経費、上演場所や練習場所などを借りる膨大な費用がかかります。

ヨーロッパの大都市には必ずといってよいほど、歌劇場（オペラハウス）があります。歌劇場は専属の歌手、合唱団、オーケストラ、バレエ団を持っています。裏方として、舞台装置、照明、衣装、宣伝などを担当する多くのスタッフを抱えなければ成り立ちません。その結果、どうしてもオペラのチケットは高くなります。そのため世界各地のオペラハウスの多くは公的な補助を受けています。

舞台も一般的なコンサートを行うステージと異なり、客席前方にオーケストラ・ピットといってオーケストラの団員が演奏するスペースがあります。この場所は客席から見ると、穴が空いているように見え、指揮者の頭の後ろがかろうじて見えるだけです。また何幕もの舞台転換を素早く行うため、舞台そのものも広く、奥行きの深いものになっています。

1曲のオペラが上演されるためには、原作、台本、作曲、演出など多くの過程を経なければなりません。これまでのオペラの原作として多く取り上げられている作家の一人にシェークスピアがいます。オペラのジャンルだけでなく、演劇、映画でもシェークスピアの原作をもとにしたものは数多くあります。それだけシェークスピアの作品のような題材は、オペラのテーマとしてふさわしいものといえます。

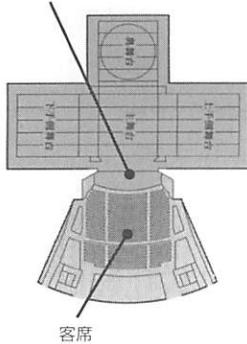
●新国立劇場のオペラ・バレエ劇場●



オペラパレス舞台から見た客席

客席から見える主舞台のほかに、奥と左右にそれぞれ舞台スペースがあり、オーケストラピットにはフル編成の120人の演奏ができ、歌手の肉声は、4階の客席まで届く我が国初のオペラ・バレエ専用劇場です。

オーケストラピット



新国立劇場オペラ「椿姫」(2002年)



新国立劇場オペラ「フィガロの結婚」(2007年)

※通年のオペラ・バレエの公演の他、劇場の裏側をめぐるバックステージ・ツアーや「高校生のためのオペラ鑑賞教室」「子どものためのオペラ劇場」「子どものためのバレエ劇場」「中学生のためのバレエ」〈情報センター〉では、現代舞台芸術全般にわたってのさまざまな情報・資料を収集・保存し、これを一般に公開するため、新国立劇場の5階に情報センターを設けています。

● <http://www.nntt.jac.go.jp/> (問い合わせTEL: 新国立劇場ボックスオフィス 03-5352-9999)

何度も見ても楽しいオペラの傑作

「レチタティーヴォ（recitativo）」とは、オペラのなかで独立したアリアのような声楽曲の前や間に、個人的な感情を独り言のようにつぶやいたり、自分の置かれた立場や状況を説明する場面、オペラのストーリーの展開を紹介する場面などでよく用いられる〈語り〉の部分のことです。話し言葉の自然なリズムやアクセントを模したり強調したりした歌唱様式で、「叙唱」ともいいます。語りといっても、作曲家によって楽譜にはきちんと音符が書き込まれています。

イタリアの作曲家ロッシーニによって書かれた歌劇『セヴィリアの理髪師』では、町娘ロジーナを見始めたアルマヴィーヴァ伯爵は、「町の何でも屋」を自称するフィガロを使い、恋の成就のために作戦を練りロジーナと結婚しました。このアルマヴィーヴァ伯爵とロジーナの続編が、モーツアルトの『フィガロの結婚』となっています。

序曲と全4幕からなるこのオペラは、フランスの喜劇作家ボーマルシェの戯曲3部作の第2部を基に、イタリアのダ・ポンテが台本を書いた庶民を題材にした喜劇です。18世紀スペインのセヴィリアを舞台に、家来のフィガロと小間使いのスザンナの結婚をめぐって、それを嫉妬する彼らの雇い主アルマヴィーヴァ伯爵と伯爵夫人口ジーナや、小姓のケルビーノ、医師バルトロ、フィガロに好感を持つ女中マルチエリーナなどの間に繰り広げられる恋の駆け引きが、モーツアルトの軽快な音楽によって進行していきます。

特にこのオペラの序曲や数々のアリアと重唱は、広く知られ親しまれています。なかでも第1幕のレチタティーヴォ【譜例1】は、次の有名なアリア「もう飛ぶまいぞ、この蝶々」【譜例2】に続き、第2幕のレチタティーヴォは、アリア「恋とはどんなものかしら」に続きます。また、これらのアリアは単独でもよく歌われます。

モーツアルトは、このレチタティーヴォをチェンバロの伴奏で、彼自身の他のオペラのなかでも用いています。

譜例1 フィガロとスザンナのレチタティーヴォの後に、アリアが続く

Recitativo

Figaro (フィガロ)

Susanna (スザンナ)

Basilio (バジリオ)

Figaro (フィガロ) (ケルビーノに)

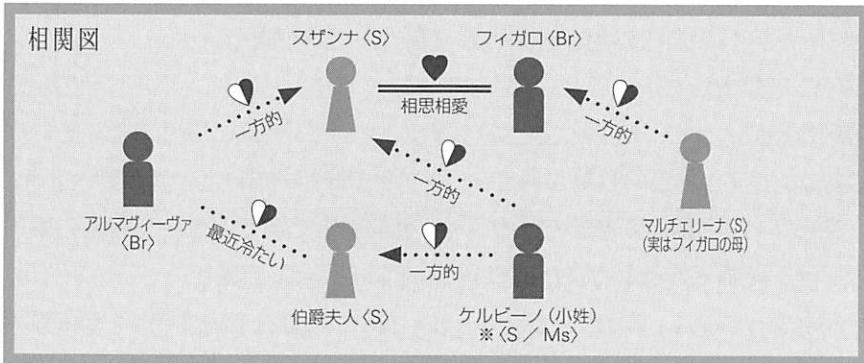
Susanna (スザンナ)



譜例2 アリア「もう飛ぶまいぞ、この蝶々」

Allegro

Figaro (フィガロ)



< S > ソプラノ < Ms > メゾソプラノ < Br > バリトン

※ケルビーノは若い男性役ですが、女性 (S, Ms) がキャスティングされている。

ヴォルフガング・アマデウス・モーツアルト
(Wolfgang Amadeus Mozart 1756 - 1791)

このオペラの生きいきとした序曲は有名で、単独でもしばしば演奏されます。伯爵に住える小姓ケルビーノのよく知られたアリア「恋とはどんなものかしら」は、メゾソプラノ、つまり女性がズボンをはき男装して歌う有名なアリアです。モーツアルトのオペラは、このほか「後宮からの逃走」「コジ・ファン・トゥッテ」「魔笛」など、現在でも世界の歌劇場で主要なレパートリーとして上演されています。

ドイツ語によるオペラの決定版

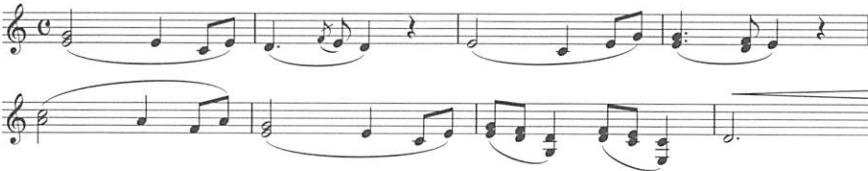
「ジングシュピール(Singspiel)」とは、台詞が入ったドイツ語の音楽劇のことです。言い換えれば、ドイツ語圏で成立したドイツ語によるオペラで、扱われる題材や内容は多様です。そのジャンルの代表作としては、この『魔弾の射手』やモーツアルトの『後宮からの奪還』『魔笛』、ベートーヴェンの『フィデリオ』などがあります。

もともとオペラはイタリアで発祥し、イタリアが主流でしたが、18世紀ドイツでも自国のオペラを作りたいという気運が高まっていました。その流れはウェーバーのこの作品が出発点となり、ドイツの国民歌劇として独自のスタイルを完成していくことになります。このドイツ・ロマン派オペラの記念碑的作品によって、その後、数々のドイツ・オペラの名作が誕生することになります。ですからこの歌劇はドイツ・オペラの最初の傑作といえるでしょう。

あらすじ。名射手であるマックスは、御前試合で勝てば森林保護官の娘アガーテと結婚できるのですが、彼は試合を前に完全に自信を失っていました。そんなマックスに、同僚のカスパールは「魔弾」の存在を教えます。その魔弾のお陰でマックスは試合に命中を連発します。ご満悦の領主は、マックスに白鳩を撃つように命じます。最後の弾を放つと弾は鳩を逸れ、アガーテが倒れてしまいますが、魔弾が当たったのは実はカスパールでした。マックスは事情を説明しますが、領主は彼に永久追放を命じます。すると森の隠者が登場し、1年の試練で許すよう提案します。以後マックスは正義に背かないことを誓い、全員の大合唱がマックスとアガーテを祝福し、喜びの歌をうたいあげます。

このオペラはドイツの深い森を舞台として、そんな森の情景が映し出されるように始まります。ホルンによって演奏される有名な序曲【譜例1】はよく知られています。また、アガーテの歌うアリア【譜例2】も印象的ですが、最も有名なのはやはり「狩人の合唱」【譜例3】です。オペラの後半で出てくるこの合唱は、一度耳にすれば誰でもすぐ覚えられそうなほど親しみやすく、その陽気な歌声はあたかもドイツ・オペラの誕生を歓喜しているかのようです。

譜例1 ホルンの有名なメロディ



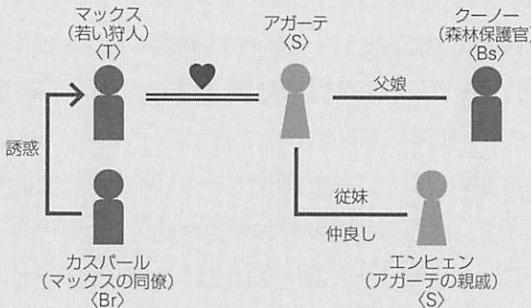
譜例2 「アガーテのアリア」(序曲の一部が使われている)



譜例3 狩人たちが歌う「狩人の合唱」

Musical score example 3 shows a hunting chorus in common time (F major). The vocal parts are Tenor (ff) and Bass (ff). The lyrics are: "Was gleicht wohl auf Er - den dem Jä - ger-ver - gnü - gen, wem spru - delt der Be - cher des Le - bens so reich? ~"

相関図



Column

この「狩人の合唱」のように、オペラから独立した合唱曲として有名な曲には、ヴェルディの歌劇『イル・トロヴァトーレ』の「鍛冶屋の合唱」や、第2のイタリアの国歌ともいわれる、同じくヴェルディの歌劇『ナブッコ』のなかの「行け、我が想いよ、黄金の翼に乗って」、さらにワーグナーの歌劇『ローエングリン』のなかの「婚礼の合唱」などたくさんあります。

「カヴァティーナ(cavatina)」とは、もとは簡素な形式による短い独唱曲のことでした。それが19世紀にはいると、長いアリアの前半のゆっくりとしたテンポで歌われる抒情的な部分を示すようになります。これに対応して後半の速い技巧的なパッセージで歌われる華やかな部分を「カバレッタ(cabaletta)」といいます。こうした対比的な2部構成のアリアを「カヴァティーナ・カバレッタ」と呼びます。この曲はそのカヴァティーナ・カバレッタ形式の有名なアリアです。ここで歌われるカヴァティーナ「ああ、そはかのひとか」【譜例1】で、ヴィオレッタはアルフレードに対する気持ちを切々と歌い、続くカバレッタ「花から花へ」【譜例2】で、その気持ちを打ち消すようにテンポの速い技巧的な歌をうたいます。

オペラは、高級娼婦のヴィオレッタと彼女のパーティに招待された青年アルフレードとの恋のときめきから始まります。その場面で歌われるのがこのアリアです。2人は、パリ郊外で暮らし始めますが、アルフレードの父ジエルモンは、息子や家族のために別れてくれるようヴィオレッタに懇願します。ヴィオレッタは若いアルフレードの将来を思い、もとのパリでの享楽的な暮らしへと戻っていきます。彼女に裏切られたと思ったアルフレード。やがてヴィオレッタが胸の病に倒れたことを知り駆けつけた時はすでに遅く、彼女はアルフレードの幸せを願いながら彼の腕のなかで息絶えるというあらすじです。

ヴィオレッタの役は、各幕ごとに置かれた状況が変わるため、それぞれの場面に応じて歌い方を変えねばなりません。最初は道を踏みはずした女として、次には献身的な女として、最後は死の床での女として…と、変化に富んだ歌唱力が必要となります。

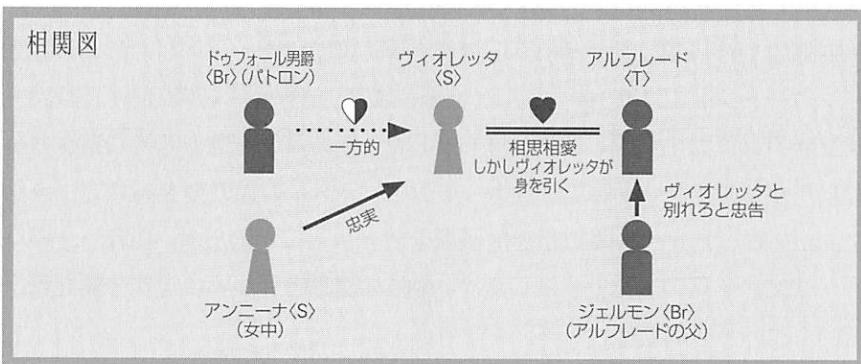
このオペラの初演では、あまりに体格の良すぎるソプラノ歌手がヴィオレッタ役を演じたため、現実味に欠けるとして成功しませんでした。しかし、ヴェルディは音楽の完成度に自信をもち、時代が判断してくれるだろうと書き残しています。2人の出会いの場で歌われる「乾杯の歌」はあまりにも有

名です。他にもアルフレードのアリア「燃える心を」、ジエルモンのアリア「プロヴァンスの海と陸」、2人の二重唱「パリを離れて」など、甘美な名アリアが登場人物の感情を繊細に表現する、聴きどころ満載のオペラです。

譜例1 カヴァティーナ「ああ、そはかのひとか」(ヴィオレッタのアリア)



譜例2 カバレッタ「花から花へ」(ヴィオレッタのアリア)



〈S〉ソプラノ 〈T〉テノール 〈Br〉バリトン

ジュゼッペ・フルトゥニーノ・フランチェスコ・ヴェルディ
(Giuseppe Fortunino Francesco Verdi 1813 - 1901)



ヴェルディは、ドイツのワーグナーとならぶ代表的なイタリア・オペラの作曲家で、彼の作品は今日まで多くの人に親しまれています。オペラ史上に金字塔を打ち立てたこの2人の作曲家が、奇しくも同じ年に生まれたということはたいへん興味深いことです。特にイタリアの国民にとっては音楽家という枠を超えて、偉人として愛されている存在です。彼はその生涯に26曲のオペラを作曲していますが、それらの序曲や前奏曲は、いずれもヴェルディらしい個性あふれた美しい音楽となっています。

日本を舞台にした代表的オペラ

プッチーニが自作の歌劇『トスカ』の初演に招かれた際、ロンドンで観た『蝶々夫人』の芝居に感動し、そのオペラ化を考えました。原作はアメリカの小説家の同名の作品で、彼の姉が日本に住んでいたので、姉から日本の知識を得て聞いた実話に基づいています。プッチーニのオペラは、これにかなりの加筆を加えたものです。オペラでの悲劇的な終幕は、オペラのための常套手法といえるでしょう。

この作品が生み出された背景には、世紀末のヨーロッパで流行した「ジャポニズム（日本趣味）」の影響があります。ロンドンやパリで開催された万国博覧会で、浮世絵をはじめとする日本の芸術が紹介されたことに端を発し、多くの芸術家が日本をテーマにした作品を書きました。

物語は19世紀末、明治時代の日本の長崎が舞台です。アメリカの海軍士官ピンカートンは15歳の蝶々さんと結婚します。結婚生活も束の間、ピンカートンがアメリカに帰国し3年が経ちました。彼の帰りを信じて待つ蝶々さんでしたが、ようやく戻ったピンカートンは、アメリカ人の妻を連れていきました。ピンカートンとの間にできた子供を渡すようにと迫られ、観念した蝶々さんは父の形見の短刀で自決します。過酷な運命のなかでひたすら愛を貫いていくという悲劇的なメロドラマです。

色彩的な管弦楽と美しい旋律が調和した作品で、日本が舞台ということもあり、日本人にもなじみの深い作品です。蝶々さん役の歌手にとっては終始出ずっぱりで、レッジエ一口（軽い）からドラマチックまでの声のテクニックが要求され、ソプラノ殺しの作品ともいわれています。ところどころに、「さくらさくら」や「お江戸日本橋」「越後獅子」などが出てきますし、五音音階を巧みに使い日本情緒を醸し出しています。

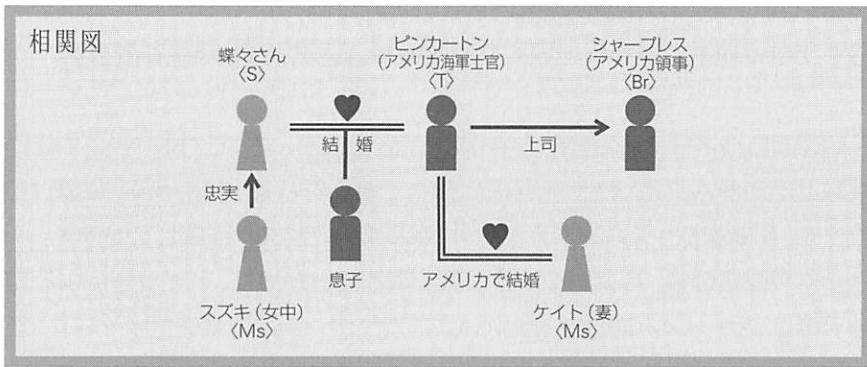
アメリカへ帰ってしまったピンカートンを信じて、彼の帰りを待つ蝶々さんが第2幕で歌う「ある晴れた日に」【譜例1】は、このオペラを代表するアリアであり、単独で歌われることが多くあります。蝶々さんの切ない思いが痛烈に伝わってくる曲です。

譜例1 アリア「ある晴れた日に」の出だし(蝶々さんの独唱)

Andante molto calmo

p

Un..... bel di, ve - dre - mo
le - var - si un fil di fu - mo sull' e -
stre - mo con fin del ma - re. E
poi..... la_nave ap - pa - re.....



⟨S⟩ ソプラノ ⟨Ms⟩ メゾンプラノ ⟨T⟩ テノール ⟨Br⟩ バリトン

ジャコモ・ブッチャーニ

(Giacomo Antonio Domenico Michele Secondo Maria Puccini 1858 – 1924)



ヴェルディがイタリア・オペラの最高峰を極めた後を引き継いだのがブッチャーニです。彼のオペラに登場する女性は個性豊かで美しい人が多く、特に誇り高く一途な日本女性を描いた「蝶々夫人」と、中国の冷酷な姫を描いた「トゥーランドット」、アメリカを舞台にした「西部の娘」の3作品は、ブッチャーニの異国趣味というもうひとつの魅力を余すところなく発揮しています。

第9章

宗教曲

主にキリスト教に関する音楽です。

西洋クラシック音楽のルーツは、9世紀～10世紀のグレゴリア聖歌といわれています。ローマ・カトリック教会の単旋律、無伴奏の宗教音楽で、ラテン語で歌われました。その後、ヨーロッパの様々な地域に広まり、楽譜に記されるようになります。これはネウマ譜と呼ばれ、現在の五線譜のもととなっています。このキリストの典礼で歌われたグレゴリオ聖歌が、ミサ曲に繋がっていきます。

ネウマ譜

中世からルネサンスの音楽の中心は、宗教音楽でした。これは、教会や修道院などで演奏される「教会音楽」と、典礼で演奏される「典礼音楽」に分けられます。作曲家ジョスカン・デ・プレは数多くのミサ曲を作曲しています。

ルネサンスの後、ルターによる宗教改革をきっかけに、ドイツ語による聖歌であるコラールが作曲されるようになりました。また声楽曲だけでなく、教会のオルガンのための作品も書かれるようになりました。特にパレストリーナはこの頃の代表的な作曲家で、多くの教会音楽作品を残しています。

その後、バッハによってカンタータや受難曲等で、コラールが効果的に使われるようになり、教会音楽の頂点を迎えます。バッハによって作曲された教会カンタータは、300曲を越えるといわれています。現在では、このうちの3分の1は失われてしまい、遺された作品数は200曲といわれています。

現在では、宗教曲は教会で演奏されるよりも、演奏会で聴くことが多くなりました。よく演奏される曲は、CMでよく知られた、オルフ作曲のカンタータ「カルミナ・ブランナ」、ハイドン作曲オラトリオ「天地創造」、ブルームス作曲「ドイツ・レクイエム」、ベートーヴェン作曲「荘厳ミサ曲」などがあります。

[ミサ曲]

キリスト教のミサで歌われる聖歌の通常文に付けられた音楽で、「キリエ」

「グロリア」「クレド」「サンクトゥス」「アニス・ディ」の構成で演奏されます。14世紀フランスのアルス・ノヴァを代表する作曲家ギヨーム・ド・マシューが書いた「ノートルダム・ミサ」は、通作ミサとして作曲された最古のミサ曲です。

[モテット]

中世、ルネサンスの多聲音楽のひとつです。ノートルダム楽派によって、ヨーロッパ各地に広まりました。中世では各声部が異なる歌詞を同時に歌いました。ルネサンス期になると、少しずつ変化して、各声部共通の歌詞を用いて、模倣を中心とする様式になっていきました。

[カンタータ]

単声または多声のためのオーケストラ伴奏付きの多楽章の声楽曲のことです。起源はバロック時代にさかのぼります。宗教（キリスト教）に関係のある作品を「教会カンタータ」と呼び、宗教に関係のない作品を「世俗カンタータ」と呼んで、区別しています。

[コラール]

もともとは、プロテstantの教会で歌われる賛美歌のことです。元来カトリックでは、聖書を読む時にラテン語を用いてきましたが、自分の国の言葉で聖書を読みたいと思う人たちが出てきて、お祈りの時の歌が、その国の言葉に変わりました。このことを受けて誕生した曲が「コラール」です。そのため、一般大衆にキリスト教が理解しやすくなったといわれています。

[オラトリオ]

宗教的な内容を扱った、独唱、重唱、合唱、オーケストラのための大規模な声楽曲です。オペラとは異なり、舞台装置や演技、衣装は伴いません。演奏会形式で上演されます。ヘンデルのオラトリオは、宗教的な内容から離れ、劇的な作品となっています。

[レクイエム]

ローマ・カトリック教会で行われる死者のためのミサ曲のことです。古今、多くの音楽家がレクイエムを作曲しています。モーツアルト、ヴェルディ、フォーレの「三大レクイエム」以外に、ケルビーニ、ベルリオーズ、ブルックナー、ブラームス、ドヴォルザーク等、多くの作曲家がこのジャンルで曲を書いています。

キリスト教の歴史とともに歩んできました

「受難曲 (passion)」とは、キリスト教の典礼音楽のひとつで、新約聖書に記されているマタイ、マルコ、ルカ、ヨハネの4つの福音書に基づくイエス・キリストが受けた苦しみと死を描いた音楽作品のことです。中世以来の長い伝統を有しており、17世紀から18世紀には合唱や管弦楽を伴う受難曲が多く作曲されました。18世紀になると器楽伴奏が強化され、同時に全体構成は序奏、間奏、合唱、レチタティーヴォ、アリア、コラールと呼ばれる贊美歌などの組み合わせを基盤とするようになっていきます。

現代においても、演奏会または典礼用の受難曲が新たに創作され、復活祭の前に演奏されることがあります。

J. S. バッハは5曲の受難曲を作曲しましたが、現存するのは受難曲の最高峰と位置付けられる「マタイ受難曲」と「ヨハネ受難曲」の2作品のみです。この「マタイ受難曲」は1829年に若きメンデルスゾーンの指揮によって演奏されるまで約100年もの間、社会一般から忘れ去られていました。新約聖書「マタイによる福音書」の第26・27章、キリストの受難を題材にしたこの作品は独唱、合唱、オーケストラを伴う大規模な音楽作品です。バッハのライプツィヒ時代 (1723 – 1750) に書かれました。その音楽の壮大さ、精緻さ、精神性は、西洋音楽作品中の最高傑作といわれます。

曲の展開は福音書の流れに沿っていますが、それだけではなく、コラール【譜例1】や自由詞からなる曲も交えて立体的に構成されています。(1)福音書章句、(2)コラール詞、(3)自由詞という3つの要素から作られているのが、バッハの受難曲の特徴となっています。

なお、「マタイ受難曲」は第1部と第2部で構成されています。第1部はイエスが捕縛されるまでを扱い、第2部ではイエスが捕縛されてから裁判を受けて十字架につけられ、死後その墓が封印されるまでを扱っています。

譜例1 有名なコラール

Choral

Soprano
Flauto I + II
Traverso I, II
Oboe I, II
Violino I

Alto
Violino II

Tenore
Viola

Basso

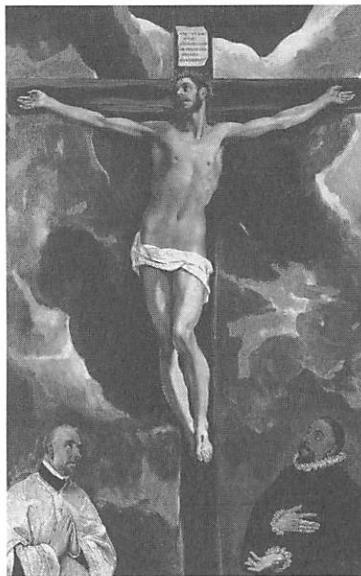
(5)

Er - ken - ne mich, mein Hü - ter, mein Hir - te, nimm mich an!
Von dir, Quell al - ler Gü - ter, ist mir viel Guts ge - tan.

Er - ken - ne mich, mein Hü - ter, mein Hir - te, nimm mich an!
Von dir, Quell al - ler Gü - ter, ist mir viel Guts ge - tan.

Er - ken - ne mich, mein Hü - ter, mein Hir - te, nimm mich an!
Von der, Quell al - ler Gü - ter, ist mir viel Guts ge - tan.

Er - ken - ne mich, mein Hü - ter, mein Hir - te, nimm mich an!
Von der, Quell al - ler Gü - ter, ist mir viel Guts ge - tan.



キリスト受難の絵



Column

この曲は、福音史家（テノール）、イエス（バス）を中心に、ソプラノ、アルト、テノール、バスのソリスト、混声合唱、児童合唱、オーケストラをそれぞれ2つに分けて演奏されます。それにより両者が対話をしたり、片方がもう一方を注釈したりして立体的な効果を出しています。初演はライプツィヒの聖トーマス教会で行われました。

ピアノ編曲で一躍有名になりました

「カンタータ (cantata)」は、17世紀から18世紀前半の最も重要な声楽ジャンルのひとつで、器楽伴奏を伴う独唱や合唱により歌われる作品をさします。元来は動詞「歌う (cantare)」から派生した言葉です。レチタティーヴォ、アリア、二重唱、合唱などの多部分から構成されます。典型的なカンタータは、17世紀後半にイタリアで作曲されました。レチタティーヴォとアリアからなる歌で、18世紀前半のドイツではコラールを取り入れた「教会カンタータ」が、18世紀のフランスでは一人または数人の歌手と小編成の器楽を伴う「世俗カンタータ」が数多く作曲されています。以後、カンタータは独唱、合唱、管弦楽のための多種多様な作品を表すものとなりました。カンタータの名でベートーベンやブラームス、プロコフィエフらにより作品が書かれ、今日に至っています。このように、カンタータは時代によって編成や構成も異なっています。

200曲余りのバッハの教会カンタータは、このジャンル全体の最高峰であるとともに、彼自身の創作の中心をも占めています。

バッハは若い頃から教会の毎週の礼拝のために教会カンタータなどの声楽作品を作曲し、そして演奏するという仕事をしていました。この「主よ、人の望みの喜びよ」は、カンタータ第147番「心と口と行いと生活で」の第6曲と第10曲のコラールです。原曲ではこのメロディはオーボエで演奏されます。このカンタータの編成はくソプラノ・アルト・テノール・バスの独唱／合唱・管弦楽で、全体は10曲から構成されており、第1～第6曲と第7～第10曲の2部に分かれています。1723年、バッハ38歳の時にライプツィヒで作曲されました。

特にこのコラール【譜例1】は、ピアノや管弦楽などさまざまな楽器用に編曲されていますが、マイラ・ヘスが編曲したピアノ版【譜例2】が一番よく知られています。アンコールピースとしても取り上げられる曲で、透明感にあふれた冒頭のメロディが印象に残ります。

譜例1 ヴァイオリンと合唱の美しいハーモニー

ヴァイオリン
ソプラノ

Wohl mir, dass ich Je - - - sum ha - be,
o wie fe - - - ste hait' ich, ihm,

譜例2 マイラ・ヘスの編曲によるピアノ版

Column

バッハのカンタータからの編曲の例としては、この曲のほかに第140番「自覺めよと呼ぶ声あり」がやはりピアノ編曲で知られ、第156番「片足は墓穴にありて我は立つ」の「アリオーソ」がバッハの《チェンバロ協奏曲》第5番の第2楽章にも出てきます。フランス映画「恋するガリア」のテーマ曲でもあり、スイングル・シンガーズの美しい女声スキヤットで有名になりました。ピアノ、ヴァイオリン、チェロ、ギターにも編曲されています。

「第九」と並ぶ年末恒例の音楽会の曲目

「オラトリオ (oratorio)」とは聖書に出てくる話をもとにした、独唱、重唱、合唱、管弦楽によって演奏される総合的大規模な演奏会形式の音楽作品です。舞台装置、衣装、演技などを伴わないのでオペラとの違いで、時として進行役である語り手が存在します。

題名の「メサイア (Messiah)」は、救世主を意味する「メシア」の英語読みに由来しています。聖書から歌詞を取り、イエス・キリストの生涯を題材としています。

この曲は、オラトリオの歴史の上でもバロック時代の音楽様式の上でも、確たる地位を示しています。ヘンデルは同じ年に生まれたJ. S. バッハとは人柄、生涯、作品等すべての面で異なっていました。一生ドイツを離れずに教会音楽の作曲家として生きたバッハに対して、ヘンデルはヨーロッパの国々を旅し、大衆を相手にした作品を書いたことからも分かります。ヘンデルの音楽には、国際人としての生き方を反映した、イタリア的な明るさや様式が備わっています。ヘンデルによって書かれたオラトリオは、教会の礼拝のためではなく、劇場で演奏されることを目的としています。

この作品はオラトリオの中でも変則的な作品で、「メサイア」は聖書の言葉をそのまま用いており、物語風の筋は使われていません。わが国ではクリスマスの時期によく演奏されますが、それはこの曲がキリストの降誕・受難・復活を三部構成で音楽化したものであり、キリストの生涯を部分ごとに表し、そのことが普遍的なテーマであるということが、今日でも演奏され続けてきている理由です。

ヘンデルはこの曲をわずか24日間で作曲しています。1743年初めてロンドンで演奏された際、国王ジョージ2世が第2部最後の「ハレルヤ」(通称「ハレルヤコーラス」)【譜例1】の途中で起立し、それに倣って観客が総立ちになったという逸話はあまりにも有名です。現在のスタンディング・オベーションです。今日「メサイア」の演奏会で聴衆がハレルヤコーラスの部分で立ち上がる

るのも、この逸話に端を発しています。バッハの「マタイ受難曲」「ヨハネ受難曲」と並ぶ、よく知られた宗教作品です。

譜例1 「ハレルヤコーラス」として親しまれる

SOPRANO
Oboes I, II

ALTO

TENOR

BASS

Hal - le - lu - jah!
Hal - le - lu - jah! Hal - le - lu - jah! Hal - le - lu - jah.
Hal - le - lu - jah!
Hal - le - lu - jah! Hal - le - lu - jah! Hal - le - lu - jah! Hal - le - lu - jah.
Hal - le - lu - jah!
Hal - le - lu - jah! Hal - le - lu - jah! Hal - le - lu - jah! Hal - le - lu - jah.
Hal - le - lu - jah!

ゲオルク・フリードリヒ・ヘンデル
(Georg Friedrich Händel 1685–1759)



J. S. バッハと同じ年にドイツで生まれたバロック音楽最大の作曲家です。ロンドンへ旅し、イギリス国王即位に伴ってそのままロンドンに住みました。この地でオペラやオラトリオの作曲家として大成功を収め、イギリスの国民的音楽家となり、後年イギリスに帰化しました。「水上の音楽」や「王宮の花火の音楽」のような野外で演奏される作品を書きました。バッハを「音楽の父」と呼ぶのに対して、ヘンデルを「音楽の母」と呼ぶこともあります。

「怒りの日」の激しさは人類に向けて

「レクイエム(requiem)」は、「死者のためのミサ曲」といわれており、広い意味ではミサのなかで用いられる音楽ということになります。ミサの典礼すべてに共通する通常文のうち、〈キリエ、グローリア、クレド、サンクトゥス、アニス・ディ〉を楽曲にしたものと一般的にミサ曲といいますが、レクイエムでは、グローリアとクレドは省略されアニス・ディはテキストの一部が異なります。それぞれのミサの目的に沿って定められた固有文には独自のものが用いられます。

この曲は、イタリアの文豪アレッサンドロ・マンゾーニを追悼する目的で作曲され、一周忌にあたる1874年5月22日、ミラノのサン・マルコ教会で初演されました。

全体は4人の独唱者と混声合唱それにオーケストラという編成で劇的な曲調で書かれています。このレクイエムのなかで最も有名な「ディエス・イレ(怒りの日)」【譜例1】は、テレビでも頻繁に使用されています。また「ラクリモーザ(涙の日)」【譜例2】「アニス・ディ(神の子羊)」【譜例3】などでは美しい旋律がピアニッシモで演奏されます。最後の「リベラ・メ(我を救い給え)」では、人々の思いと叫びが展開されていきます。

このほかに有名なレクイエムとしては、古いものでは、パレストリーナの作品、古典派の曲としては、未完のままで終わったモーツアルトの作品がよく知られています。ケルビーニによるレクイエム以降、作品は巨大化し、ロマン派の作曲家による曲は、ベルリオーズ、ドヴォルザーク、ブルックナーらの作品に見られるように大規模なものとなっていきます。またロマン派のレクイエムでは劇的表現などが重視される結果、本来の典礼の目的からかけ離れてしまう傾向にあるといえるでしょう。近代の作曲家によるレクイエムでは簡潔さが追及されており、その代表的な作品にはフォーレの作品があります。

この曲はモーツアルト、フォーレの作品と並んで「三大レクイエム」のひとつに数えられると共に、クラシック音楽ファンの間では、俗に「ヴェルレク」

(ヴェルディのレクイエム)と略称され演奏されてきました。日本では、映画やCMで使われ一気に有名になりました。

譜例1 「ディエス・イレ(怒りの日)」(全員で力強く歌われる)



譜例2 「ラクリモーザ(涙の日)」(メゾ・ソプラノ)

Largo
con molto espr.

(Ms. solo) La - cry - mo - sa di - es il - la, Qua re - sur - get ex fa - vil - la,

譜例3 「アニス・ディ(神の子羊)」(ソプラノ・ソロ)

Andante
dolcissimo

(Sop. solo) A - gnu s De - i, a - gnu s De - i,

●通常のミサ曲とヴェルディのレクイエムとの比較

通常のミサ曲	レクイエム(ヴェルディ)
第1曲 キリエ(主よ、憐れみ給え) Kyrie	第1曲 レクイエムとキリエ(安息と主よ、憐れみ給え) Requiem Kyrie
第2曲 グロリア(栄光あれ) Gloria	第2曲 ディエス・イレ(怒りの日) Dies irae ラクリモーザ(涙の日) Lacrimosa
第3曲 クレド(信仰宣言 我は信す) Credo	第3曲 オッフェルトリウム(奉獻唱) Offertorium
第4曲 サンクトゥス(聖なるかな) Sanctus	第4曲 サンクトゥス(聖なるかな) Sanctus
第5曲 アニス・ディ(神の子羊) Agnus Dei	第5曲 アニス・ディ(神の子羊) Agnus Dei
	第6曲 ルックス・エテルナ(永遠の光を) Lux AEterna
	第7曲 リベラ・メ(我を救い給え) Libera Me

第10章

いろいろな曲種

型に当てはまらない自由な諸形式の音楽です。

西洋のクラシック音楽には、はっきりした「形式」に従って作曲された作品がある一方、形式の枠に全く当てはまらない自由な曲も多くあります。この章では、この「形式」が決まっていない曲について取り上げてみます。

【管弦楽組曲】

組曲とは、いくつかの楽曲を連続して演奏するように並べたものです。バロック時代には、舞曲によって構成され、曲順が決まっていました。ロマン派以降では、バレエやオペラの音楽のなかから、主要な曲を演奏会で演奏できるように配列した管弦楽曲や、いくつかの小曲を組み合わせた曲のことをいいます。この順番に特別な決まりはありません。

【奇想曲】

奇想曲と訳される「capriccio」とは、イタリア語で「きまぐれ」という意味です。バロック時代には、フーガ的様式の一つでしたが、19世紀のロマン派の作曲家によって、自由で軽快な器楽曲の名称に用いられています。

【序曲】

バレエやオペラなどの開幕に先立って演奏されるオーケストラの曲です。雰囲気を醸し出し、気分を高めます。これだけで演奏会で取り上げられることもあります。前奏曲(プレリュード)とのはっきりした違いはありませんが、前奏曲の方が、もっと短く、劇のはじまりと一体化しています。単独で演奏される作品としては、ブラームスの「大学祝典序曲」、チャイコフスキイの「序曲1812年」などがあります。

【交響詩】

オーケストラによって演奏され、原則として単一楽章で切れ目なく演奏されます。楽曲の形式は全く自由です。リストによって初めて名付けられました。スマーナの「我が祖国」、ドビュッシー作曲の「海」、R.シュトラウスの「ドン・ファン」「ツアラトゥストラはかく語りき」「英雄の生涯」などがあります。

【狂詩曲】

民族的な奔放さと雰囲気、叙事的内容を表現した器楽曲です。ラプソディともいいます。形式は自由です。既成のメロディを用いて再構成したり、メドレーのように組み合わせたりすることもある

ります。ブラームスの「2つのラプソディ」、ラヴェルの「スペイン狂詩曲」などが知られています。

【標題音楽】

音楽以外の想念や心象風景を聴き手に喚起させることを意図して作曲された器楽曲のことです。情景やイメージ、気分や雰囲気といったものを描写しています。これに対して、純粹に音の構成によってのみ作曲された曲を絶対音楽といいます。標題音楽は、ロマン派の作曲家によって多くの作品が書かれました。ベルリオーズの「幻想交響曲」、ムソルグ斯基のピアノ曲「展覧会の絵」、デュカスの「魔法使いの弟子」など有名です。

【セレナーデ】

もともとは愛する人に捧げるタベの音楽のことです。一人の歌手が、リュートやギターなどを弾きつつ熱唱するというパターンはありますが、特定の音楽形式が存在するわけではありません。シューベルトやR.シュトラウスに「セレナーデ」と題する歌曲があります。ジャズでは、グレン・ミラーが「ムーンライト・セレナーデ」という曲を書き、ヒットしました。

【交響組曲】

主にオーケストラのための組曲の一種です。明確な定義はありません。標題性が強く、多楽章形式による作品もあります。ドビュッシーの「春」、イバールの「寄港地」、プロコフィエフの「キージエ中尉」などがあります。最近の作品では、すぎやまこういちの「ドラゴンクエスト」も交響組曲として知られています。

【行進曲】

行進をするために演奏される曲で、「マーチ」とも呼ばれます。単独の作品の場合と、大規模な楽曲の一曲として作られたものの両方があります。行進のための楽曲は古くからあり、軍楽や儀式などで使われてきました。シューベルトの「軍隊行進曲」、メンデルスゾーンの「結婚行進曲」、ヴエルディの歌劇「アイーダ」第2幕第2場の「凱旋行進曲」などが知られています。

【交響的物語】

交響的と題された作品は数多くありますが、この交響的物語の代表作はプロコフィエフの「ピーターと狼」です。「ラコツツィ行進曲」で有名な、劇的物語と題されたベルリオーズの「ファウストの劫罰」、ピアノとオーケストラのために書かれたフランクの作品の「交響的変容」、ラフマニノフには「交響的舞曲」と題されたオーケストラのため作品もあります。

【その他】

このほか、アメリカ発祥の音楽のスタイルとしては、スコット・ジョプリンが作曲した、シンコペーションを利用したラグタイムの曲があります。映画<スティング>のテーマ音楽となった「エンターティナー」は彼の代表作です。

「G線上のアリア」の母体です

一つひとつが独立したいくつかの曲を組み合わせたものを「組曲 (suite)」といいます。16世紀から18世紀によく書かれた古典組曲と、19世紀以降に書かれた近代組曲とに区別されます。古典組曲は、数曲の舞曲の配列によって成り立ち、その並び方には一定の決まりがあり、必ず次の4曲が含まれています。

①アルマンド：4分の4拍子のドイツ風舞曲。アルマンドとは、フランス語で「ドイツの」という意味です。

②クーラント：4分の3拍子や2分の3拍子の速い舞曲。
フランス語で「走る」という意味です。

③サラバンド：スペインに由来する3拍子のゆるやかな舞曲です。

④ジーグ：8分の6拍子、8分の9拍子、8分の12拍子などの複合拍子系の速い舞曲です。

しかし実際には、この4曲のほかに、最初に前奏曲や序曲を加えたり、ジーグの前に間奏曲やメヌエットなど他の舞曲を挿入したり、ジーグの後にシャコンヌやパッサカリアを置いたりすることもありました。

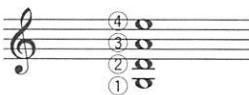
この《管弦楽組曲》は、《プランデンブルク協奏曲》と並ぶ彼の代表的管弦楽作品です。なかでも第2番と第3番は演奏される機会も多く、よく知られています。

この3番は、〈第1曲：序曲、第2曲：エア（アリア）、第3曲：ガヴォット、第4曲：ブーレ、第5曲：ジーグ〉の順序で書かれています。特に第2曲「エア（アリア）」【譜例1】は、弦楽器とヴィオラ・ダ・ガンバ、チェロ、ファゴットなど低音用の旋律楽器で演奏されます。ヴァイオリニストのウィルヘルミによってヴァイオリン・パートが、ヴァイオリンの一番低い音を出すG線1本だけで演奏できるように編曲されてからは「G線上のアリア」として有名になりました。最近では、この作品はリサイタルやオーケストラのアンコールピースとして、組曲中の他の楽章から切り離されて演奏されるようになっています。

譜例1 「G線上のアリア」の冒頭



●ヴァイオリンの調弦



- ① G線
- ② D線
- ③ A線
- ④ E線



Column

弦楽器のなかで一番小さいヴァイオリンは、5度音程で調弦された4本の弦と、松脂をつけた馬のしっぽの毛が張られた弓で演奏します。弦にはガット弦(羊の腸)、ナイロン弦、スチール弦があります。17世紀から18世紀のイタリアの小都市クレモナでは、多くのヴァイオリンが制作されました。これらの楽器は歴史的銘器として、現代に至るまで一流のヴァイオリニストに弾き継がれています。

悪魔に魂を売り渡したヴァイオリニスト

「奇想曲 (capriccio)」とは、もともとイタリア語の「気まぐれ」の意味があり、気の向くまま自由に演奏する軽快な曲に付けられた名前です。したがって曲の形式に一定の決まりはありません。奇想曲は、カプリース、カプリーチョ、カプリッチョなどとも呼ばれます。

この曲は名前の通り 24 曲から構成されていて、どれも壮絶なテクニックを要求される曲ばかりです。すべてヴァイオリンだけで無伴奏で演奏されます。ということは、ヴァイオリンは本来旋律楽器ですから、旋律だけ演奏していくは单调で一本調子になります。そこを補う形で、音を和音で演奏する重音奏法や、ヴァイオリンを支えている左手で演奏する左手のピツィカート奏法など、とても難しい技術を駆使しています。

この曲自体、テクニックのみならずメロディも非常に優れており、魅力に富んでいましたので、リストやシューマン、ブラームス、ラフマニノフらが、この曲をピアノ用に編曲しています。

奇想曲の第 1 番【譜例 1】はリストの《パガニーニによる大練習曲集》の第 4 曲「アルペッジョ」の原曲であり、第 5 番【譜例 2】と第 6 番は、同じリストの曲集の第 1 曲「トレモロ」に用いられ、第 9 番【譜例 3】は、やはり同じ曲集の第 5 曲で「狩り」と題されている曲で使用されています。ホルンを思わせる響きが特徴的です。途中で短調に転調します【譜例 4】。

最終曲の第 24 曲は特に有名で、《パガニーニの主題による変奏曲》として、ブラームスやラフマニノフなど、多くのロマン派の作曲家が競ってピアノ作品に改作・編曲しています。

ちなみに、チャイコフ斯基が 1880 年に作曲した管弦楽曲の《イタリア奇想曲》は、イタリア様式の伝統的な奇想曲スタイルの作品です。またリムスキイ=コルサコフの管弦楽作品《スペイン奇想曲》やクライスラーの《ウィーン奇想曲》など、多くの作曲家が奇想曲の名のもとに作品を書いています。

譜例1 第1番（リスト作曲「アルペッジオ」の原曲）

Andante

譜例2 第5番（リスト作曲「トレモロ」の原曲）

Agitato

譜例3 第9番（リスト作曲「狩り」の原曲）

Allegretto

dolce

譜例4 第9番



パガニーニ

ニコロ・パガニーニ
(Niccolò Paganini 1782 – 1840)



イタリアのジェノヴァ生まれのヴァイオリニスト、作曲家。父にヴァイオリンの手ほどきを受け、11歳でデビューして成功しました。その後、作曲も学びヨーロッパ各地で活躍しました。超人的な技巧をもち、19世紀のヴァイオリン奏法に多大な影響を及ぼしました。他方で彼の妙技はリストなどを通じてロマン派ピアノ音楽にも技法上の示唆を与え、ヴァイオリンの鬼神とも呼ばれました。ヴァイオリン演奏のあまりの上手さに「パガニーニの演奏技術は、悪魔に魂を売り渡した代償として手に入れたものだ」と噂されたほどでした。

スイスの童話がオペラになりました

ロッシーニが最後に書いたオペラが、1829年にパリで初演された『ウィリアム・テル』でした。原作はドイツの文豪フリードリヒ・シラーの同名戯曲です。舞台は14世紀初頭のスイス。悪代官ゲスラーの圧政に苦しむスイスの民衆を解放すべく立ち上がった英雄ウィリアム・テルの活躍を描いています。反骨心に富む獵師テルが、ゲスラーの悪だくみによって、最愛の息子の頭に載せたリンゴを弓矢で射落とさなければならない場面は特に有名です。

このオペラは全4幕のグランド・オペラで、ロッシーニ円熟期の傑作ですが、あまりに長大なためか舞台にかけられることはほとんどありません。しかし、序曲はオーケストラの演奏会において重要なレパートリーとして定着しています。

この「序曲(overture)」は4部分からなります。チェロの五重奏で始まる最初の「夜明け」【譜例1】は、悲しげな旋律に満ちており、スイス民衆たちの苦しみを表しているかのようです。続く「嵐」は雨が徐々に降り出し、激しい嵐になっていくさまを巧みに表現しています。そして嵐が止んだ後、第3部の「静けさ」では、イングリッシュホルンの独奏によりのどかな田園風景が描写されています。そして、最も有名な部分である最後の「スイス軍隊の行進曲」【譜例2】は圧政からの解放を告げるかのような、歓喜に満ちた勇ましい行進曲です。

この序曲は、たがいに関連のない4つの部分をつなぎ合わせたものですが、苦悩を克服して歓喜にいたるオペラのあらすじを明確に予告するものとなっており、オーケストレーションの巧みさもたいへん印象的です。

特にこの作品の「スイス軍隊の行進」は、現在でもテレビ等の多くの作品のなかに引用されるほど有名な曲です。

このようにオペラの序曲のみが演奏される例としては、スッペの《軽騎兵》序曲、《詩人と農夫》序曲、グリンカの《ルスランとリュドミラ》序曲、スマーナの《売られた花嫁》序曲などがあります。

譜例1 「夜明け」

Andante

V.C.

譜例2 「スイス軍隊の行進曲」

Allegro Vivace

ウイリアム・テルと
彼の息子の像

ジョアキーノ・ロッシーニ
(Gioachino Rossini 1792 – 1868)



美食家としても知られ、生涯に39のオペラを作曲した19世紀初期を代表するイタリアの作曲家です。しかし実質の作曲活動期間は短く、若干37歳でこの「ウィリアム・テル」を書いたあと、オペラの作曲はしませんでした。「セヴィリヤの理髪師」「アルジェのイタリア女」のように喜劇的なオペラから正統的なオペラまで、幅広い作品を残しました。

人生への深い洞察

リストの音楽史的な功績のひとつとして「交響詩 (symphonic poem)」の創始が挙げられます。交響曲はいくつかの楽章から成り立っていますが、ひとつの物語を单一楽章の音楽で語っていくのが交響詩です。この交響詩という言葉は、リストが1848年に書いた前奏曲を意味する《レ・プレリュード》から用いられて確立したとされています。一定の動機に変化を与えながら、それを曲全体に展開していくメタモルフォーゼ (変容) と呼ばれる方法を用いて、曲の標題的な性格を強調していきます。ロマン派以降、各国の作曲家が好んでこのスタイルを使って曲を書いており、多くの名曲が生まれました。

例えばドイツではR.シュトラウスの交響詩《ドン・ファン》《英雄の生涯》はじめ、映画「2001年宇宙の旅」の冒頭でトランペットが効果的に使われていた交響詩《ツアラトゥストラはかく語りき》など。フランスではドビュッシーの交響詩《海》、ディズニー映画「ファンタジー」の映像のために書かれたようなデュカスの交響詩《魔法使いの弟子》、ロシアではボロディンの《中央アジアの草原にて》、ムソルグ斯基の《禿山の一夜》、チェコではスマーナの「モルダウ (ブルタバ)」で有名な交響詩《我が祖国》、イタリアではレスピーギのローマ三部作と呼ばれる《ローマの噴水》《ローマの松》《ローマの祭》など、たくさんの交響詩があります。

このリストの交響詩では、ラマルティーヌの詩による「人生は死への前奏曲である」という考えに基づいた音楽で、リストの人生観が歌い上げられています。冒頭に現れる死を暗示させる第1主題【譜例1】から始まり、さまざまな変容が作り出されてゆく点に、この曲の面白さがあるといえるでしょう。

人生の朝ともいえる愛を扱った第1部で、ヴァイオリンによって演奏される優しい旋律【譜例2】が印象的で、このテーマを基にした自由な変奏が続きます。嵐を暗示する第2部。ホルンの音楽ではじまる田園生活の美しい静けさを描いた第3部。再び自分の力を試みるため運命に立ちあがる第4部で、第1主題 (第1部で現れる主題) の変容【譜例3】が金管楽器によって戻り、こ

の曲のクライマックスを迎えて全曲を終わります。

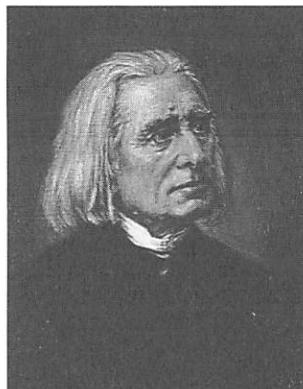
譜例1 死を暗示させる冒頭のテーマ(ヴァイオリン)



譜例2 愛のテーマ(ヴァイオリン)



譜例3 勝利(愛のテーマから生まれた主題の変容)(ホルンとトランペット)



僧衣姿のリスト

フランス・リスト
(Franz Liszt 1811–1886)



リストは晩年、ヴィトゲンシュタイン公爵夫人と結婚できなかったことがきっかけで修道院に入り、信仰の道に身を捧げる決心をします。この頃の作品は、以前の曲とは形式も内容も一変して、キリスト教に題材を求めた作品が増えてきます。聖フランチェスコを扱ったピアノ曲《2つの伝説》やピアノ独奏曲《巡礼の年》の第4曲「エステ荘の噴水」など、リストは深い精神世界に入っています。

ピアニストの超絶技巧發揮の曲

狂詩曲は「ラプソディ（rhapsody）」ともいわれ、叙事的で民族的な内容をもつ自由な曲です。特別の形式があるわけではありません。既存のメロディを使って曲を書いたり、メドレーのようにつなげて構成したりすることもあります。

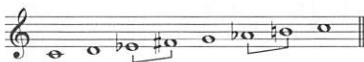
リストは作曲家ショパンとは対照的なピアノ書法を用いています。音楽史的には、リストは作曲家でありピアニストとしても大きな業績を残した人ですが、演奏家としての活動も1824年のパリでの独奏会から数えて30年近くも続いており、その超人的な技巧とともに近世におけるヴィルトゥオーソのまさに第一人者といってよいでしょう。

現在のような「ピアノ・リサイタル」の名称を付けた演奏会を最初に開いたのは、ほかならぬリストだったともいわれています。彼がピアノをオーケストラに匹敵するほどに拡大した表現機能をもつ楽器としたことは、ピアノ音楽の発展においては重要な意味を持ちます。彼のピアノ作品は、技巧性と表面的な華麗さに終始し過ぎて、音楽的な美しさに欠けると評されますが、「ピアノの魔術師」といわれるリストだけに、やはりマンティシズムにあふれる豊かな抒情性をもつ彼の作品には、「ピアノで描く音の詩」といった趣きが強く感じられます。

この曲集は、ジプシー音階【譜例1】が基調になって書かれています。第2番は、全19曲中最もよく知られている作品で、典型的なハンガリーの民族舞曲であるチャルダッシュで書かれています。すなわち前奏【譜例2】から始まり、ラッサンと呼ばれるゆっくりした部分【譜例3】、それにフリスカ【譜例4】と呼ばれる華やかで熱狂的な部分と2つの対比によっています。ホロヴィツがアレンジして演奏したことでも広く知られています。

他の作曲家の狂詩曲としては、ドヴォルザークの《3つのスラヴ狂詩曲》やエネスクの《ルーマニア狂詩曲》、シャブリエの《狂詩曲スペイン》、またブラームスの《2つのラプソディ》《アルト・ラプソディ》、ラヴェルの《スペイン狂詩曲》などが知られています。

譜例1 ジプシー音階



譜例2 チャルダッシュ

Lento a capriccio

f marcato

▲ ▲ ▲ ▲

Rd. Rd. Rd. Rd.

譜例3 ラッサン(ゆっくりした部分)

LASSAN

Andante mesto

f molto espressivo

l'accompagnamento pesante e f

▲ ▲ ▲ ▲

Rd. Rd. Rd. Rd.

譜例4 フリスカ(華やかで熱狂的な部分)

p ma ben marcato sotto


Column

ジプシー音楽は、もともとはハンガリー民族のものではありません。ハンガリーにジプシーが流れてきたのは15世紀頃で、19世紀になるとジプシー音楽は西ヨーロッパでハンガリー音楽として知られるようになります。独特の愁いを帯びたメロディと、生彩にあふれたリズムは、人々の心を捉えて広まりました。ハンガリー出身のリストが、この音楽を作品に用いたのはごく自然な流れだと考えられます。

標題音楽の代表作

「標題音楽(program music)」とは、音楽外の想念や心象風景を聴き手に呼び起こさせることを意図して、情景やイメージ、気分や雰囲気といったものを描いた器楽作品のことをいいます。歌劇や歌曲のような声楽作品に使うことはありません。これに対して「絶対音楽」とは、音楽の外の世界を特に意識せずとも鑑賞できるように作曲された音楽作品、またはそのような意図で創られた楽曲のことをさします。標題音楽という言葉は、この考え方が開花した19世紀に、ロマン派の音楽について語る場合に使われるようになりました。

この《動物の謝肉祭》は、サン=サーンスの作品のなかでも最も有名なものです。いろいろな動物の名前が付けられた14曲の小品からなる組曲で、動物園のなかを巡るような楽しさがあり、音楽で動物の鳴き声や動作などが描写されています。その分かりやすさの裏には、鋭い風刺精神があふれています。「ピアニスト」や「化石」などでは、多くの楽曲をパロディにしたブラック・ユーモア的なセンスを感じられます。

第4曲「亀」【譜例1】：オッフェンバックの《天国と地獄》のなかの、激しく華やかな踊りである「カンカン」の音楽が出てきます。

第5曲「象」【譜例2】：コントラバスが、ベルリオーズの《ファウストの劫罰》のなかの「妖精の踊り」のメロディを演奏します。

第11曲「ピアニスト」【譜例3】：ピアニスト2人が「ハノン」練習曲に出てくるような音階を延々と演奏する曲です。下手なピアニストの練習を皮肉った音楽が笑いを誘います。

第12曲「化石」【譜例4】：木琴によってサン=サーンス自身の交響詩《死の舞踏》のメロディが軽快に演奏されます。自分の曲を「化石」とみなしているあたりが、いかにもサン=サーンスらしいところです。

第13曲「白鳥」【譜例5】：単独で演奏されることの多い不朽の名作です。チエロが優雅で気品に満ちた美しいメロディを、2台のピアノ伴奏で演奏します。アンナ・パブロワが演じて知られるようになった「瀕死の白鳥」として、バレ

工で踊られることもあります。

第14曲「終曲」【譜例6】：軽快なリズムに乗って、これまで出てきた動物たちがカーテン・コールのように再登場します。

譜例1 第4曲「亀」(弦楽器)

Andante maestoso

譜例2 第5曲「象」(コントラバス)

Allegretto pomposo

譜例3 第11曲「ピアニスト」(ピアノ2台)

Allegro moderato

譜例4 第12曲「化石」(シロフォン<木琴>)

Allegro ridicolo

譜例5 第13曲「白鳥」(チェロ)

Andantino grazioso

譜例6 第14曲「フィナーレ」(全員<オーケストラ>)

Molto allegro

カミュー・サン=サーンス
(Camille Saint-Saëns 1835 - 1921)



化石やピアニストにいたるまで、“動物”として表現したこの作品は、謝肉祭で聞く非公開の音楽会のために作曲されました。サン=サーンスとしては、皮肉やユーモアを含めた軽い気持ちで書いた作品でした。彼はすでに、作曲家としての地位も確立し、教養人としても知られていましたので、生前にこの曲が発表されることはありませんでした。

愛の言葉はセレナーデとともに

「セレナーデ(serenade)」とは、もともとは夜、恋人の部屋の窓の下で愛する人や女性を称るために、持ち運びしやすいギターなどを伴奏楽器として歌ったり、弾いたりする甘い愛の歌のことです。「小夜曲」と呼ばれることもあります。単純で美しいメロディをもっています。

音楽史においては、いくつかの楽章からなる合奏曲のことをセレナーデといいます。18世紀に発達し、「セレナード」と呼ばれることもあります。

古典派のセレナーデで最も有名な曲は、モーツアルトの作品です。なかでも《ハフナー・セレナーデ》と弦楽合奏のための《アイネ・クライネ・ナハトムジーク》が有名です。

セレナーデと似ていますが、「ディヴェルティメント(divertimento)」という一連の曲も、モーツアルトを代表する音楽の一つのジャンルになっています。昔は「喜遊曲」と訳されていました。セレナーデは主として野外で演奏されるうえ楽器編成も大がかりですが、ディヴェルティメントは主に室内で演奏され、楽器編成もさまざまです。原則として楽器のパートは各パートひとりずつで演奏されることになっています。弦楽合奏のためのセレナーデは、この他にもドヴォルザークやエルガー、スクらが作曲しています。

この《弦楽セレナーデ》は、弦楽オーケストラのために作曲された4楽章からなる作品で、チャイコフスキーの代表作のひとつとして広く親しまれています。モーツアルトへの敬愛から書かれた作品といわれており、チャイコフスキーラしい抒情的でメランコリックな旋律が印象的な名曲です。特に第1楽章冒頭の部分【譜例1】は、テレビ番組やCMにも使われています。また第2楽章では軽快なワルツの主題【譜例2】が流麗に書かれています。第3楽章はエレジー(悲しみの歌)と題されているロシア的なメロディです。第4楽章は、ロシアの主題によるフィナーレと書かれており、民族舞曲【譜例3】が使われています。

チャイコフスキーには、この弦楽セレナードの前に書かれた《憂鬱なセレ

ナード》と題されたヴァイオリンと管弦楽のための作品があります。独奏ヴァイオリンが哀調を帯びたメロディを奏する曲で、この弦楽合奏の曲とは対照的な作品となっています。

譜例1 第1楽章の冒頭

Andante non troppo



譜例2 第2楽章の軽快なワルツの主題(ヴァイオリン)

Moderato tempo di valse



譜例3 第3楽章 ロシアの民族舞曲を用いて

Allegro con spirito



 *Column*

この曲は、ロシアからアメリカに渡った振付師ジョージ・バランシン(1904～1983)のバレエ作品「セレナーデ」としても有名です。バランシンは、クラシックとモダンを融合したシンフォニック・バレエを確立した現代バレエの巨匠です。この作品は、音楽的な主題(テーマ)をバレエの動き(ステップ)に置き換え、物語の無い音楽の構造を、バレエとして可視化し、優雅で説得力のある作品に仕上げています。またこの作品は、彼がアメリカ・バレエ学校を設立した折、第一回学校公演の生徒のために振付けられ、練習中のエピソードが盛り込まれているといわれています。この他にもチャイコフスキイの楽曲で「テーマとヴァリエーション」「チャイコフスキーバダウ」など数多くの作品を残しています。

昔々のお話です

コルサコフが青年時代に世界各地を航海した時の、彼の異国趣味と実際に体験した海の描写がみごとに生かされた作品です。途上で立ち寄った国々の印象が、この曲を書く機縁となりました。

極度の女性不信に陥っていた冷酷なシャリアール王に、千一夜にわたってさまざまな物語を語り続けて、ついに王の心を解き、その妃になった「アラビアン・ナイト(千一夜物語)」のストーリーをテーマとして、オーケストラのために書かれています。この物語の語り手であるシェエラザードを表す独奏ヴァイオリンの主題が、全楽章を通して演奏されます。

この曲はそれぞれが独立した4曲からなる組曲ですが、全曲を通じて荒々しさのあるシャリアール王の主題と優しさあふれるシェエラザードの主題が展開され、何回も絡み合うように出てきます。このことによって「交響組曲(symphonic suite)」という呼び名に相応しい、交響曲的なまとまりの良さが作り出されています。第3楽章の主要主題をはじめとして、エキゾティックなメロディとハーモニーの美しさにあふれているのも魅力の一つです。独奏ヴァイオリンが協奏曲のように活躍する部分もあり、数あるオーケストラ作品のなかでも、最も華やかで豪華で人気の高い作品となっています。

第1楽章：「海とシンドバッドの船」

力強いシャリアール王の主題【譜例1】と独奏ヴァイオリンによるシェエラザードの主題【譜例2】が演奏されます。

第2楽章：「カランダール王子の物語」

「アラビアン・ナイト」の数箇所に出てくる、諸国を行脚するカランダールという苦行僧が描かれています。

第3楽章：「若き王子と王女」

美しい主題【譜例3】をヴァイオリンがゆったりと奏でます。

第4楽章：「バグダッドの祭。海。船は青銅の騎士のある岩で難破。終曲」

これまでの主題が回想されつつ、徐々に曲は盛り上がっていきます。その頂点で船の難破の場面に変わり、シェエラザードの主題が消えるように奏されて曲を終わります。

管弦楽法の大家でもあるコルサコフの代表作だけに、全曲が豪華絢爛な管弦楽の大絵巻物のように色彩感に満ちあふれた作品です。

譜例1 シャリアール王の主題

Largo e maestoso

譜例2 シエエラザードの主題

譜例3 若き王子と王女

Andantino quasi allegretto

ニコライ・アンドレイエヴィチ・リムスキーコルサコフ
(Nikolay Andreevich Rimsky-Korsakov 1844 – 1908)



バラキレフ、キュイ、ポロディン、ムソルグスキーのいわゆる「ロシア5人組」のひとりで、色彩感あふれる管弦楽曲や民族色豊かなオペラを数多く残したロシア国民楽派の作曲家です。海軍士官としての体験から海の描写を得意としたことでも有名で、作品には航海の場面が含まれています。音楽理論の分野でも大きな貢献があり、和声学や管弦楽法の本も書いており、作曲家としてボロディンやムソルグスキーの未完の作品を多く完成させています。

イギリスの第2の国歌として愛される

「威風堂々」と題された5作品のなかでいちばん有名な曲です。この曲が書かれた時の英國国王エドワード7世がエルガーを称えた通り、この名曲は世界中に広まり、さまざまな形で演奏され、現在に至るまで親しまれています。

タイトルの「威風堂々」は、シェークスピアの戯曲「オセロ」に出てくるセリフから取ったものを、そのまま曲名に付けています。このようにイギリス一色のこの曲は、命名のいきさつもあるためでしょうか、イギリスで大変人気のある曲です。国王エドワード7世の歌詞を付けるようにという要望に従い、A. C. ベンソンの詩を付けて「希望と栄光の国」として、中間部の有名な旋律が使われました。「第2の国歌」として愛唱されており、多くの式典やイベントでも演奏されています。日本でも高校や中学の吹奏楽の演奏会でよく取り上げられています。

行進曲はもともと、軍楽隊や儀式などで使われてきた古くからあるもので、歩く速さをそろえて行進をするために演奏されたり、行進を描写したりする曲で、当然2拍子で書かれています。単独の作品の場合もありますし、大規模な楽曲のなかの一曲として作られるものもあります。

行進曲自体、主として吹奏楽のために書かれることが多く、ほとんど3部形式や複合3部形式で書かれていますが、たまに中間部(トリオ)の後の主部を欠く曲もあります。よく知られた単独で演奏される行進曲には、有名なスーザの《星条旗よ永遠なれ》や《ワシントン・ポスト》、またJ.F.ワーグナーの《双頭の鷲の旗の下に》のような曲があります。全日本吹奏楽コンクールでは、課題曲として行進曲が多く採用されています。また、春、夏の高校野球大会の入場式では常に行進曲が演奏されることが決まっています。

一方、モーツアルトやベートーヴェンの《トルコ行進曲》やシューベルトの《軍隊行進曲》などは、芸術作品としての楽曲で、行進するための曲ではありません。

この曲の冒頭は、軍隊調の勇壮な序奏【譜例1】から始まります。続いて弦楽器が活動的な第1主題【譜例2】を演奏します。中間部にあたるトリオでは、広く知られた有名なメロディ【譜例3】が華々しく大らかに歌われます。

譜例1 勇壮な序奏

Allegro con molto fuoco

ff ff ff ff ff ff

譜例2 活動的な第1主題

ff simile

譜例3 第2の国歌となったトリオの部分

Largamente

p legato e cantabile

Column

国歌「君が代」は、歌詞が古今和歌集から取られ、律旋法で書かれています。世界にはオーストラリアのように時の政権政党によって国歌が変わる国、タイのように一般用と王室用の2曲の国歌がある国、アフリカ諸国ではメロディは同じでも国ごとに別々の歌詞をつけて歌っていたり、いろいろあります。オリンピックでは大会委員会が決めた国歌が演奏されるといったように、国歌にまつわる話は、意外と知られていません。

ロシアの民謡が子供の音楽入門に

この曲は、子どもの音楽入門のために作られた曲です。ロシアの民話を題材にしており、登場人物と特定の楽器を結び付けて、ナレーション付きでストーリーが進行していきます。話の面白さもさることながら、単純に曲として聴いても魅力的な作品で、ナレーターと小編成のオーケストラのために書かれています。

あらすじは、主人公ピーターが動物たちと協力して、狼を捕えるまでを楽しく描いています。ある朝、ピーターは牧場に出かけて行きました【譜例1】。いろいろな楽器が動物の種類に分かれて登場しますので、子どもに音楽の楽しさを伝えたい、楽器になじませるという教育効果があります。楽器や音型を効果的に用いて、それぞれの情景を上手く表しています。

物語の登場人物とそれぞれを表す楽器は、ピーター（弦楽器）、ピーターの親友の小鳥（フルート）、狼に飲みこまれてしまうあひる（オーボエ）、小鳥を狙っている猫（クラリネット）【譜例2】、機嫌の悪いピーターのおじいさん（ファゴット）、森に住んでいる狼（ホルン）【譜例3】、狩人の鉄砲の音（ティンパニ）となっています。

プロコフィエフ特有のウィットが曲の隅々まで生かされています。具体的に挙げると、例えば狼がかみつく時にはホルンが弱音器を用いたり、おじいさんがネチネチ説教する時には、ファゴットが何度も同じ音型を繰り返したり、狼に狙われた猫が木に駆け登る時には、クラリネットの上行形の速く細かい音型が用いられたりと、場面に合った楽器の演奏方法が楽器法を熟知したプロコフィエフによって巧みに表現されています。

若者にクラシック音楽に親しんでもらうすぐれた入門作品としては、難しそうず、軽すぎず、音楽にも楽器にも興味をつなげる作品として、イギリスの作曲家ベンジャミン・ブリテンの《青少年のための管弦楽入門》があります。この《ピーターと狼》は、ブリテンの作品と並ぶ、国境や民族を越えた音楽物語といえるでしょう。

譜例1 ピーターは楽しく出かけます。(弦楽器)

Andantino

譜例2 小鳥を狙っている猫。(クラリネット)

Moderato

p gva con eleganza

譜例3 森に住んでいる狼。(ホルン)

Andante molto

mp

●「ピーターと狼」の楽器と役柄

登場人物	楽器名
ピーター	弦楽器
小鳥	フルート
あひる	オーボエ
猫	クラリネット
おじいさん	ファゴット
狼	ホルン

セルゲイ・セルゲーエヴィチ・プロコフィエフ
(Sergey Sergeyevich Prokofiev (1891 - 1953))



帝政期のロシアで生まれ、教育を受けた作曲家です。ロシア革命後、シベリア・日本を経てアメリカへ渡り、その後パリに住み、20年近く海外での生活の後に社会主義のソヴィエトへ帰国しました。彼自身が優れたピアニストであったことから、多くのピアノ作品があります。ソ連復帰後は社会主義リアリズムを試みながらも、メカニカルで機知に富むリズム感と斬新な和声、ロシアの風土に培われた豊かな旋律性に富んだ作品を書いています。20世紀を代表する作曲家のひとりでしょう。

ジャズとクラシック音楽の融合

この《ラプソディ・イン・ブルー》は、ピアノ独奏と管弦楽のための作品で、シンフォニック・ジャズと呼ばれる新しい領域を開拓した記念碑的な作品の代表的な成功例として、世界的に評価されています。タイトルは、「ジャズの手法を用いた自由奔放なファンタジー風の曲」といった意味です。通常は独奏ピアノと管弦楽で演奏されますが、最初はポール・ホワイトマンに委嘱され、バンジョーも加わるジャズバンド用に書かれました。その後《大峡谷》の作曲者として著名なグローフェがオーケストレーションを担当し、現在の形になりました。楽器法を熟知していないガーシュウィンでしたが、このオーケストレーションによって、彼の名は一躍世界に広まりました。

テレビドラマ版「のだめカンタービレ」では、毎回エンディングテーマに使われているほか、劇中にも頻繁に流れしていました。

冒頭、ソロ・クラリネットの低音から高音へかけ上がるグリッサンドという奏法で曲が始まります【譜例1】。大変印象的な出だしです。その後、管楽器によって主題【譜例2】が演奏されます。続いてピアニストによって最初の主題が奏されます。独奏ピアノと管弦楽のかけ合いが続くなか、華やかなピアノとジャズ風の打楽器によるリズム【譜例3】にのって、金管楽器で新しいメロディ【譜例4】が演奏されます。リズムのアクセントが独特で、このような今までのクラシック音楽には感じられない新鮮さが、聴衆に受けた理由だったのかもしれません。ゆったりとしたメロディ【譜例5】は、ジャズの要素を多く含んだ旋律です。

楽器編成は、バンド用ではサクソフォーンが加わります。またバンド用でも管弦楽用の楽器編成でも、楽器のなかにバンジョー（注*）が含まれているのが、いかにもアメリカの作曲家の作品ということを感じさせてくれます。

* この曲で使われているバンジョーは、弦楽器のひとつで、もともとはアフリカの民族楽器でした。アメリカ合衆国の南部に、奴隸としてつれて来られたアフリカ人から伝えられました。現在では、カントリー音楽やディキシーランド・ジャズなどで使用されています。4弦のものと5弦のものがあります。

譜例1 クラリネット・ソロによるグリッサンド奏法の出だし

Molto moderato (♩=80)

p

譜例2 管弦楽による主題

Più mosso

mf

譜例3 ジャズ風のリズム

C

譜例4 金管楽器によるアメリカ風のメロディ

mf

flutter

譜例5 ブルーノート風のメロディ(ヴァイオリン&ホルン)

Andantino moderato con espressione

p

ジョージ・ガーシュウィン
(George Gershwin 1898–1937)



ロシア移民の両親のもとにニューヨークの貧しいユダヤ人街で育ちました。ポピュラー音楽、クラシック音楽の両面で活躍し、独自のアメリカ音楽を作り上げた作曲家として知られています。彼は《パリのアメリカ人》やオペラ「ボーギーとベス」などクラシック音楽として扱われる作品のほかに、ポピュラー・ソングやミュージカル、映画のための作曲も手がけました。そこからいくつもの名曲、例えば「スワニー」「アイ・ゴット・ア・リズム」等のジャズのスタンダード・ナンバーが生まれました。

第11章

クラシック音楽のジャンル

器楽・声楽・舞台音楽などに分類されます。

クラシック音楽とは、一般的には西洋の芸術音楽のことをいいます。クラシック音楽の対として、ポピュラー音楽という言葉が使われます。欧米以外の非西洋での古典音楽や伝統音楽は、民族音楽というジャンルに分類されます。

音楽のスタイルから考えた場合、今まで大別してきた2部形式、3部形式、ロンド形式、ソナタ形式、ロンド・ソナタ形式、変奏曲形式、フーガ、カノンなどの決まった形式以外に、ワルツ、間奏曲、奇想曲、幻想曲、マーチ、前奏曲、即興曲、舟歌、無言歌、ノクターン、練習曲、スケルツォ、ディヴェルティメント、バガテル、バラードなど多くのスタイルがあります。これらは、本来の名前の意味と異なり、形式にこだわらず作曲家が自由に書いたものが多く、枠にはめて考えることはできません。

また、スタイルからだけでなく、演奏形態によっても、ジャンル別に分けることができます。具体的には、ソナタや歌を含まない小品などを演奏する「器楽曲」、交響曲や協奏曲、組曲などを演奏する「オーケストラ曲」、二重奏から数人の奏者の曲を演奏する「室内楽曲」、宗教曲や合唱曲、歌曲を歌う「声楽曲」、オペラ、バレエやオペレッタを含む「舞台音楽」、現代になって出現した「電子音楽」や「コンピューター音楽」など、演奏する方法によっても区別することができます。

さらに、これらの演奏のコラボレーション、例えば語り手とテープ音楽と生演奏、バレエとコンピューター音楽の組み合わせなど、新しい演奏形態も生まれてきています。

[それぞれのジャンルの代表曲]

1. 組曲

クーブラン：クラヴサン組曲集

ビゼー：「カルメン」組曲、「アルルの女」組曲第1番、第2番

2. 協奏曲

ヴュータン：ヴァイオリン協奏曲(7曲：第4番、第5番など)

ヴィエニヤフスキ：ヴァイオリン協奏曲(2曲：第1番、第2番)

ブルッフ：ヴァイオリン協奏曲

グラズノフ：ヴァイオリン協奏曲

バルトーク：ピアノ協奏曲、ヴァイオリン協奏曲

ロドリーゴ：ギター協奏曲(アランフェス協奏曲)

ショスタコーヴィチ：ピアノ協奏曲、ヴァイオリン協奏曲

3. 吹奏楽

ホルスト：吹奏楽のための第1組曲・第2組曲

アルフレッド・リード：アルメニアン・ダンス(パート1・パート2)

バーンズ：アルヴァマー序曲

スーザ：星条旗よ永遠なれ、ワシントン・ポスト

4. 室内楽曲

モーツアルト：アイネ・クライネ・ナハト・ムジーク

ベートーヴェン：弦楽四重奏曲第7番「ラズモフスキ一第1番」

ニールセン：木管五重奏曲

ラヴエル：ピアノ三重奏曲

アルチュニアン：アルメニアの風景(金管五重奏)

ショルティーノ：異教徒の踊り(サクソフォーン四重奏)

5. 声楽曲

ロッシーニ：スターバト・マーテル

ブルックナー：テ・デウム

シェーンベルク：グレの歌

オルフ：カルミナ・ブランナ

ショスタコーヴィチ：森の歌

メシャン：5つのルシャン

日本人には一番人気がある クラシック音楽

「四季」は《和声と創意への試み》と題された12曲からなるヴァイオリン協奏曲集の第1集、すなわち「春」「夏」「秋」「冬」と名付けられた第1曲から第4曲までの総称です。ただしこの「四季」という名前はヴィヴァルディ自身が付けたものではありません。

これら4曲は、それぞれ3つの楽章から成っています。この曲で興味深いのは、各楽章に四季折々のさまざまな情景を表わすソネット(ヨーロッパの定型詩)が付けられており、音楽がそれらの情景を描写している点です。楽譜には細かなニュアンスは書かれていませんので、演奏者はソネットを読み、音楽を表現しなければなりません。また即興で演奏する部分もあります。

ヴィヴァルディは、弦楽合奏の伴奏を伴い独奏楽器が主役を演じる「協奏曲」というジャンルを確立した最初の作曲家の一人といえるでしょう。「四季」の4曲は独奏ヴァイオリンのほかに、第1ヴァイオリン、第2ヴァイオリン、ヴィオラ、チェロ、コントラバスと通奏低音と呼ばれるチェンバロなどの楽器の合奏のために書かれています。管楽器や打楽器は使われていません。これ以降、古典派以後の協奏曲は<独奏楽器>と<オーケストラ>との共演という形になっていきます。これは独奏協奏曲と呼ばれるもので、ピアノなりヴァイオリンなりの一人(まれに複数)の奏者がオーケストラを向こうに回して、華麗な名人芸を繰り広げるタイプの曲です。今日では一般的に協奏曲といえばこの独奏協奏曲を意味します。

4曲はすべて3楽章構成からなり、第1楽章は軽快なアレグロのテンポ、第2楽章はゆっくりしたテンポの緩徐楽章、第3楽章は再び快速なテンポになります。これは協奏曲の楽章構成における基本パターンです。

第1曲「春」は、少し以前までの中学校音楽教科書で鑑賞教材として指定されており、「四季」の中でも特に有名です。

譜例1 第1曲「春」春の到来を喜ぶ様を描写する華やかな主題が何度も登場します。

Allegro

(Vn. I)

(f)

譜例2 第2曲「夏」暑さからくるけだるさを巧みに表現しています。

Allegro non molto

(Tutti)

pp

譜例3 第3曲「秋」村人たちの踊りと歌で、豊かな収穫の喜びを描いています。

Allegro

(Tutti)

(f)

譜例4 第4曲「冬」冷たい雪のなか、震えながら人々が歩く様子が描写されています。

Allegro non molto

(mf)

(Vn. II)

(Vn. Solo, Vn. I)

(Vc., Cemb. または Org.)

アントニオ・ルーチョ・ヴィヴァルディ
(Antonio Lucio Vivaldi, 1678 – 1741)



ヴィヴァルディはイタリアのヴェネツィア出身のバロック末期の作曲家で、カトリック司祭でもありました。赤毛であったことから「赤毛の司祭」とも呼ばれていました。450曲以上の協奏曲を書いていますが、彼自身がヴァイオリンの名手であったため、その多くが弦楽器のために書かれています。そのほかにもソナタ、室内楽、オペラ、オラトリオ、宗教音楽など多岐にわたり数多くの作品を残しています。バロック協奏曲の完成者。

チェンバロが華々しく活躍します

この協奏曲集は、バッハがケーテンという街で楽長に任命された時期、ブランデンブルク辺境伯クリスティアン・ルートヴィヒに献呈されたためにこの曲名が付けられました。全6曲から成り、それぞれに編成が違いますが、基本的な構成はヴィヴァルディが確立したバロック協奏曲形式が用いられています。すなわち〈急－緩－急〉の3つの楽章で書かれていますが、弦楽合奏を中心に、ヴァイオリンまたは管楽器、またはチェンバロというように、曲中での独奏楽器は必ずしもひとつとは限りません。場合によってはそれらが曲中で入れ代わったり、弦楽だけで演奏される場合もあります。現在のように「ピアノ協奏曲」「ヴァイオリン協奏曲」といったような特定の楽器が冠楽器として曲名に入らないのが一般的です。

当時のバロック協奏曲のスタイルは「リトルネット形式」と呼ばれます。リトルネット形式は全員で合奏する〈トゥッティ〉という部分と、一人で演奏する〈ソロ〉の部分が交替して登場することです。トゥッティ部分は、同じものが何回も演奏されます。その部分をリトルネットといい、英語でいうリフレインに当たります。ソロの部分では、独奏楽器が通奏低音の上でいろいろな旋律を演奏します。イタリア語の ritorno (復帰) から派生した言葉で、西洋音楽の楽曲形式のひとつをいいます。バロック時代の協奏曲に多く見られた形式で、反復回帰する部分 (リトルネット) をもつ、つまりソロと合奏が交代しながら進んでいく音楽形式です。

全6曲中で最もよく知られているのがこの第5番です。別名チェンバロ協奏曲と呼ばれるほど、第1楽章ではチェンバロが独奏楽器のように活躍します。

曲は冒頭、華やかなアレグロから始まります【譜例1】。ヴァイオリンとフルートのかけ合いにチェンバロが加わり曲は進行します。この華やかな音楽は何度も現れます。最初は伴奏していただけのチェンバロが、楽章の終わり近くに演奏される即興的な部分では主役となり、技巧的で長大かつ華麗な演奏を繰り広げる様は、まさに後のチェンバロ協奏曲を思わせます。

続く第2楽章も、ヴァイオリンとフルートのかけ合いにチェンバロが伴奏する【譜例2】という形で進行しますが、口短調で書かれており曲全体がもの悲しい雰囲気で、第1楽章の華やかさはありません。第3楽章は、ヴァイオリンとフルートがフーガのように演奏し始めるアレグロ楽章です【譜例3】。舞曲風の特徴的なリズムが全曲を支配し、華やかさを増しています。

譜例1 第1楽章の華やかな冒頭



譜例2 第2楽章のヴァイオリンとフルートのかけ合い



譜例3 第3楽章の舞曲風の特徴的なリズム



Column

タイトルにもなった「ブランデンブルク辺境伯への献呈」については、バッハが就職活動を有利にするための動機が働いた、ともいわれています。当時のバッハはケーテンの宮廷楽長として活躍していましたが、ケーテン候が結婚したことで、状況が一転しました。候が迎えた妃は、音楽嫌いだったのです。従って、ケーテンの宮廷楽団も縮小されることになりました。この状況下でバッハは、新天地を求め、ブランデンブルク辺境伯に作品を献呈することで、就職を有利にしようとしたと考えられます。この作品が献呈されたのと同じ頃の1723年に、バッハはライプツィヒのトマスカントルに転出しています。また、全6曲からなる協奏曲は、長い時間をかけて作曲した作品から選曲し、まとめたものです。作曲された順番は、第6番・第3番・第1番・第2番・第4番・第5番です。

幸せな喜びに満たされた作品

「モテット(motet)」とは、一般的に中世末期からルネサンスの頃にかけて成立発展した、ミサ曲以外の声楽の宗教曲のこと指します。

この曲は1770年、イタリアを旅したモーツアルトが、お気に入りの歌手のために作曲しました。その華やかな曲調から細やかで装飾の多いコロラトゥーラ的技巧が要求されますが、現在では優美で抒情的なリリック・ソプラノの主要なレパートリーとなっています。全曲は3楽章で構成されており、ナポリ楽派の影響が見られます。ソプラノ独唱にオーボエ2、ホルン2、弦楽合奏とオルガンという編成で演奏されます。曲はテキストの内容からすると宗教曲なのですが、音楽の方はオペラ・アリアのような華やかさをもっています。ソプラノのソロを独奏楽器にした、まるで協奏曲のような華麗な作品といえるでしょう。

第3楽章は、単独で歌われることもある有名な「アレルヤ」です。この曲は初演の時から人気が高く、現在でもモテット全曲ではなく、この楽章だけがコンサートで取り上げられ演奏されることが多くあります。モーツアルトの作ったオーケストラ伴奏付きの声楽曲のなかでは、特によく知られています。音楽映画「オーケストラの少女」でも使われていました。

曲はオーケストラの前奏に始まりますが、これこそ喜びに満ちた愛らしいメロディで、一度聴いたら忘れられないものです。このメロディ【譜例1】をソプラノが繰り返すロンド風の構成で書かれています。

歌詞は、テキストの結句である“アレルヤ”という語のみで構成されており、曲中では〈アー〉という母音のヴォカリーズとスタッカート【譜例2】が効果的に使われて、軽やかな曲調になっています。歌詞はアレルヤだけで、声が器楽的に扱われているともいえます。このメロディはとても親しみやすく、楽章全体も明るく喜ばしい雰囲気に溢れていますし、ソプラノの技巧的な歌いまわしを存分に楽しむことができます。中間部でのオーボエとソプラノのかけ合いも聴き所のひとつです。

「アレルヤ」はラテン語における発音で、原語のヘブライ語ではハレルヤ(hallelûyah)といいます。その意は「神(ヤハ=ヤハウェ)をほめ讃えよ」という神を賛美する言葉です。

譜例1 ソopranoが歌う「アレルヤ」のメロディ



譜例2 ソopranoはヴォカリーズとスタッカートで軽やかに歌う



モーツアルトの宗教作品としては、この他、彼の亡くなった年に作曲されたカトリックで用いられる聖体賛美歌である《アヴェ・ヴェルム・コルプス》(Ave verum corpus)、《ミサ曲ハ短調》、いくつもの《ミサ・プレヴィス(小さなミサ曲)》、未完に終わった有名な《レクイエム 二短調》などがあります。このレクイエムの作曲の経緯については、映画「アマデウス」のなかで、「匿名の男が、高額な報酬で作曲を依頼した」とか「ライバルの作曲家サリエリの陰謀である」などのエピソードが、ドラマティックに描かれています。

短い生涯に書かれた絶望感の漂う曲集

「連作歌曲」とは、歌曲集のそれぞれの曲が文学的、かつ音楽的な関連性をもって構成された歌曲集のことです。作品全体を通して、ひとつのまとまった世界が作り出されています。一般的に連作歌曲の場合、歌詞は同一の詩人のものを使うことが多くありますが、曲集によってはさまざまな詩人の詩を集め、それらに曲を付けることもあります。

この連作歌曲集《冬の旅》は、《美しき水車小屋の娘》《白鳥の歌》とならびシューベルトの三大歌曲集のひとつといわれています。なかでも《冬の旅》は特に人気が多く、しばしば全曲を通して演奏されます。

歌曲集はシューベルトの死の前年に、シューベルトのもうひとつの歌曲集《美しき水車小屋の娘》と同じドイツの詩人ヴィルヘルム・ミュラーの詩をもとに作曲されました。主人公が若い青年であるという共通点はありますが、その雰囲気は対照的です。《美しき水車小屋の娘》は全編が明るさに包まれているのに対して、《冬の旅》での若者は第1曲から失恋した状態で、街を捨ててさすらいの旅を続けます。全曲を通して孤独感、暗さ、絶望感が強く漂います。

オリジナルはバリトンを想定に書かれていますが、最近は女性歌手も歌います。それは一人の人間としての人生の苦悩を、シューベルトの歌曲が表現しているからです。

全24曲のなかでも、次の曲がよく知られています。

第1曲「おやすみ」【譜例1】では、冬の夜、失恋した若者が恋人の住んでいる街から去っていく様子が歌われます。

第5曲「菩提樹」【譜例2】。親しみやすい甘い美しさをもったメロディは、シューベルトの全歌曲のなかでも特に有名です。曲は木々の葉のざわめきを描写するようなピアノ伴奏【譜例3】で始まります。

第11曲「春の夢」【譜例4】は、暗い雰囲気の曲が続いた後の久しぶりの明るさをもった曲です。若者は美しい花に彩られた春の夢を見ますが、目覚めると再び冷たい現実に引き戻されます。

譜例1 「おやすみ (Gute Nacht)」

Mässig

Fremd bin ich ein - ge - zo - gen, fremd zieh ich wie - der aus.

譜例2 「菩提樹 (Der Lindenbaum)」

Am Brun - nen vor dem To - re da steht ein Lin - den - baum;

譜例3 「菩提樹」のピアノによる前奏

Mässig

譜例4 「春の夢 (Frühlingstraum)」

Etwas bewegt

Ich träumte von bun - ten Blu - men, so wie sie wohl blü - hen im Mai,

Column

この曲集には他に、自分の涙が小川にのって恋人の家まで流れ着くだろうかと歌う第6曲「あふるる涙」、恋人からの手紙を待ちわびる心理を描写した第13曲「郵便馬車」、旅路の若者の死を追いかけるかのような一羽のからすを歌った第15曲「からす」、若者がほとんど錯乱状態のなかで歌う第23曲「幻の太陽」、町はずれの老人についていこうとの心理を表現した終曲「辻音楽師」などがお勧めです。彼は曲を書くのが速く、気に入った詩を読むと、すぐにメロディが浮かんできたといわれています。

女優への片想いが書かせた曲

この曲の原題は、「ある芸術家の生涯の出来事」となっており、「ある芸術家が失恋による絶望からアヘンで自殺を図ったが、アヘンの量が少なくて死にきれず、その時見た幻想と夢の物語」を音楽で表現したものです。このストーリーはベルリオーズ自身の体験がもとになっているといわれています。

この曲でベルリオーズは、主題ではないひとつの旋律【譜例1】を、物語の主役である芸術家が恋した女性の「固定観念 Idée fixe (イデー・フィクス)」として扱っており、各楽章の女性が登場する場面において、さまざまな形で繰り返し登場します。この旋律の扱い方は、これまでの交響曲の「動機」、例えばベートーヴェンの交響曲第5番「運命の動機」(ダダダーン)などとは全く異なった旋律の使用法です。この「固定観念」の考え方には、後のワーグナーの音楽で「ライトモティーフ」として結実し、引き継がれていきます。

また、当時としてはめずらしい4人のティンパニ奏者、2台のハープ使用、交響曲で実際の鐘の登場など、類をみない大編成のオーケストラとその独創的な楽器用法は常識を覆すものでした。この曲がベートーヴェンの第9交響曲から3年後に作曲されたということは、驚くべきことです。

全5楽章にはそれぞれ題名が付いており、それに沿って音楽が形成されています。

第1楽章「夢、情熱」：恋人への情熱を燃やしている青年の姿が描かれています。その女性を表す「固定観念」が提示され、すべての楽章に形を変えて現れます。

第2楽章「舞踏会」：夢のなかで、芸術家は恋人の姿【譜例2】を舞踏会で見つけます。ハープの響きが華やかさを演出しています。

第3楽章「野の風景」：野原で恋人を思い深い孤独感、不安にさいなまれる青年の姿が描かれています。

第4楽章「断頭台への行進」：夢のなかで恋人を殺した青年が、ギロチンにかけられる姿が現れます。

第5楽章「魔女の夜宴の夢」：芸術家の葬儀での魔女や亡靈の饗宴が描かれ

ます。「固定観念」が形を変えて現れます【譜例3】。

譜例1 第1楽章「固定観念 (Idée fixe)」提示

Allegro agitato e appassionato assai

Fl. Vn. *p* *poco* *f*

八長調

譜例2 第2楽章「舞踏会」*Idée fixe*から導かれた舞踏会のテーマ

(Valse. Allegro non troppo)

Fl. & Ob. *p* *espr.*

へ長調に転調して3拍子に

譜例3 第5楽章「魔女の夜宴の夢」*Idée fixe*が再び拍子を変えて出てくる。

Allegro

Cl. *ppp*

ハ長調に戻り拍子も 6/8 に



ベルリオーズは、当時の管弦楽法（オーケストラの作品を書くための技法）の第一人者でした。楽器の組み合わせによって新しい音色を生み出すことに目を向け、弦楽器の弓の木の部分で弦を叩く奏法のコル・レーニョを初めて用いるなどの斬新な楽器使用法や、複数のティンバニ奏者などの大編成管弦楽法は、後進の作曲家に多大な影響を与えました。彼の著書「管弦楽法」は、後に作曲家R. シュトラウスが注釈と新たな譜例を加えて大幅に加筆し、出版しました。日本語にも翻訳されています。

ルイ・エクトル・ベルリオーズ
(Louis Hector Berlioz 1803 – 1869)



フランスのロマン派音楽の代表的な作曲家です。当時の管弦楽法の第一人者で、管弦楽法に関する著書も書いています。オーケストラの楽器の扱いに長け、色彩的なオーケストレーション（管弦楽法）によって書かれた彼の斬新な音楽は、後に続く作曲家に多大な影響を与えました。作品としては、ヴィオラ独奏つきの交響曲《イタリアのハロルド》、劇的交響曲《ロメオとジュリエット》など、伝統的な枠組みにとらわれない、大規模で自由な形式の管弦楽曲を生み出しました。

クラシック・バレエの代表作

クラシック音楽では、曲数の多さや演奏時間の長さの関係上、作曲者が曲の一部分だけを取り出して一連の曲の集まりとして再構成することがあります。これをバレエ音楽で行った場合がバレエ組曲となります。本来はバレエのために書かれた曲を、演奏会で聴かせるために、聴かせどころ、主だった曲をまとめて組曲にしたものです。バレエ作品を踊りなしで曲だけを楽しむために、コンサート形式で演奏する場合にこの組曲が演奏されます。バレエ音楽のエッセンス版に当たります。かつては舞踊組曲とも呼ばれました。

バレエの付随音楽は、作曲家がバレエ専用の音楽を作曲する場合と、既存の音楽を編曲してバレエとして用いる場合があります。現在でも前者の形式での上演は多く、作曲家がバレエ専用に作曲した音楽をオーケストラ伴奏によって演奏する形式のバレエは、音楽鑑賞としても高い人気があります。

『白鳥の湖』のあらすじ。王子ジークフリートは美しいオデット姫と恋に落ちます。オデット姫は悪魔によって昼は白鳥、夜は人間になるという魔法をかけられていましたが、この魔法を解くためには、オデット姫に永遠の愛を誓わなければなりません。それを知った王子は、オデット姫に真実の愛を誓います。しかし悪魔の魔法によってオデット姫とそっくりの女性オディールに心を奪われてしまい、王子は彼女を花嫁に選んでしまいます。騙されたことを知った王子は湖に向かいます。悲しみに打ちひしがれているオデット姫、しかし悪魔の企みに気付いた王子は、悪魔を倒し、2人で永遠の愛を手に入れるというストーリーです。

このバレエでは、オデット(白鳥)とオディール(黒鳥)は同じバレリーナが演じます。全く性格の違う2つの役の踊り分けも、この作品の見どころのひとつです。

『白鳥の湖』は、全4幕を通すと上演時間が約2時間かかります。組曲には、冒頭の情景【譜例1】や4人のバレリーナが踊る「4羽の白鳥たちの踊り」【譜例2】など、よく知られた曲がたくさん入っています。同じチャイコフスキイに

よる《眠れる森の美女》、クリスマスの頃によく演奏される《くるみ割り人形》とともに、三大バレエのひとつといわれています。

譜例1 「情景」何度も形を変えて出てくる

Andante

譜例2 「4羽の白鳥たちの踊り」

Allegro Moderato

Column

演劇が演出家によって異なるように、バレエは振付師(コリオグラファー)によって変わります。この有名な「白鳥の湖」も振付師によって踊りが少しずつ異なります。中でも大きく解釈が分かれるのが、エンディングです。よく知られているのが、「ジークフリート王子が悪魔と戦いその勝利により、白鳥の魔法が解けたオデット姫と幸せに暮らす」というハッピーエンドですが、他にも、「ジークフリート王子が悪魔と戦うが、時すでに遅く、オデット姫は王子に裏切られた事を嘆き、湖に身を投げてしまう。王子も後を追ってともに死んでしまう」という悲劇的な結末もあります。まったく違う結末ですが、このバレエの見どころは、ブリマドンナの白鳥の踊り(演技)で、純真無垢なオデットと悪魔の娘の黒鳥オディールという、正反対の性格を踊り分けることです。特に黒鳥の踊りは、32回フェット(片足での回転)などの超絶技巧として知られています。話の結末よりも、ダンサーの踊りを楽しむのが、バレエでしょうか。

現在のいわゆる「劇伴」です

付随音楽とは、演劇やテレビドラマ、ラジオドラマなどで使用するために作られた音楽です。演劇の台本、脚本や進行に合わせて作曲され、芝居を盛り上げたり、場面が変わるところで雰囲気を変えたり、さまざまな効果を作り出すために書かれます。劇中で伴う音楽という意味から、劇伴(げきばん)などと呼ばれることもあります。映画で使われる音楽は、「映画音楽」「サウンドトラック」とも呼ばれます。

また映画、テレビドラマ、テレビゲーム、アニメなどで流される音楽で、演出を効果的にするため、視聴者の関心を向けさせる目的のための音楽や、既成の音楽から選曲して、その一部分を使用する場合は、バックグラウンド・ミュージック(BGM)といわれることもあります。

付随音楽としてよく知られている例としては、シェークスピアの戯曲をもとにしたメンデルスゾーンの《真夏の夜の夢》、シューベルトの《ロザムンデ》、ビゼーの《アルルの女》などがあります。もともと劇と付随音楽を全曲通して演奏する機会は少なく、演劇とは関係なしにこれらの音楽の一部だけを演奏会で取り上げるため、作曲家は組曲としてまとめることができます。

《ペール・ギュント》は、ノルウェーの劇作家イプセンが書いた戯曲です。自由奔放なペール・ギュントが旅に出て、年老いて帰って来るまでの物語で、全5幕から成り立っています。舞台上演のために、イプセンがグリーグに依頼して付随音楽を作曲しました。後にグリーグはこの音楽のなかから4曲ずつを選び、管弦楽のための組曲を2つ作りました。

第1組曲は声楽のパートや台詞を省き、楽曲の一部を削除しています。

第1曲「朝」【譜例1】、第2曲「オーゼの死」、第3曲「アニトラの踊り」、第4曲「山の魔王の宮殿にて」で構成されています。

第2組曲は、第1曲「イングリッドの嘆き」、第2曲「アラビアの踊り」、第3曲「ペール・ギュントの帰郷」、第4曲は歌のパートを器楽に置き換えた「ソルヴェーグの歌」【譜例2】からなっています。

譜例1 第1組曲 第1曲「朝 (Morgenstimmung)」

Allegretto pastorale



譜例2 第2組曲 第4曲「ソルヴェーグの歌 (Solveigs sang)」

Un poco andante



●第1組曲

曲順	曲名	内容
第1曲	朝 (第4幕)	モロッコの砂漠の日の出とペールの爽やかな気分を表現
第2曲	オーゼの死 (第3幕)	母親オーゼの臨終の場
第3曲	アニトラの踊り (第4幕)	ペールを誘う 酋長の娘アニトラが踊る舞曲
第4曲	山の魔王の宮殿にて (第2幕)	山の魔王の娘を追って 宮殿に入ったペールの様子

●第2組曲

曲順	曲名	内容
第1曲	イングリッドの嘆き (第2幕)	ペールは隣村の娘イングリットと親しくなるが、すぐ彼女を捨ててしまう
第2曲	アラビアの踊り (第4幕)	アラビアの酋長の娘アニトラと出会う
第3曲	ペール・ギュントの帰郷 (第5幕)	帰路の途上での嵐の音楽
第4曲	ソルヴェーグの歌 (第4幕)	年老いたソルヴェーグのもとで、 ペールは息を引き取る

 Column -

19世紀後半、欧米で独立戦争や民族運動が起こるようになると、それを背景に、祖国の歴史や伝統を重視する国民主義の音楽が現れました。自作に民謡や民族舞曲を取り入れたり、国の歴史や伝説を題材としたりして、作品を書きました。これら国民楽派の作曲家には、チェコのスマタナ、ドヴォルザーク、フィンランドのシベリウス、スペインのアルベニス、グラナドスなどが挙げられます。国民楽派の作曲家が開拓した今までとは異なった音楽語法は、近代音楽にも大きな影響を残しました。

ミュージカルの発祥はウィーンから

「オペレッタ (operetta)」は、イタリア語で「小さいオペラ」を意味します。台詞と踊りのあるオーケストラ伴奏付きの芝居と考えてよいでしょう。喜歌劇ともいわれます。機知に富んだストーリーをもち、粹でお洒落な台詞回しと歌が軽快なテンポで演じられ、オペラよりも親しみやすく気軽に楽しめます。オペラは悲劇か悲しみが残るストーリーが多いのですが、それに対してオペレッタは基本的に喜劇です。娯楽的な作品が多く、明るく樂しいうちにハッピーエンドで終わるものが主流になっています。

有名なオペレッタには、J. シュトラウスⅡ世の『こうもり』や、オッフェンバッックの『天国と地獄』、カールマンの『チャルダッシュの女王』などがあります。このオペレッタがイギリスへ渡り、ミュージカルへと変貌していきます。さらにミュージカルが大西洋を渡って、アメリカはニューヨークのブロードウェイで花開くようになると、20世紀のひとつの大商業音楽劇として、ビジネスとして確立されてゆきました。

この3幕からなるオペレッタは、日本語では「陽気な未亡人」という意味です。あらすじは20世紀初めのパリの社交界を舞台に、架空の国の富豪と結婚したものの、若くして未亡人となった美貌のハンナが、昔の恋人のダニロ伯爵と再会し、初めはお互いに意地の張り合いをしていますが、やがて昔のように愛し合うようになり、最後にはめでたく結ばれるというものです。

ウィーン情緒にあふれる美しい旋律、親しみやすく誰もが口ずさみたくなるメロディがふんだんに使われています。ダニロ伯爵の歌う「メリー・ウィドウ・ワルツ」【譜例1】やハンナの「ヴィリアの歌」【譜例2】などはコンサートで単独で歌われることも多く、楽しい音楽にあふれています。

譜例1 ダニロ伯爵の歌う「メリーウィドウ・ワルツ」

Valse moderato

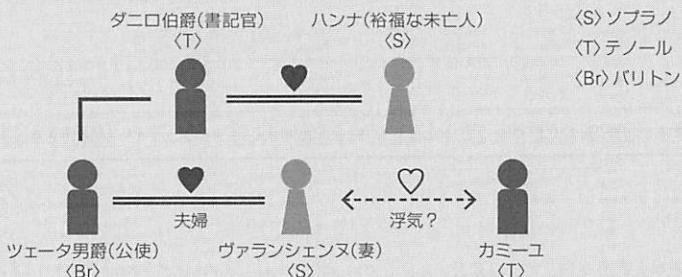


譜例2 ハンナが歌う「ヴィリアの歌」

Sehr einfach vorgetragen



相関図



Column

オペラは、もともと真面目な題材を扱うオペラ・セリア(正歌劇)から始まりました。これに対して世俗的な内容の作品を扱ったものが、オペラ・ブッファ(喜劇オペラ)といわれるものです。このオペラ・ブッファが、後にオペレッタとなりました。オペラ・ブッファを前身としているだけに、内容が必要以上にシリアスで重苦しいものになることがありません。人生の機微をセンシティブに描き出すのを身上としているのです。ドイツ圏では、オペレッタを中心に上演する歌劇場が存在します。

フランツ・レハール
(Franz Lehár 1870-1948)

オーストリア＝ハンガリー帝国で生まれたレハールは、多くのオペレッタを書き、オーストリア、ドイツを中心に活躍した作曲家です。J.シュトラウスⅡ世の亡き後、ウィーンのオペレッタを再興した立役者といえるでしょう。ワルツ《金と銀》、オペレッタ「ルクセンブルク伯爵」「ほほえみの国」など親しみやすい作品を書き、世界的成功を収めました。

宇宙をテーマにしたスケールの大きな曲

この曲は、はじめから組曲として作曲された、大オーケストラのための管弦楽組曲です。第1曲「火星」、第2曲「金星」、第3曲「水星」、第4曲「木星」、第5曲「土星」、第6曲「天王星」、第7曲「海王星」の全7曲から構成されています。

このなかで一番よく知られているのが、第4曲の「木星」すなわち「ジュピター」です。木星は、太陽系では一番大きい惑星です。このジュピターは「快楽の神」という意味で、同じ名前の曲は、モーツアルトの交響曲第41番「ジュピター」があります。ホルストの「木星」はオーケストラ編成が非常に大きく、スケールの大きな音楽は壮大なオーケストレーションによって展開されます。

穏やかな旋律【譜例1】は、歌詞を付けて歌うのに適し、日本語の詞を付けた平原綾香の歌で一躍有名になりました。その神秘的なメロディは世界中の人々に愛され、数多くの音楽家、アーティストたちにより、さまざまな歌詞やアレンジが加えられています。その後、テレビ番組やコマーシャル、ドラマなどの挿入歌として使用されたり、しばしば演奏会などで単独に取り上げられたりしています。

組曲のトップを飾る「火星」は不安定な調性のなかで一定のリズムを執拗に保ちながら不気味なムードを持って進行していきます。「ダダダ・ダン・ダン・ダダ・ダン」という4分の5拍子の力強いリズム【譜例2】から始まって、この変拍子を執拗に繰り返していきます。特徴あるこのリズムが一貫して流れる背景のもとで、性格の異なる主題が金管楽器【譜例3】によって展開されます。「戦争の神」としての火星の性格を見事に表現しています。日本では「木星」に次いでよく知られている曲です。

最後の「海王星」は、すべての楽器がピアニッシモで演奏される幻想的な曲です。舞台裏に配置された歌詞のない女声合唱が効果的に使われており、非常に美しく、名前の意味する「神秘の神」を表現しています。

譜例1 「木星」

Andante maestoso

譜例2 「火星」一貫して流れるリズム

譜例3 「火星」の主題

Allegro

(Tenor Tuba)



ホルストは、占星術から着想を得てこの組曲を作曲しました。つまり彼は、天文学者上の太陽系惑星ではなく、占星術に登場する惑星のイメージを音楽にしたのです。例えば、牡羊座の占いを見ると「牡羊座の守護星は「火星」です。火星は、古代から「戦闘の神マース (Mars)」といわれ、特に牡羊座の人に強く働きかけて、戦術や、開拓の精神を授けたのです。従って、はげしい競争、社内の派閥争い、あるいは人生上の困難に遭遇しても、つねに毅然とした態度を失わず、切り開いていく実行力……』とあり、「火星」の曲想に反映されていると思われます。パイプオルガンや2台のハープも加わる大編成のオーケストラのために書かれており、「海王星」では舞台の外に配置された歌詞の無い女声合唱が使われています。

グスターヴ・ホルスト

(Gustav Holst/Gustavus Theodore von Holst 1874 – 1934)



イギリスを代表する作曲家の一人です。管弦楽のために書かれたこの組曲《惑星》は、第一次世界大戦の時に作曲されました。作曲された当時は、まだ冥王星が発見されておらず組曲には入っていないませんが、2006年に冥王星は準惑星へ降格になったため、偶然にも現状の「惑星」の定義と一致する形に收まりました。彼は神秘的なものへの関心が強く、占星術への傾倒をきっかけにこの作品を書き大成功をおさめました。惑星の名前は、ローマ神話に登場する神々の名前にも相当するもので、「火星」から「海王星」まで7つの惑星の性格が、はっきりと描き分けられています。

オーケストラの魔術師のユニークな曲想

《ボレロ》は、ラヴェルの作品の中でも最も有名な管弦楽曲です。スペインの舞曲から名付けられました。テレビのコマーシャルや映画などでじみの深いリズム【譜例1】が、小太鼓と弦楽器低音のピツツィカートで曲は始まります。この小太鼓は全340小節のなかで338小節、つまり最後の2小節以外すべて、延々とこのリズムを刻み続けます。曲はこのリズムの流れの中でフルートのソロによって主旋律【譜例2】が演奏されます。フルートはこのメロディを終えると小太鼓と同じリズムを演奏します。その後、ファゴットのソロが別の主旋律【譜例3】を演奏します。

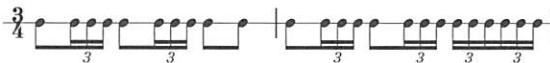
このように、主旋律がまるでオーケストラのデモンストレーションのように、ソロ楽器を次々と変えて繰り返し演奏されます。それぞれ異なった楽器により2つのメロディが奏でられ、しだいに勢いを増していき、楽器の数を増やしながら *ff* に至ります。最後に曲が初めて転調してクライマックスに達し、突然全楽器がなだれ込むような形で終わります。

2小節のリズム型を小太鼓が叩き続けるなか、2つの主題が延々と繰り返されていくだけというこの曲の構成は、驚くほど単純です。最初から最後まで大きなクレシェンドで書かれており、曲の途中でのテンポの変化、拍子の変化、デクレシェンドなどは一切ありません。ラヴェルの非凡な才能が発揮された、他には例のない曲想で書かれた作品です。この単純な構成でも、聴衆を飽きさせずに聴かせるのは至難の業といえます。それこそオーケストレーションの名人ラヴェルです。オーケストラにはめずらしくサクソフォーン属やオーボレ・ダ・モーレといった特殊な管楽器を交え、さまざまなお楽器が主題を代わるがわる演奏していくのです。これはまさにラヴェルにしか書けない奇想天外な、かつ効果的な工夫だといえるでしょう。

このように、ラヴェルが優れていたのはオーケストラの扱い方、すなわちオーケストレーションです。彼は「オーケストラの魔術師」という異名で呼ばれることがあるほど、オーケストラを上手に響かせる技術とセンスを持って

いました。「スイスの時計職人」とストラヴィンスキーに評されたラヴェルらしい緻密で精巧な作品です。

譜例1 小太鼓が一貫して演奏するボレロのリズム



譜例2 主旋律1



譜例3 主旋律2



 *Column*

この作品は、バレエダンサーのイダ・ルビンシュタインからスペイン風な音楽を作曲してほしいとの依頼で書かれ、パリ・オペラ座で初演されました。現在では、映画やCM等、さまざまな場面で使われています。20世紀バレエ団を主宰するモーリス・ベジャールによる振付で、ジョジョ・ドン(男性)が主役のソロを踊り、世界的に有名になりました。その素晴らしい踊りは、映画「愛と哀しみのボレロ」のラスト・シーンにも使われました。最近では、女性ダンサーのシルヴィ・ギエムの踊りも有名で、ジェンダーを超えたバレエ作品として現代の金字塔となっています。このように、もともとはバレエ音楽ですが、お馴染みのメロディ【譜例1】が、いろいろな楽器で演奏されるオーケストラ曲として親しまれています。

あとがき

クラシック音楽には、ひとりで演奏する曲から多人数で演奏する曲まで、実にさまざまな作品があります。

この本の特徴は、器楽からオペラまで幅広いジャンルに渡り、譜例を用いながら、名曲のスタイルを説明している点にあります。掲載されている曲数は80曲です。

音楽愛好者、音楽を始めたばかりの人を対象に、専門的すぎずに楽曲の形式を理解してもらえることを念頭に考えました。

堅苦しいイメージのあるクラシック音楽を「楽しく聴く、楽しく演奏する」にはどうしたらいいのか、と考えている人には、本書「クラシックの聴き方入門—名曲のスタイル分析 全80曲」が役立つことを願っています。

本書は、名曲が長い年月、人々をひきつけて止まない理由を音楽史や音楽理論をもとに、楽譜から解説して、そのスタイルを解き明かそうとの考え方から書き始めました。譜例だけでなく図やイラストも用い、聴くだけでなく、ビジュアルの面からも分かるようになっています。終わりに書かれている「コラム」は、その項目に関係しているものもありますが、スタイルから離れて、楽器、歴史や作曲家に関連した事項が書かれています。

曲のスタイルを説明するのに、難しく複雑だといわれる楽曲分析やアナリーゼ等の専門用語を使わずに曲の構造を説明するのには、どうしたらいいのだろうか、と考えた結果を「曲のスタイル」という言葉に表しました。クラシック音楽の楽しみ方にはいろいろありますが、演奏だけでなく、その曲の構造、背景を知ることによって、より深い興味がわき関心が高まるのではないかでしょうか。

「音楽って、こんな風に成り立っているんだ、こんな構成でできているんだ」ということを、多くの人にぜひ考えてほしいと思います。また演奏していても、実は曲のスタイル、構成はあまりよく分からない、理解できていないという方々も、ぜひお読みになって下さい。堅苦しいと思っていたクラシック音楽も、スタイルが分かれば、もっと身近に感じられるはずです。最初から読むこともありません。気がついた時、「そういうえば、あの作曲家のあの曲は、どんな風に

できているんだろう?」と思った時に、ページをめくってみてください。

西洋音楽が日本に入ってきてから100年以上たちますが、難しいといわれる作品のスタイルを理解し、その曲に関連するエピソードを知ることによって、難しいと思われるクラシック音楽を、少しでも身近に感じていただければ、著者として望外の喜びです。

はじめは100曲の作品のスタイルを考えていましたが、実際にとりかかってみると、1曲ずつ分析していくということは、思っていた以上に難しいものでした。実際の曲は、教科書の通り、楽式論の定型どおりには書かれていなからです。

結果としては、80曲という数になりましたが、大作曲家が精魂こめて書き上げた作品のそれぞれを通して、1曲1曲改めて楽譜を見ながら聴き直してみると、なぜ彼らの作品が今まで多くの人を引きつけ、演奏され、受け継がれてきたのか、分かってきたような気がしてきました。

この本は、多くの人の協力があったからこそ、ここまでまとめることができました。音楽家の友人たちの、実際に演奏してきた経験からのアイディア、ヒントを頂いたことも、大きな助けになりました。

最後になりましたが、この本の企画から構成に至るまで、膨大な時間と適切な助言を頂いたヤマハ・ミュージック・メディアの吉田厚子さん、長らく音楽編集者として音楽書籍に関わってこられた経験からの多くのアドバイスを下さった古川亨さんには、大変お世話になりました。この場をお借りして感謝申し上げます。お二人の貴重なご意見が、ともすれば専門的になりすぎる本書の軌道修正になりました。

また、素晴らしいお言葉を寄せてくださいました作曲家の池辺晋一郎さんに心からお礼を申し上げます。

2010年春

舟橋三十子

作品名

【歌】

- 24のカプリース(奇想曲)(バガニーニ) ————— 56, 57
 24の奇想曲(バガニーニ) ————— 148, 149
 24の前奏曲集(ショパン) ————— 24
 2段鍵盤付きクラヴィッヂエンパロのための
 アリアと種々の変奏(J. S. バッハ) ————— 44
 2つのアラベスク(ドビュッシー) ————— 40
 2つの伝説(リスト) ————— 153
 2つのラブソディー(ブラームス) ————— 145, 154
 3つのフルツ(ショパン) ————— 30
 5つのルシャン(メシャン) ————— 169
 8つのユーモレスク(ドヴォルザーク) ————— 95
【アーリアベット】
 線上のアリア(J. S. バッハ) ————— 146
【恋】
 ああ、そはかのひとか(ヴェルディ) ————— 130, 131
 アイ・ゴット・ア・リズム(ガーシュウィン) ————— 167
 アイネ・クライネ・ナハト・ムジーク(モーツアルト) ————— 158, 169
 愛の挨拶(エルガー) ————— 38
 アヴェ・ヴェルム・コルプレス(モーツアルト) ————— 175
 アヴェ・マリア(ショーベルト) ————— 53
 アニユス・ティ(神の子羊)(ヴェルディ) ————— 142, 143
 アランフェス協奏曲(ロドリゴ) ————— 169
 アルヴァマー序曲(バーンズ) ————— 169
 アルト・ラプソディ(ブラームス) ————— 154
 ある晴れた日に(ブッチーニ) ————— 132
 アルベッジョ(リスト) ————— 148
 アルメニアの風景(アルチュニアン) ————— 169
 アルメニアン・ダンス(パート1・パート2)(リード) ————— 169
 アルルの女(ビゼー) ————— 182
 アルルの女組曲(第1番、第2番)(ビゼー) ————— 168
 アレルヤ(モーツアルト) ————— 174
 アンナ・マグダーラー(バッハ)のための
 音楽帖(J. S. バッハ) ————— 20, 21
 アンエン・ボルカ(J. シュトラウスⅡ世) ————— 32, 33
 家路 ————— 94
 異教徒の踊り(ショルティーノ) ————— 169
 行け、我が想いよ、黄金の翼に乗って(ヴェルディ) ————— 129
 イタリア奇想曲(チャイコフスキ) ————— 144, 148
 糸を紡ぐグレートヒエン(ショーベルト) ————— 53
 威風堂々(エルガー) ————— 39
 威風堂々 第1番(エルガー) ————— 162
 ヴァイオリン・ソナタ第3番(ブラームス) ————— 108, 109
 ヴァイオリン協奏曲(ヴィエニヤフスキ) ————— 169
 ヴァイオリン協奏曲(グリーン) ————— 169
 ヴァイオリン協奏曲(グラスノフ) ————— 169
 ヴァイオリン協奏曲(ショスタコヴィチ) ————— 169
 ヴァイオリン協奏曲(バルトーク) ————— 169
 ヴァイオリン協奏曲(ブルッフ) ————— 169
 ヴァイオリン協奏曲(メンデルスゾーン) ————— 88, 89
 ヴァイオリン協奏曲 二短調(シベリウス) ————— 78, 79

- ヴァイオリン協奏曲集(和声と創意の試み)(ヴィヴァルディ) ————— 170
 ヴィーン奇想曲(クライスラー) ————— 144, 148
 ヴィリアの歌(レハール) ————— 184, 185
 美しき水車小屋の娘(ショーベルト) ————— 176
 美しく胥きドナウ(J. シュトラウス) ————— 14, 15
 海(ドビュッシー) ————— 144
 運命(交響曲第5番「運命」)(ベートーヴェン) ————— 8
 英雄の生涯(R. シュトラウス) ————— 144
 エステ荘の噴水(リスト) ————— 153
 越後獅子 ————— 132
 エニグマ(謎)変奏曲(エルガー) ————— 39
 エリーゼのために(ベートーヴェン) ————— 66, 67
 王宮の花火の音楽(ヘンデル) ————— 141
 お江戸日本橋 ————— 132
 オペレッタ「ほほえみの国」(レハール) ————— 185
 オペレッタ「メリ・ウィドウ」(レハール) ————— 184
 オペレッタ「ルクセンブルク伯爵」(レハール) ————— 185
 女の愛と生涯(シューマン) ————— 71
【恋】
 凱旋行進曲(ヴェルディ) ————— 145
 かえるの歌 ————— 112
 歌曲《ます》(ショーベルト) ————— 52, 53
 革命(ショパン) ————— 31
 歌劇「アルジェのイタリア女」(ロッシーニ) ————— 151
 歌劇「イル・トロヴァトーレ」(ヴェルディ) ————— 129
 歌劇「ウイリアム・テル」序曲(ロッシーニ) ————— 150, 151
 歌劇「死られた花嫁」序曲(スマーナ) ————— 150
 歌劇「軽騎兵」序曲(スッペ) ————— 150
 歌劇「詩人と魔女」序曲(スッペ) ————— 150
 歌劇「西部の娘」(ブッチーニ) ————— 133
 歌劇「セヴィリアの理髪師」(ロッシーニ) ————— 126
 歌劇「セヴィリアの理髪師」序曲(ロッシーニ) ————— 151
 歌劇「蝶々夫人」(ブッチーニ) ————— 132, 133
 歌劇「姫姫」(ヴェルディ) ————— 130
 歌劇「トゥーランドット」(ブッチーニ) ————— 133
 歌劇「トルスカ」(ブッチーニ) ————— 132
 歌劇「ナブッコ」(ヴェルディ) ————— 129
 歌劇「フィガロの結婚」(モーツアルト) ————— 126, 127
 歌劇「ボーギーとベス」(ガーシュウィン) ————— 167
 歌劇「魔弾の射手」(ウェーバー) ————— 128
 歌劇「レスランとリュドミラ」序曲(グリンカ) ————— 150
 歌劇「ローエンリング」(ワーグナー) ————— 129
 鐵治屋の合図(ヴェルディ) ————— 129
 楽興のとき(ショーベルト) ————— 67
 かっこう(ダカン) ————— 62, 63
 カノン(バッヘルベル) ————— 114
 狩り(リスト) ————— 148
 狩人の合唱(モーツアルト) ————— 128, 129
 カルミナ・ブランナ(オルフ) ————— 134, 169
 カルメン組曲(ビゼー) ————— 168
 翠聴なる大円舞曲(ショパン) ————— 31
 歌喜の歌(ベートーヴェン) ————— 85
 管弦楽組曲(J. S. バッハ) ————— 146
 管弦楽組曲第3番(J. S. バッハ) ————— 146, 147

カンタータ第147番「心と口と行いと生活で」(J. S. バッハ)	—138
カンタータ第140番「目覚めよと呼ぶ声あり」(J. S. バッハ)	—139
カンタータ第147番「心と口と行いと生活で」(J. S. バッハ)	—139
カンタータ第156番「足は墓穴にありて私は立つ」(J. S. バッハ)	—139
乾杯の歌(ヴェルディ)	—130
キージエ中尉(プロコフィエフ)	—145
寄港地(イベール)	—145
ギター協奏曲(ロドリゴ)	—169
君が代(日本国歌)	—163
狂詩曲スペイン(シャブリエ)	—154
キラキラ星の主題による12の変奏曲(モーツアルト)	—48, 49
組曲(感想)(ホルスト)	—186, 187
クラヴィスレリアーナ(シューマン)	—71
クラヴサン組曲集(クーフラン)	—168
クラリネット協奏曲(モーツアルト)	—65
クラリネット五重奏曲(モーツアルト)	—65
くるみ割り人形(チャイコフスキ)	—181
グレゴリオ聖歌	—56, 57
グレの歌(シェーンベルク)	—169
軍隊行進曲(シューベルト)	—145, 162
劇的交響曲「ロメオとジュリエット」(ベルリオーズ)	—179
結婚行進曲(メンデルスゾーン)	—145
弦楽四重奏曲第77番「皇帝」(ハイドン)	—84, 85
弦楽四重奏曲第7番「ベートーヴェン」	—169
弦楽セレナーデ(チャイコフスキ)	—158, 159
幻想曲(シューマン)	—71
幻想交響曲(ベルリオーズ)	—145, 178, 179
幻想小曲集(シューマン)	—70, 71
恋とはどんなものかしら(モーツアルト)	—126, 127
小犬のフルツ(ショパン)	—30
後宮からの誘拐(モーツアルト)	—104, 127, 128
交響曲「イタリアのハロルド」(ベルリオーズ)	—179
交響曲「大地の歌」(マーラー)	—97
交響曲第1番「巨人」(マーラー)	—96, 97
交響曲第2番「復活」(マーラー)	—97
交響曲第31番「バリ」(モーツアルト)	—105
交響曲第35番「ハフナー」(モーツアルト)	—104, 105
交響曲第38番「ブラハ」(モーツアルト)	—105
交響曲第3番「英雄」(ベートーヴェン)	—86, 87
交響曲第3番「オルガン付き」(サン=サーンス)	—75
交響曲第40番(モーツアルト)	—10, 11
交響曲第41番「ジュピター」(モーツアルト)	—186
交響曲第5番「運命」(ベートーヴェン)	—8, 9, 87, 178
交響曲第6番「悲愴」(チャイコフスキ)	—92, 93
交響曲第7番(ベートーヴェン)	—86, 87
交響曲第8番「千人の交響曲」(マーラー)	—97
交響曲第96番「驚愕」(ハイドン)	—82, 83
交響曲第9番(ベートーヴェン)	—85, 87, 178
交響曲第9番「新世界より」(ドヴォルザーク)	—94, 95
交響組曲(シェエラザード)(リムスキー=コルサコフ)	—160, 161
交響詩(海)(ドビュッシー)	—152
交響詩「英雄の生涯」(R. シュトラウス)	—152
交響詩「死の舞踏」(サン=サーンス)	—75, 156
交響詩「中央アジアの草原にて」(ボロディン)	—152
交響詩「ツアラトゥストラはかく語りき」(R. シュトラウス)	—152
交響詩「ドン・ファン」(R. シュトラウス)	—152
交響詩「禿山の一夜」(ムソルグ斯基)	—152
交響詩「魔法使いの弟子」(テュカス)	—152
交響詩「レ・プレリュード」(リスト)	—152
交響詩「ローマの噴水」(レスピーギ)	—152
交響詩「ローマの松」(レスピーギ)	—152
交響詩「ローマの祭」(レスピーギ)	—152
交響詩「我が祖国」(スマタナ)	—152
交響的舞曲(ラフマニノフ)	—145
交響的変容(フランク)	—145
交響的物語「ビーターと狼」(プロコフィエフ)	—164, 165
皇帝賛歌(ハイドン)	—84
こうもり(J. シュトラウスⅡ世)	—184
コジ・ファン・トゥッテ(モーツアルト)	—127
黒鍵 ショパン	—31
ゴッド・セイヴ・ザ・キング(イギリス国歌)	—85
子供の遊び(ビゼー)	—36
子供の情景(シューマン)	—28, 29, 36, 67, 71
子供の頃(ドビュッシー)	—36
古風なメヌエット(ラヴェル)	—99
ゴルトベルク変奏曲(J. S. バッハ)	—44, 45
婚礼の合唱(ワーグナー)	—129
芭	
さくらさくら	—132
さすらい人幻想曲(シューベルト)	—53
ささうら若人の歌(マーラー)	—96
ジ・エンターテイナー(ジョプリン)	—145
四季 ヴィヴァルディ	—170
詩人の恋(シューマン)	—71
死と乙女(シューベルト)	—53
シャコンヌ(J. S. バッハ)	—46, 47
主よ、人の望みの喜びよ(J. S. バッハ)	—138, 139
巡礼の年(リスト)	—153
小組曲(ドビュッシー)	—36
小フーガ ト短調(J. S. バッハ)	—116
小ロシア(チャイコフスキ)	—93
序曲 1812年(チャイコフスキ)	—144
序奏とロンド・カプリチオーソ(サン=サーンス)	—74, 75
水上の音楽(ヘンデル)	—141
吹奏楽のための第1組曲・第2組曲(ホルスト)	—169
スター・バト・マーテル(ロッシーニ)	—169
スペイン奇想曲(リムスキー=コルサコフ)	—144, 148
スペイン狂詩曲(ラヴェル)	—145, 154
スペイン交響曲(ラロ)	—72, 73
スラヴ狂詩曲(ドヴォルザーク)	—154
スラブ舞曲(ドヴォルザーク)	—95
スワニー(ガーシュウィン)	—167
星条旗よ永遠なれ(アメリカ国歌)	—85, 162, 169
青少年のための弦楽入門(ブリテン)	—164
セレナーデ第7番(モーツアルト)	—104
荘厳ミサ曲(ベートーヴェン)	—134
双頭の鷲の旗の下に(J. F. ワーグナー)	—162
即興曲(シューベルト)	—67

ソナタ ホ長調 (D. スカルラッティ)	18, 19
ソナチネ (ラヴェル)	98, 99
■ 大作	
大作祝典序曲 (ブラームス)	144
大峡谷 (グローフェ)	166
チエンバロ協奏曲 (J. S. バッハ)	139
チャルダッシュの女王 (カールマン)	184
蝶々 (ショパン)	31
ツアラトゥストラはかく語りき (R. シュトラウス)	144
ツィゴイネル・ワイゼン (サラサーテ)	74
テ・デウム (ブルックナー)	169
ディアベッリの主題による32の変奏曲 (ベートーヴェン)	50, 51
ディエス・イレ (惑りの日) (ヴェルディ)	56, 57, 142, 143
ティル・オインシュピーゲルの愉快ないたずら (R. シュトラウス)	76
天国と地獄 (オッフェンバック)	156, 184
天地創造 (ハイドン)	134
展览会の船 (ムソルグ斯基)	12, 13, 145
ドイツ・レクイエム (ブラームス)	134
動物の虐肉祭 (サン=サンス)	75, 156
トッカータとフーガニ短調 (J. S. バッハ)	118, 119
ドラゴンクエスト (すぎやまこういち)	145
ドリーの庭 (フォーレ)	36, 37
トルコ行進曲 (ベートーヴェン)	162
トレモロ (リスト)	148
トロイメライ (シューマン)	28, 29
ドン・ジョヴァンニ (モーツアルト)	50
ドン・ファン (R. シュトラウス)	144
■ 音楽	
亡き女王のためのパヴァース (ラヴェル)	99
眠れる森の美女 (チャイコフスキイ)	180
ノートルダム・ミサ曲 (ギヨーム・ド・マシヨ)	135
ノクターン 堕八短調 (ショパン)	31
ノクターン 変ホ長調 (ショパン)	31
野ばら (シューベルト)	22, 23
野ばら (ハインリッヒ・ウェルナー)	22
■ 楽器	
ハープシコード組曲 (ヘンデル)	122
ハイドンの主題による変奏曲 (ブラームス)	122
バガテル (ベートーヴェン)	67
バガニーニによる大練習曲 (リスト)	54
バガニーニによる大練習曲集 (リスト)	148
バガニーニの主題による狂詩曲 (ラマニノフ)	56, 57, 148
バガニーニの主題による変奏曲 (ブラームス)	122, 148
白鳥の歌 (ショベルト)	176
白鳥の湖 (チャイコフスキイ)	180
花から花へ (ヴェルディ)	130, 131
ハフナー・セレナーデ (モーツアルト)	104, 158
バリのアメリカ人 (ガーシュウィン)	167
バリを離れて (ヴェルディ)	131
春 (ドビュッシー)	145
バルティータ第2番 (J. S. バッハ)	60, 61
春の信仰 (シューベルト)	53
ハレルヤコーラス (ヘンデル)	140
ハンガリー狂詩曲 (リスト)	154
ハンガリー舞曲第5番 (ブラームス)	34, 35
ピアノ・ソナタ第14番「月光」(ベートーヴェン)	107
ピアノ・ソナタ第15番「田園」(ベートーヴェン)	107
ピアノ・ソナタ第17番「テンペスト」(ベートーヴェン)	107
ピアノ・ソナタ第23番「熱情」(ベートーヴェン)	107
ピアノ・ソナタ第26番「告別」(ベートーヴェン)	107
ピアノ・ソナタ第29番「ハンマークラヴィア」 (ベートーヴェン)	107
ピアノ・ソナタ第8番「悲愴」(ベートーヴェン)	106, 107
ピアノ協奏曲 (ショスタコヴィチ)	169
ピアノ協奏曲 (バルトーク)	169
ピアノ協奏曲イ短調 (シューマン)	90, 91, 110
ピアノ協奏曲イ短調 (グリーグ)	110, 111
ピアノ協奏曲第20番 (モーツアルト)	102, 103
ピアノ協奏曲第2番 (ラフマニノフ)	57
ピアノ組曲 (ドリー) (フォーレ)	36, 37
ピアノ五重奏曲 (ます) (シューベルト)	52, 53
ピアノ五重奏曲変ホ長調 (シューマン)	120, 121
ピアノ三重奏曲 (ラヴェル)	169
ピーターと狼 (プロコフィエフ)	145
飛翔 (シューマン)	70, 71
ファウストの効頃 (ベルリオーズ)	145, 156
フィンランディア (セベリウス)	79
舞踏への勧誘 (ウェーバー)	68
冬の旅 (シューベルト)	176, 177
冬の日の幻想 (チャイコフスキイ)	93
プランデンブルク協奏曲 (J. S. バッハ)	146
プランデンブルク協奏曲第5番 (J. S. バッハ)	172, 173
フルートとハープのための協奏曲 (モーツアルト)	64, 65
プロヴァンスの海と陸 (ヴェルディ)	131
プロムナード (『展览会の船』より) (ムソルグ斯基)	12, 13
平均律クラヴィア曲集 (J. S. バッハ)	61
ペール・ギュント (グリーグ)	182, 183
ベーベルの主題による変奏曲とフーガ (ブラームス)	122, 123
ボーランド (チャイコフスキイ)	93
ボレロ (ラヴェル)	188
■ 芸術	
マ・メール・ロワ (ラヴェル)	36
魔王 (シューベルト)	53
マタイ受難曲 (J. S. バッハ)	89, 136, 137, 141
魔笛 (モーツアルト)	127, 128, 129
眞夏の夜の夢 (メンデルスゾーン)	182
魔法使いの弟子 (ムソルグ斯基)	145
ミサ曲八短調 (モーツアルト)	175
ミルテの花 (シューマン)	71
ムーンライト・セレナーデ (グレン・ミラー)	145
無呂歌 (メンデルスゾーン)	67
無伴奏ヴァイオリン・バルティータ第2番 (J. S. バッハ)	46, 47
無伴奏ヴァイオリンのためのソナタとバルティータ (J. S. バッハ)	46
メサイア (ヘンデル)	140, 141
メヌエット (J. S. バッハ)	20, 21
メリー・ウイドウ・ワルツ (レハール)	184, 185

もう飛ぶまいぞ、この蝶々（モーツアルト）	126, 127
燃える心を（ヴェルディ）	131
木管五重奏曲（ニールセン）	169
モテット「踊れ、喜べ、汝幸いなる魂よ」（モーツアルト）	174, 175
森の歌（ショスタコーヴィチ）	169
モルダウ（ブルタバ）（スマタナ）	152
■洋	
豪邁なセレナード（チャイコフスキイ）	159
ユーモレスク（ドヴォルザーク）	95
妖精の踊り（ベルリオーズ）	156
ヨハネ受難曲（J. S. バッハ）	136, 141
■古	
ラ・カンパネラ（リスト）	54, 55
ラ・マルセイエーズ（フランス国歌）	85
ラクリモーザ（涙の日）（ヴェルディ）	142, 143
ラコツツイ行進曲（ベルリオーズ）	145
ラズモフスキイ第1番（ベートーヴェン）	169
ラバーズ・コンチェルト（ランドリ）	20, 21
ラブソディー・イン・ブルー（ガーシュウィン）	166, 167
リベラ・メ（我を救い給え）（ヴェルディ）	142
ルーマニア狂詩曲（エヌスク）	154
レクイエム（ヴェルディ）	142
レクイエムニ短調（モーツアルト）	175
ロザムンデ（シューベルト）	182
ロンド（J. S. バッハ）	60, 61
■古	
我が祖国（スマタナ）	144
別れの曲（ショパン）	31
別れのワルツ（ショパン）	31
ワシントン・ポスト（スーザ）	162, 169
フルツ《金と銀》（レハール）	185
人名	
■古	
アルチュニアン	169
アルベニス	183
アントン・シュタードラー	65
イプセン	182
イベール	145
ヴィヴァルディ	102, 170, 171, 172
ヴィエニヤフスキ	169
ウェーバー	68, 128
ヴェルディ	129, 130, 131, 133, 135, 142, 143, 145
ヴュータン	169
エヌスク	154
エルガー	38, 39, 158, 162, 163
オッフェンバック	156, 184
オルフ	134
■外	
ガーシュウィン	166, 167
カールマン	184
キュイ	12, 161
ギヨーム・ド・マショ	135
クーブラン	116, 168
クライスラー	95, 144, 148
グラズノフ	169, 183
グリーグ	110, 111, 182
クリスティアン・ペツォルト	20
グリンカ	150
グレン・ミラー	145
グローフェ	166
ゲーテ	22
ケルビニー	135, 142
■古	
サラサーテ	74
サリエリ	51
サン=サーンス	74, 75, 156, 157
シェークスピア	124, 162
シェーンベルク	169
シベリウス	78, 79, 183
シャプリエ	154
シューベルト	22, 52, 53, 67, 145, 162, 176, 177, 182
シューマン	36, 67
シューマン、クララ	29, 71, 90, 91, 120
シューマン、ローベルト・アレクサンダー	28, 29, 70, 71, 90, 91, 109, 110, 120, 121
シュトラウス、エドワルト	14, 32
シュトラウス、ヨーゼフ	14, 32
シュトラウス、ヨハン	14, 15
シュトラウス、ヨハン（Ⅱ世）	32, 33, 184, 185
シュトラウス、ヨハン（Ⅰ世）	32
シュトラウス、リヒャルト	76, 77, 144, 145, 152, 179
ジョスカン・デ・フレ	134
ショスタコーヴィチ	169
ショパン	24, 25, 30, 31, 121, 154
ジョプリン、スコット	145
ショルティーノ	169
シラー、フリードリヒ	150
スーカー	158
スーザ	162, 169
スカルラッティ	116
スカルラッティ、アレッサンドロ	19
スカルラッティ、ドメニコ	18, 19
すぎやまこういち	145
スッペ	150
ストコフスキ、レオポルド	117, 118
ストラヴィン斯基	189
スマタナ	144, 150, 152, 183
■外	
ダカン	62, 63
チャイコフスキイ	57, 88, 92, 93, 144, 148, 158, 159, 180, 181
ティアベッリ	50
デュカス	145, 152
ドヴォルザーク	94, 95, 135, 142, 154, 158, 183

ドビュッシー	36, 40, 41, 99, 144, 145, 152
■作曲家	
ニールセン	169
■作曲家	
バーンズ	169
ハイドン	10, 18, 51, 82, 83, 84, 85, 102, 122, 134
ハイニンリッヒ・ウェルナー	22
バガニーニ	54, 56, 122, 148, 149
バッハ、アンナ・マグダレーナ	20
バッハ、エマヌエル	20
バッハ、フリーデマン	20
バッハ、ヨハン・ゼバスティアン	19, 20, 21, 44, 45, 46, 47, 60, 61, 89, 102, 115, 116, 117, 118, 119, 122, 134, 136, 137, 138, 139, 140, 146, 147, 172, 173
バッヘルベル	114, 115
バラキレフ	12, 161
バルトロー	169
バレストリーナ	134, 142
ビゼー	36, 168, 182
フォーレ	36, 37
フォーレー	135, 142
ブゾニー	46, 47
ブッchner	132, 133
ブームス	21, 34, 35, 56, 88, 108, 109, 122, 123, 134, 135, 138, 144, 148, 154
フランク	145
ブリテン	164
ブルックナー	135, 142, 169
ブルッフ	169
プロコフィエフ	138, 145, 164, 165
ベートーヴェン	8, 9, 10, 18, 20, 21, 43, 50, 51, 61, 66, 67, 85, 86, 87, 106, 107, 128, 134, 138, 162, 169, 178
ペルリオーズ	68, 135, 142, 145, 156, 178, 179
ヘンデル	19, 102, 116, 122, 123, 135, 140, 141
ボーマルシェ	126
ホルスト	169, 186, 187
ボロディン	12, 152, 161
■作曲家	
マーラー	96, 97, 109
マスネ	37
ミュラー、ヴィルヘルム	176
ムソルグスキ	12, 13, 145, 152, 161, 169
メシャン	169
メンデルスゾーン	67, 88, 89, 136, 145, 182
モーツアルト、沃尔夫冈·阿马德乌斯	
10, 11, 18, 20, 48, 49, 50, 51, 64, 65, 69, 102, 103, 104, 105, 126, 127, 128, 135, 142, 158, 162, 169, 174, 175, 186	
モーツアルト、レオポルト	11, 103
■作曲家	
ラヴェル	12, 36, 37, 98, 99, 145, 154, 169, 188
ラフマニノフ	56, 57, 145, 148
ラロ	72, 73
リード	169

リスト	47, 53, 54, 55, 56, 110, 123, 148, 149, 152, 153, 154, 155
リムスキイ=コルサコフ	12, 57, 144, 148, 160, 161
ルトスワフスキ	56
レスピーギ	152
レハール	184, 185
ロッシーニ	126, 150, 151, 169
ロドリゴ	169
■作曲家	
ワーグナー	55, 69, 109, 122, 123, 129, 131
ワーグナー、ヨーゼフ・フランツ	162

項目

■作曲家	
アウフタクト(=弱起)	8, 66
足鍵盤	116
アリア	122, 126, 127, 130, 132, 136, 138, 146, 174
アルス・ノヴァ	135
アルベッジョ	74, 75
アルマンド	60, 146
イタリア・オペラ	131, 133
イングリッシュ・ホルン	94
印象主義	41
ヴァイオリン	147
ヴァイオリン・ソナタ	108, 109
ヴァイオリン協奏曲	170
ワイン古典派	18
ワイン・ワルツ	14, 32, 33
エア	122, 146
映画音楽	182
エピソード	58, 59
応答	112
オーケストラ・ピット	124
オーケストラ曲	168
オーケストラの魔術師	188
オーケストレーション	179, 188
オーボエ・ダ・モーレ	188
オブリガート	117
オペラ	69, 83, 124, 126, 128, 129, 130, 132, 135, 141, 144, 150, 168, 171, 174
オペラ・セリア	185
オペラ・バッファ	185
オペレッタ	15, 168, 184, 185
オラトリオ	83, 134, 135, 140, 141, 171
オルガン曲	118
音楽の父	21, 141
音楽の母	141
■作曲家	
カヴァティーナ	130, 131
ガヴォット	60, 146
歌曲	97, 168

歌曲王	23
拡大	113, 122
確保	82
歌劇場(オペラ・ハウス)	124
合唱	128, 129, 138
合唱曲	129, 168
カデンツア	65, 88, 102
カノン	112, 113, 114, 168
カバレッタ	130, 131
カブリース(=奇想曲)	56, 148
カブリーチョ	148
カブリオーン	74
カブリッチョ(=カブリース)	60, 148
カンカン	156
管弦楽曲	188
管弦楽組曲	144, 186
管弦楽の魔術師	12, 99
管弦楽法	179
間奏曲	168
カンタータ	134, 135, 138, 139
器楽曲	168
喜歌劇	184
喜劇オペラ	185
奇想曲	56, 144, 148, 168
逆行	113
キャラクター・ピース	67
喜遊曲	158
教会音楽	134
教会カンタータ	135, 138
狂詩曲	56, 144, 154
協奏曲	59, 64, 65, 72, 75, 88, 100, 102, 168, 169, 170, 171
近親調	22
近代組曲	146
空虚5度	98
クーラント	60, 146
クプレ	59
組曲	20, 36, 144, 146, 168, 180, 186
クラヴィコード	61
クラヴィエンバロ	44, 45
クラヴサン	18, 62, 63
クラシック音楽	168
グランド・オペラ	150
グリッサンド	166
グレゴリオ聖歌	56, 134
劇伴	182
弦楽四重奏	83, 84, 100, 120
減七の和音	118, 119
幻想曲	168
交響曲	10, 20, 59, 75, 82, 83, 87, 92, 94, 95, 96, 97, 100, 104, 152, 168
交響曲の父	83
交響組曲	145, 160
交響詩	76, 144, 152
交響的物語	145, 164, 165
行進曲	50, 145, 162
コーダ(Coda)	32
コール・アングレ	94
五音音階	132
国民楽派	111
国民主義の音楽	183
国歌	163
固定観念	178, 179
古典組曲	146
古典派	10, 18, 24, 43, 75, 83, 92, 100, 102, 104, 142, 158, 170
コラール	92, 106, 108, 134, 135, 136, 137, 138, 139
コラール前奏曲	115
コル・レニヨ	179
コロラトゥーラ	174
コンピューター音楽	168
再現(部)	— 38, 40, 81, 82, 86, 88, 90, 92, 94, 96, 106, 110
さ	
サウンドトラック	182
サクソフォーン	188
小夜曲	158
サラバンド	46, 60, 146
三大B	35
賛美歌	135, 136
3部形式	26, 27, 28, 40, 46, 162, 168
ジグ	60, 146
死者のためのミサ曲	142
室内楽	75, 95, 171
室内楽曲	168, 169
ジブシー音階	154, 155
ジブシー音楽	155
シャコンヌ	46, 146
弱起	8
ジャポニスム(日本趣味)	132
宗教音楽	134, 171
宗教曲	168, 174
終結部	32
重唱	126
シューベルティアーデ	53
主音	22
縮小	113
主題	6, 7, 10, 14, 15, 18, 44, 56, 58, 59, 80, 81, 112, 113
受難曲	134, 136
主和音	24, 25
小楽節	6, 7, 16
小ロンド形式	58, 59, 60, 62, 66
序曲	127, 128, 144, 150
叙唱	126
ジングル・ショピール	128
シンコペーション	36, 108
シンバル	94
シンフォニック・ジャズ	166

推移	82	動機	6, 7, 8, 9, 10, 12, 13, 14, 18, 22, 62, 178
スイスの時計職人	99, 189	トゥッティ (tutti)	32, 92, 94
吹奏楽	169	独奏協奏曲	170
スクエルツォ	168	独奏曲	100
ストレッタ	113	トッカータ	118, 119
声楽曲	168, 169	トリオ	162, 163
性格変奏	43, 50	トリオ (Trio)	32, 33
正歌劇	185	トレモロ	14
世俗カンタータ	135, 138		
絶対音楽	123, 145, 156	■な	
セレナーデ	145, 158	ナポリ楽派	174
全終止	22	二重唱	138
前奏曲	118, 144, 168	二重フーガ	120
旋法	41	2部形式	16, 17, 18, 168
装飾変奏	43	ネウマ譜	134
葬送行進曲	87	ノートル・ダム楽派	135
插入句	59	ノクターン	168
属音	22		
属調	19	■は	
属調	22	ハープシコード	18, 62
属和音	24	ハーモニクス	96
即興曲	168	バイオルガル	116, 117, 119
ソナタ	18, 19, 20, 46, 59, 75, 80, 92, 98, 109, 171	バガテル	168
ソナタ形式	80, 81, 83, 90, 98, 100, 101, 104, 106, 120, 121, 168	バックグラウンド・ミュージック	182
ソナチネ	98	バッサカリア	146
■た		ハバネラ	72, 73
第1主題	10, 80, 81	バラード	168
第2主題	80, 81	バリティア	46, 60
対位法	106, 107	バレエ	144, 168
大楽節	6, 7, 16	バレエ音楽	180, 189
対旋律	112, 116, 117	バレエ組曲	180
大バッハ	21	バロック音楽	141
大ロンド形式	58, 59, 70, 71	バロック協奏曲形式	172
多楽章形式	18	バロック時代	20, 43, 102, 140, 144
短音階	41	逆行	122
単純ロンド形式	58	逆行形	56
チェンバロ	18, 44, 45, 61, 62, 126	バンジョー	166, 167
チェンバロ協奏曲	172	ピアノ五重奏曲	120
チャルダッシュ	154, 155	ピアノの詩人	25
中間部	26, 162	ピアノの魔術師	55, 154
長音階	41	BGM	182
ディヴェルティメント	158, 168	ピッツィカート	32, 92
低音変奏	43	標題音楽	123, 145, 156
提示部	80, 82, 84	ファンファーレ	94, 96
テーマ	6	フーガ	44, 61, 112, 113, 115, 116, 118, 119, 120, 121, 122, 123, 144, 168
転回	113	ブレ	146
展開部	81, 82, 84, 86, 88, 90, 92, 94, 96, 98, 102	フガート	120
電子音楽	168	不協和音	118
転調	36	舞曲	78, 110, 144, 146, 158, 173, 188
典礼音楽	134	複合2部形式	16, 17, 26, 27, 32, 34, 162
ドイツ・オペラ	128	複合ロンド形式	58
ドイツ・ロマン派オペラ	128	複縦線	30
ドイツ三大B	21	副主題	7, 59, 90
		付隨音楽	182
		舞台音楽	168

舟歌	168
部分動機	6, 7
舞踏組曲	180
フランク風序曲	96
フリスカ	44
フレリュード	154, 155
分散和音 (=アルベッジョ)	60, 144
分散和音	62, 88, 102
変奏	42, 43, 46, 50, 52, 56, 57, 122, 123
変奏曲	42, 43, 44, 46, 50, 52, 54, 56, 84, 122
変奏曲形式	42, 168
変拍子	12, 13
変拍子	186
変容	152, 153
北欧のショパン	111
ポピュラー音楽	168
ボリフォニー	112
ボリリズム	40
ボルカ	14, 15, 145
■ ま	
マーチ	145, 162, 168
ミサ曲	134, 135, 143, 174
ミュージカル	184
民族音楽	168
無言歌	168
メタモルフォーゼ	152
メヌエット	20, 50, 60, 146
モティーフ (=動機)	6, 10, 62
モテット	135, 174
模倣	62, 78, 112, 113, 135
■ や	
ヨナ抜き音階	12, 13
■ ら	
ライトモティーフ	178
ラグタイム	145
ラッサン	154, 155
ラブソディー	144, 154
律旋法	163
リトルネット形式	172
リリック・ソプラノ	174
輪唱	112
輪舞	58
ルネサンス	174
ルフラン	59
レクイエム	135, 142, 143
レチタティーヴォ	126, 127, 136, 138
連作歌曲	96, 176
練習曲	54, 168
連弾	34, 36
レントラー	15
ロシア5人組	161
ロシア国民音楽	161
ロシア五人組	12
ロンド	60, 72, 74, 107, 174
ロンド・ソナタ形式	100, 101, 106, 110, 168
ロンド形式	58, 59, 68, 74, 76, 78, 100, 101, 104, 168
■ わ	
和音の解決	24
和声	98
和声 (法)	24, 25, 36, 41
ワルツ	14, 15, 30, 50, 68, 158, 168
ワルツ王	15, 32, 33
ワルツの父	15

【参考文献】

- 「ニューグローブ音楽辞典」
- 『新編 音楽中辞典』音楽之友社
- 『燃えるクラシックこの100曲』インプレス
- 『もう一度学びたいクラシック』西東社
- 『3日でわかるクラシック音楽』ダイヤモンド社
- 『クラシック音楽作品名辞典』三省堂
- 『作曲家別名曲解説ライブラリー』音楽之友社
- 『(新編)世界大音楽全集』音楽之友社
- 『最新名曲解説全集』音楽之友社
- 『音楽史大図鑑』音楽之友社
- 『あらすじで読む名作オペラ5』世界文化社
- 『クラシックの名曲解剖』ナツメ社
- 『エピソードでつづる初めてのクラシック音楽』ダイヤモンド社
- 『オペラの名作』ナツメ社
- 『和声のしくみ・楽曲のしくみ』音楽之友社
- 『楽式論』音楽之友社
- 『音楽理論の基礎』財団法人放送大学教育振興会
- 『新総合音楽講座4楽式』財団法人ヤマハ音楽振興会
- 『よくわかる楽典』ナツメ社



【著者略歴】

舟橋三十子 (ふなはしみとこ)

東京藝術大学音楽学部作曲科卒業、同大学院音楽研究科修了。日本大学芸術学部講師を経て、現在名古屋芸術大学音楽学部教授。

作曲を池内友次郎、矢代秋雄、三善晃、永富正之の諸氏に師事。ピアノを小林仁、館野泉の諸氏に師事。

著書：「はじめてのソルフェージュ全5巻」、

「ミュージック・トレーニング全2巻」(いずれも全音楽譜出版社)

翻訳：「オックスフォードの音楽の基礎練習全3巻」(カワイ出版)

新しいソルフェージュ（フルマッシュ・ミュジカル）のテキスト

「シーベルトを歌いながら学ぼう全3巻」

「モーツアルトを歌いながら学ぼう全2巻」

「シューマンを歌いながら学ぼう全4巻」

「音楽家への第一歩全8巻」(いずれもパリ A.Leduc 社)等がある。

<http://www.formationmusicale.net/>

名曲のスタイル分析全80曲 クラシックの聴き方入門

2010年4月20日 初版発行

2012年6月10日 第2版発行

著 者——舟橋三十子

編 集——古川 亨

発 行 者——谷口恵治

発 行 所——株式会社ヤマハミュージックメディア

〒171-0033 東京都豊島区高田3-19-10 暁栄高田馬場ビル

営業部 電話03-6894-0260／制作部 電話03-6894-0250(代)

インターネット・ホームページ <http://www.ymm.co.jp>

カバー・イラスト——荻野麻樹

表紙デザイン——村上佑佳

制 作——株式会社アルスノヴァ

印刷・製本——株式会社平河工業社

出版物、録音物を権利者に無断で複製(コピー)することは著作権の侵害にあたり、著作権法により罰せられます。

また本書の内容を無断転用等することは一切これを禁じます。

本書の定価はカバーに表示してあります。

造本には十分注意しておりますが、万一落丁、乱丁等の不良品がございましたらお取り替えいたします。

©Printed in Japan ISBN978-4-636-85491-6

©Mitoko Funahashi